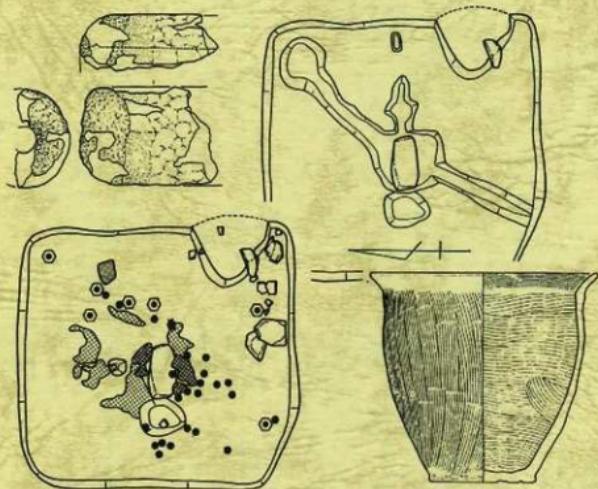


山梨県北巨摩郡大泉村

東原遺跡

—県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書—



1998

山梨県教育委員会

序

本報告書は八ヶ岳南麓の大泉村での県営圃場整備事業に伴い発掘調査を実施した東原遺跡の調査成果をまとめたものであります。

大泉村は縄文時代晩期の配石遺構で有名な国史跡金生遺跡と、甲斐源氏の祖、源清光の居城とされる国史跡谷戸城跡の2ヵ所の国史跡を持つ、遺跡の宝庫であります。このような地域に3000haという広大な面積を対象とした圃場整備事業が1979年より開始されました。当時、山梨県埋蔵文化財センターは設立されておらず、また大泉村にも埋蔵文化財担当職員は配置されていない状況でした。山梨県教育委員会文化課は、事業担当課と協議し、遺跡分布調査、試掘調査を実施し、大泉村に担当職員が採用されるまでの間、発掘調査そのものも担当することになりました。この間、1979年寺所遺跡、1980年金生遺跡、1981年城下・原田遺跡、1982年天神遺跡と東原遺跡の発掘調査を実施しました。山梨県埋蔵文化財センターも1982年に設立され、天神遺跡と東原遺跡は当センターが設立当初に手懸けた発掘調査がありました。また、1982年には大泉村に臨時ではありますが担当職員が配置され、天神・東原の調査以降、圃場整備関係の発掘調査は大泉村が担当する体制となりました。その整理作業および報告書作成につきましては、1985年から予算化がなされ、各年度に1遺跡の整理作業、報告書作成を実施してまいりました。こうした経緯を経て、東原遺跡の報告書が発掘調査から16年を経て刊行される運びとなりました。

東原遺跡は小鍛冶遺構を伴う平安時代集落跡として発掘当初から注目されました。集落の存続期間は9世紀第2四半期から10世紀第3四半期の間であり、小鍛冶遺構はその中でも前半期に構築され利用されたものです。12軒ある竪穴住居址は各時期に2~3軒程度の小規模な集落で、しかもそれぞれが分散して位置していると分析されました。こうした集落像や小鍛冶遺構など東原遺跡の調査成果が、平安時代の地域社会の解明の一助となれば幸甚です。

最後に、種々のご協力をいただいた関係機関各位、また発掘調査、整理作業にあたられた方々に厚く御礼申し上げる次第です。

1998年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 大塚初重

例　　言

- 1 本報告書は、山梨県北巨摩郡大泉村西井出字東原に所在する東原（ひがしはら）遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、山梨県農務部の依頼を受けて、山梨県教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査および整理作業は山梨県埋蔵文化財センターが行った。
- 4 試掘調査の担当は新津健、発掘調査の担当は新津健、保坂康夫である。
- 5 本書の執筆および編集は保坂康夫が行った。
- 6 本書にかかる出土品および図面、写真は、山梨県埋蔵文化財センターが保管する。
- 7 発掘調査および整理・報告書作成にあたって次の方々や機関に御協力御指導をいただいた。記して御礼申し上げる次第である。
伊藤公明、猪股喜彦、櫛原功一、佐藤勝広、平野　修、峡北土地改良事務所、大泉村教育委員会、大泉村土地改良区、大泉村東原地区。

目 次

序

例言

第1章 発掘調査の経過と方法	1
第2章 遺跡の立地と環境	
第1節 遺跡の概要	1
第2節 周辺の遺跡	5
第3章 遺構と遺物	
第1節 縄文時代の遺物	5
第2節 平安時代の遺構と遺物	7
1号住居址 (7~11)、2号住居址 (11~12)、3号住居址 (12)、4号住居址 (12~15)、 6号住居址 (14~18)、7号住居址 (16~19)、8号住居址 (19~25)、9号住居址 (25~26)、 10号住居址 (26~28)、11号住居址 (27~34)、12号住居址 (34~38)、13号住居址 (38~42)、 小鋸冶遺構 (42~45)、掘立柱建物址 (45~48)、溝 (48~51)、ピット群 (51~53)、 特殊遺構 (53)、石製品 (53~57)、転用窓 (56~57)、鉄製品 (56~57)	
第4章 結 語	57
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 東原遺跡調査区（網点）と試掘坑（小四角、黒タリは遺構・遺物出土）配置図 (1/2000)	2
第2図 東原遺跡遺構分布図 (1/700)	3
第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (1/25000、中央黒丸が東原遺跡調査地点)	4
第4図 縄文時代の土器 (1/3)	6
第5図 5号土坑出土黒曜石原石 (1/2)	7
第6図 1号住居址 (1/60) とカマド (1/30)	8
第7図 1号住居址出土土器 (1/3)	9
第8図 2号住居址 (1/60) とカマド (1/30)	10
第9図 2号住居址出土土器 (1/3)	11
第10図 3号住居址 (1/60) とカマド (1/30) および出土土器 (1/3)	13
第11図 4号住居址 (1/60) とカマド (1/30)	15
第12図 4号住居址出土土器 (1/3)	15
第13図 6号住居址 (1/60)	16
第14図 6号住居址カマド (1/30)	17
第15図 6号住居址出土土器 (1/3)	18
第16図 7号住居址 (1/60)	19
第17図 7号住居址出土土器 (1/3)	19
第18図 8号住居址 (1/60)	20
第19図 8号住居址カマド (1/30)	21

第20図	8号住居址出土土器（1）（1／3）	22
第21図	8号住居址出土土器（2）（1／3）	23
第22図	8号住居址出土土器（3）（1／3）	24
第23図	9号住居址（1／60）とカマド（1／30）	25
第24図	9号住居址出土土器（1／3）	26
第25図	10号住居址（1／60）とカマド（1／30）	27
第26図	10号住居址出土土器（1／3）	28
第27図	11号住居址（1／60）	30
第28図	11号住居址カマド（1／30）および埋設土器（1／15）	31
第29図	11号住居址出土土器（1）（1／3）	32
第30図	11号住居址出土土器（2）（1／3）	33
第31図	12号住居址（1／60）	35
第32図	12号住居址カマド（1／30）	36
第33図	12号住居址出土土器（1）（1／3）	37
第34図	12号住居址出土土器（2）（1／3）	38
第35図	13号住居址（1／60）	39
第36図	13号住居址（1／60）とカマド（1／30）	40
第37図	13号住居址出土土器（1／3）	41
第38図	小鍛冶遺構（1／60）とカマド（1／30）	43
第39図	小鍛冶遺構出土土器（1／3）	44
第40図	1・2号掘立柱建物址（平面図1／120、土層断面図1／30）	46
第41図	土坑（1／60）	49
第42図	溝（1／240）	50
第43図	1号ピット群（1／120）	51
第44図	2号ピット群（1／120）	52
第45図	特殊遺構（1／30）	53
第46図	溝、土坑、特殊遺構出土土器（1／3）	54
第47図	平安時代石製品（1／4）	55
第48図	平安時代石製品、転用硯、鉄製品（1／3）	56

第1章 発掘調査の経過と方法

東原遺跡は県営圃場整備事業に伴い発見し、発掘調査した遺跡である。東原遺跡の所在する北巨摩郡大泉村では1979年（昭和54）から県営圃場整備事業の事業計画があり、担当課である山梨県農務部耕地課と県教育委員会文化課との間で協議し、同年から遺跡分布調査を実施した。東原工区については1981年（昭和56）に南半分について試掘調査を実施して東原遺跡の所在を確認した。試掘調査は山梨県教育委員会文化課が担当し、2m×2mの試掘坑104ヶ所を配置調査した。その結果、3ヶ所で遺構、遺物を確認したため、調査対象面積を8500m²とし本発掘調査を実施することとなった。

発掘調査は1982年（昭和57）5月10日から10月31日まで実施した。また、整理作業は1996年（平成8）5月1日から1997年3月20日まで実施した。

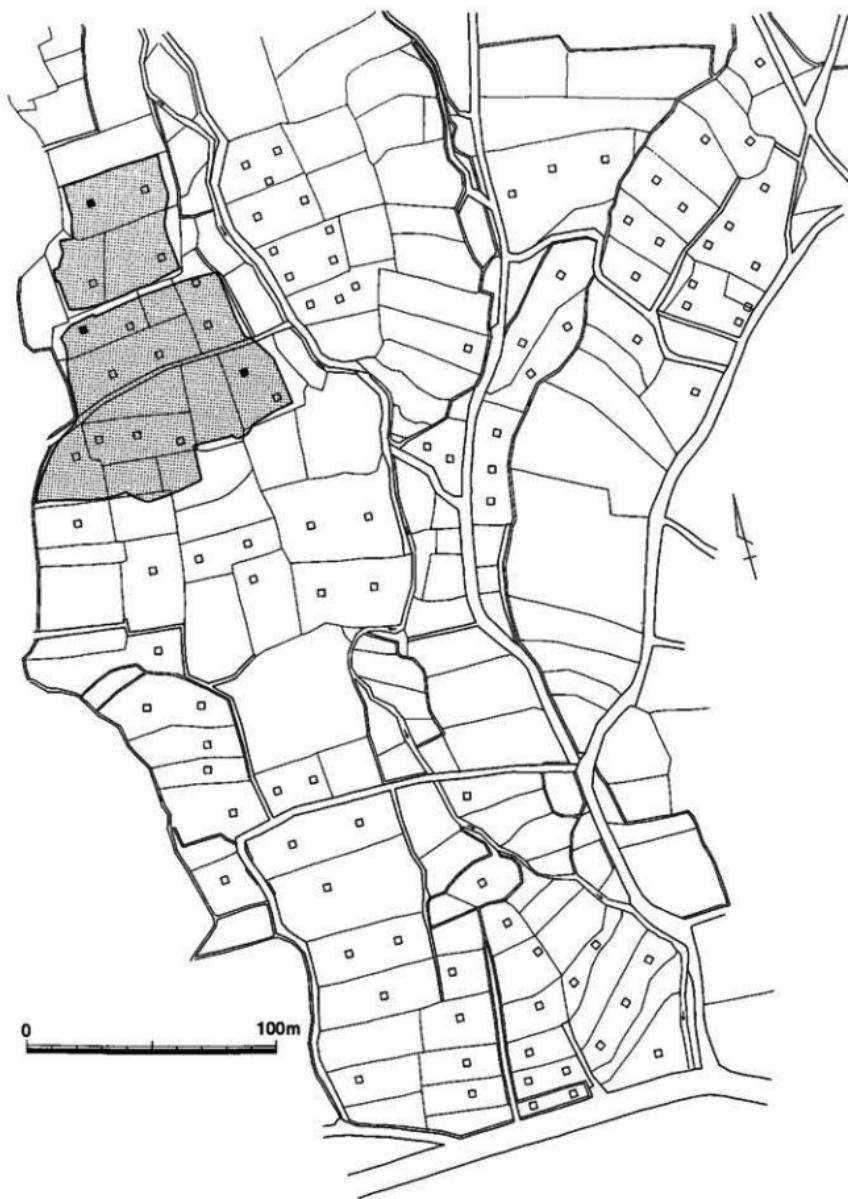
発掘調査ではまず調査対象地域の南半部を対象とし、バックホーにより厚さ30~50cmの耕作土を除去した。北半部は水田で今季までの作付けが保証されていたため、秋の収穫を待って調査をすることとなったため南半部を先行させることとなった。南半部の調査地域の北東部（第2図の破線で囲まれた範囲）については、全体が基底部の砂層が露出したため、この部分を排土置場とした。次に4m方眼のグリッドを設定し杭を打って、実測の基準点とした。南半部を調査終了した後、北半部の水田床土までの30~50cmをバックホーで除去し、4m方眼のグリッドを設定して調査した。

第2章 遺跡の立地と環境

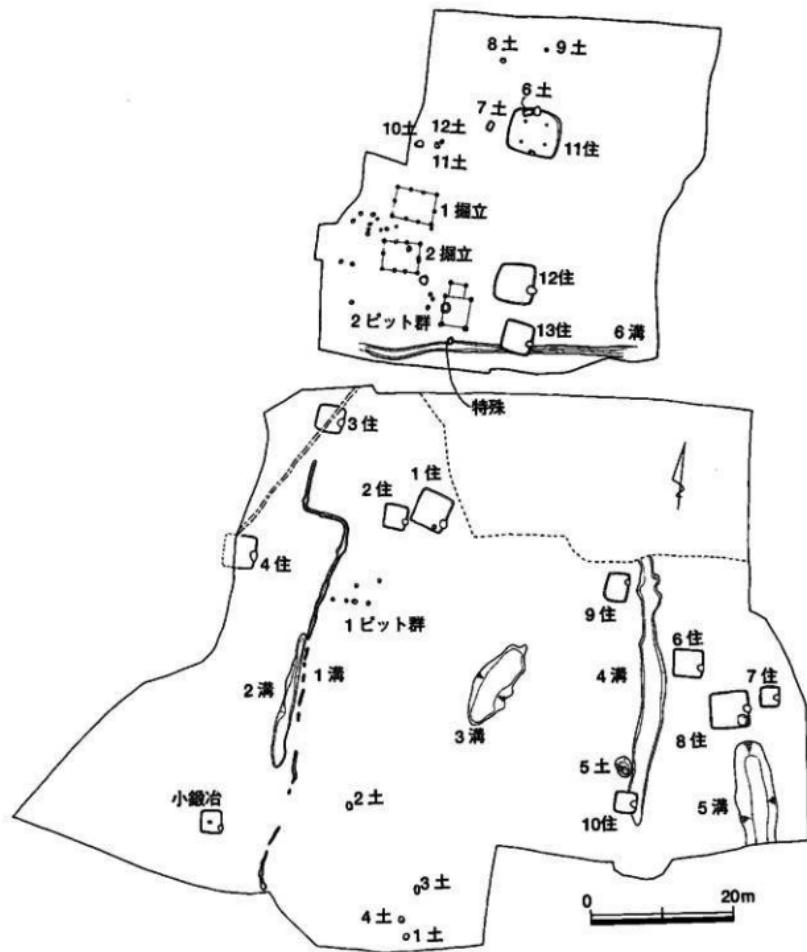
第1節 遺跡の概要

東原遺跡は、山梨県北巨摩郡大泉村字東原に所在する。標高900m。八ヶ岳の東南麓にあたり、火山山麓の緩斜面上に立地する。西に泉原の大湧泉の湧水地を水源とする泉川、東に八ヶ岳の山体奥深くから流れ出る甲川（かぶと）が南流するが、比高差はあまりなく、段丘の形成もみられない。しかし、人の手から突出する指のようななかたちで微高地が発達し、その東西両側に細い河道が形成されている。微高地間で高さに違いがみられ、特に高くて広い面に現在の集落が立地する。本遺跡は、こうした微高地上に立地し、遺跡の東西両側を小河川で挟まれる。東側の河川とは比高が2mほどある急崖で画されているが、西側の河川とは比高差はあまりなく、緩やかに西側に傾斜し、河床へと連続する。遺構はこの微高地の東西幅のほぼ全体に分布するが、南北方向については、1983年（昭和58）に実施された大泉村教育委員会による試掘調査では北側への広がりが確認されず、島状の微高地の北半分を占居しているようである。南北に長い微高地が中央の小河川で南北に分断され、北側に東姥神A遺跡が南側に東原遺跡が立地する。またこの小河川を渡った南西方の微高地には東姥神B遺跡が立地し、1984年（昭和59）に発掘調査が実施され、1985年に報告書が刊行されている（櫛原功一1985「東姥神B遺跡」大泉村教育委員会）。

出土した遺構は平安時代中頃の住居址群である。竪穴住居址12軒、小鍛冶遺構1基、掘立柱建物址2棟のほか土坑12基、溝3本、ピット群2群、特殊遺構1基である。竪穴住居址12軒はすべて平安時代前半のもので、甲斐編年（坂本・末木・堀内1983）の墳期から墳期で、9世紀第2四半期（瀬田1992、平野・櫛原ほか1992）を初源とし10世紀第3四半期までの約150年間に形成されたものである。なお、住居址番号が5号住居址が欠番となっているが、発掘時小鍛冶遺構にこの番号を付けていたためである。小鍛冶遺構は竪穴住居址の中央に金床石を設置したもので、フイゴの羽口や鉄滓、鍛打剥片が多く出土し、Ⅸ期からⅩ期までに形成されたものである。土坑のうち2基は長方形の平面プランで中央に幼児の頭大の礫が置かれており、平安時代住居址の中で最も新しい11



第1図 東原遺跡調査区（鋼点）と試掘坑（小四角、黒ヌリは造構・遺物出土）配置図（1／2000）



第2図 東原遺跡遺構分布図（1／700）

号住居址を切っており、古代後半から中世と思われる（6・7号土坑）。また、黒曜石原石3個を巨礫の間に埋納した土坑（5号土坑）があり、これは縄文時代の可能性がある。他は平安時代のものである。掘立柱建物址は東西に4本、南北に3本の2間×3間の柱間の建物で、両者は近接して位置する。

出土遺物は、縄文時代前期後半の諸磧期の土器から後期の加曾利B期までの土器までが断続的に見られる。遺構の内外から平安時代の遺物と混在するかたちで包含層より出土するが、明確な遺構が存在しない。黒曜石原石が埋納された5号土坑はその性格から縄文時代の可能性があるが、時期の決め手の欠く。平安時代遺物は、甲斐型土器とされる壺、甕、小型甕があり、特に破片であるが置きカマドの存在が注目される。八ヶ岳山麓では置



第3図 遺跡の位置と周辺の遺跡（1/25000）（中央黒丸が東原遺跡調査地点）

きカマドの出土例が僅少である。土師器としてはこの他に、いわゆる信州系とされる内面が黒色研磨された壺や高台付き壺と、特異な壺がある。須恵器は壺、蓋、壺、大壺などの破片があり、突帶付四耳壺の破片が含まれ信州方面より持ち込まれたものが含まれることが理解される。なお、須恵器破片の一部が、いわゆる転用視として利用されている。灰釉陶器では楕、皿、小瓶、壺などの破片である。特殊な遺物として、小鍛冶遺構などから出土したフイゴの羽口、大小の磨り面を持つ礫、砥石、鉄斧、鐵楔、鐵鎌、水晶原石、黒曜石原石などである。

なお、土層としては基盤に八ヶ岳火山の安山岩疊が多量に含む黄褐色土層で、火山灰が土壤化したいわゆるローム層であろう。この黄褐色土層の性格については、安山岩疊の存在は八ヶ岳火山の崩壊期の礫層に近い深度の比較的古いローム層が洗い出されて露出したものか、疊とともに二次堆積したローム層であるかいずれかであろうと思われる。また、その直上には10cm程度の厚さ黒色土層があり黄褐色土層との間は10cm程度の漸移層が形成されている。その上面を30cm程度の耕作土層が覆う。黒色土層は耕作から逃れたプライマリーなもので、この上面から平安時代の遺構が掘り込んでいる。平安時代の遺構の覆土が漆黒色でやや軟質なのに対し、この黒色土層はやや赤みがある感じで比較的硬質である。

第2節 周辺の遺跡

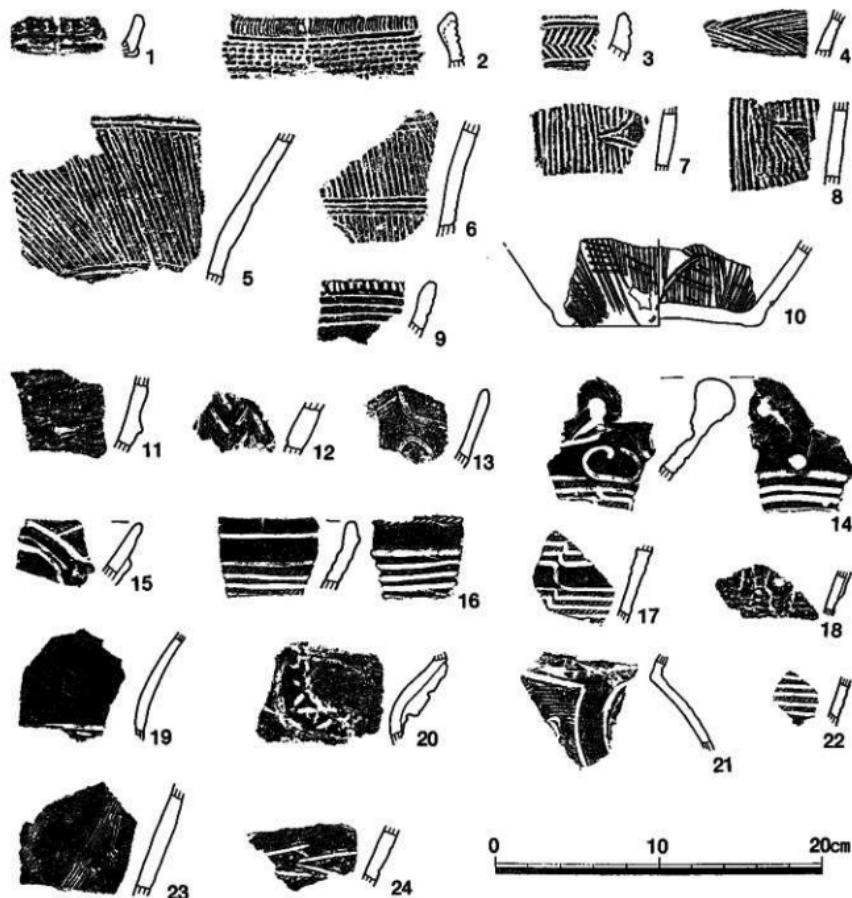
『大泉村誌』によると、本遺跡の周辺には、東姥神遺跡をはじめ、多くの遺跡が所在するが、特に高密度に遺跡が分布するのは本遺跡周辺までで、これより高い標高の地域では遺跡の分布もまばらとなる。これは、遺跡のまばらな地域は耕地化があまり進んでおらず、遺跡の把握が物理的に不可能な地域であることが原因である可能性もあるが、本遺跡が標高900mとかなりの高標高の土地に占地している点や、遺跡の高密度分布の北限界地域付近に位置している点は指摘できよう。平安時代遺跡としては東姥神、小岩清水、東原第2などの遺跡が位置し、これより高標高の遺跡は北西方にある標高980mの西屋敷遺跡しかない。なお、『大泉村誌』では東原遺跡は東原第1遺跡と記載されている。また、東姥神遺跡と記載された東姥神B遺跡では、本遺跡と同様に甲斐編年Ⅳ期からⅦ期までの平安時代前半の住居址が8軒が出土し、その内1軒がやはり甲斐編年Ⅳ期であり、非常に似た内容の集落である（柳原功一1985『東姥神B遺跡』大泉村教育委員会）。

本遺跡西方の泉川上流には大和田遺跡、大和田第2・3遺跡、方城第1遺跡が発掘調査されているが、いずれも縄文時代中期の集落である。現状では、圃場整備事業での試掘調査を実施したにもかかわらず、東姥神遺跡、東原遺跡以北では平安集落は発掘されていない状況がある。そうした、北限、高標高地域に小鐵冶遺構が集中する点が注目される。

第3章 遺構と遺物

第1節 縄文時代の遺物

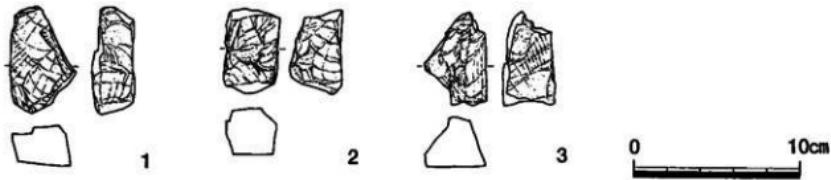
第4図に本遺跡出土の縄文土器の主立ったものを示した。1は口舌部直下に断面コの形の工具により押し引き文を一条回らし、その下には隆帶状に粘土紐を貼付したもので、受け口状の口縁部である。胎土には石英、長石粒子を多く含む。前期後半、諸磯段階以降と思われる。2～8、10はいわゆる梨久保式の一群で、中期初頭の半截竹管による平行沈線を多用する集合沈線系の土器群である。胎土の石英、長石、雲母粒子を多く含み、輝石粒子と思われる鉱物を多く含むものもみられる。9も中期初頭、五領ヶ台期の土器で、口舌部に刻目、口舌直下に沈線が回り、胎土は石英、長石、雲母、輝石粒子を多く含む。11は中期末のもので、隆帶がみられ、胎土の石英、長石、雲母を含む。12は、細い半截竹管状の工具でハの字文様を施文したものの、石英、長石、輝石のほかディサイトらしき岩片を含む。中期終末の曾利Ⅴ段階のものと思われる。13は、中期末のもので、織維を束ねたような工具で浅い沈線文を施文している。石英、長石、雲母を胎土の含む。14は加曾利B I式の表面がよく磨かれた精製土器の口縁部である。15は堀ノ内式の口縁部で白褐色の緻密な胎土で、内外面とも磨かれている。16は加曾利B I式の精製土器である。17はやはり加曾利B I式の精製土器である。18は堀ノ内Ⅱ式の深鉢胴部破片で、横位に二状の断面3角形状につまみ上げられた隆線に刻目を施し、その上に縦位に隆線を施して8の字状貼付文の一部と思われる文様がみられる。19は後期初頭と思われるもので、沈線文が見られ外面がよく磨かれている。20は堀ノ内Ⅰ式並行で北陸、新潟方面の土器の様相を呈するものである。非常に分厚い隆帶を垂下させ、そのうえ



第4図 縄文時代の土器 (1/3)

に棒状工具によるハの字状の刻目を入れている。内外面とも粗いナデ調整で、胎土は脆く、白色、赤色の岩片が目立つ。21は壠ノ内式の注口土器の胸部破片である。22は加曾利B I式の精製土器の胸部破片である。23は壠ノ内式の深鉢の胸部破片で、櫛齒状の工具による条線文を縦位に施文している。24は加曾利B式と思われる綾杉状沈線文を施したものである。このように、本遺跡では前期後半、中期初頭、中期末、後期の土器が見られ、中期初頭と後期の土器が量的に豊富である。

第5図は5号土坑出土の黒曜石原石である。1は最大長6.3cm、最大幅4.2cm、厚さ2.6cm、重さ70gである。2は最大長5.3cm、最大幅4.2cm、厚さ3.6cm、重さ65gである。3は最大長5.7cm、最大幅3.7cm、厚さ3.4cm、重さ55gである。いずれも塊状のズリ石である。この他に出土遺物がなく時期の決め手に欠くが、黒曜石原石埋納構造と考えられる点から縄文時代に帰属させることとした。なお、土坑については第41図に記載する。



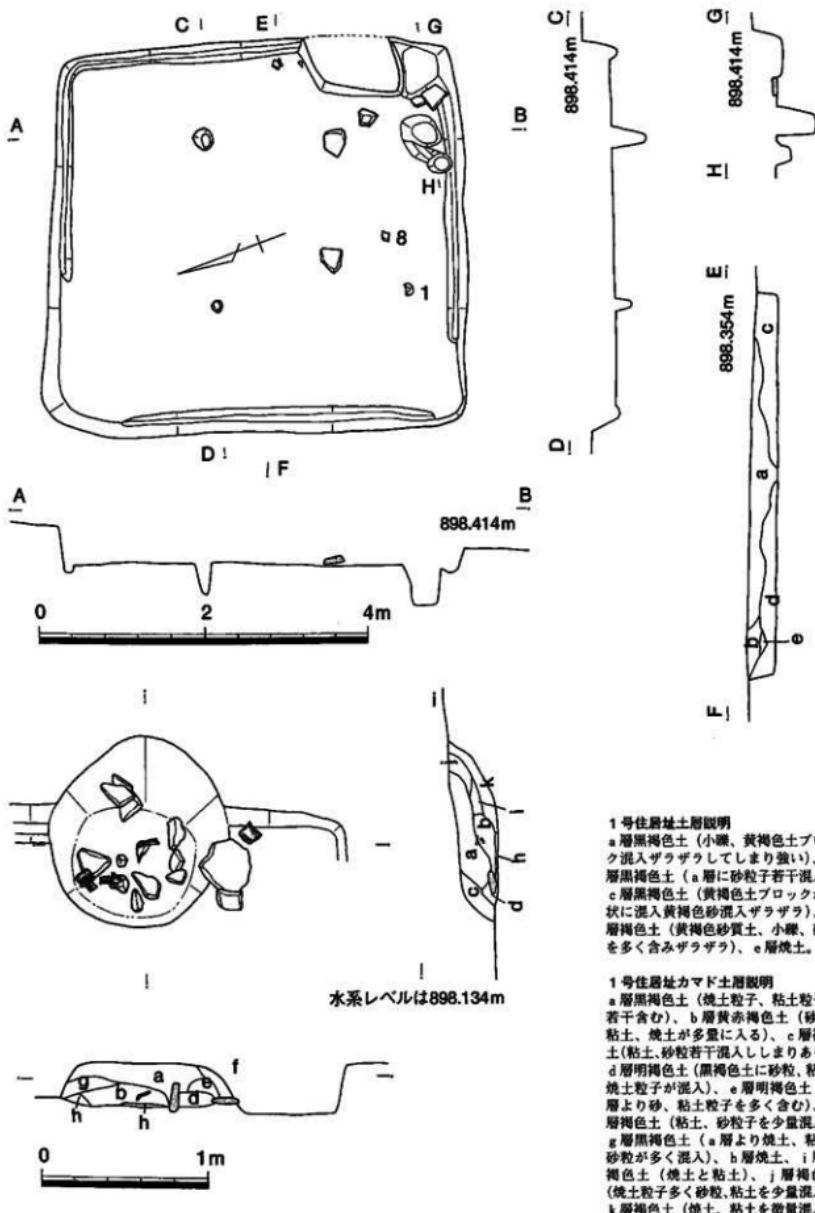
第5図 5号土坑出土黒曜石原石（1／2）

第2節 平安時代の遺構と遺物

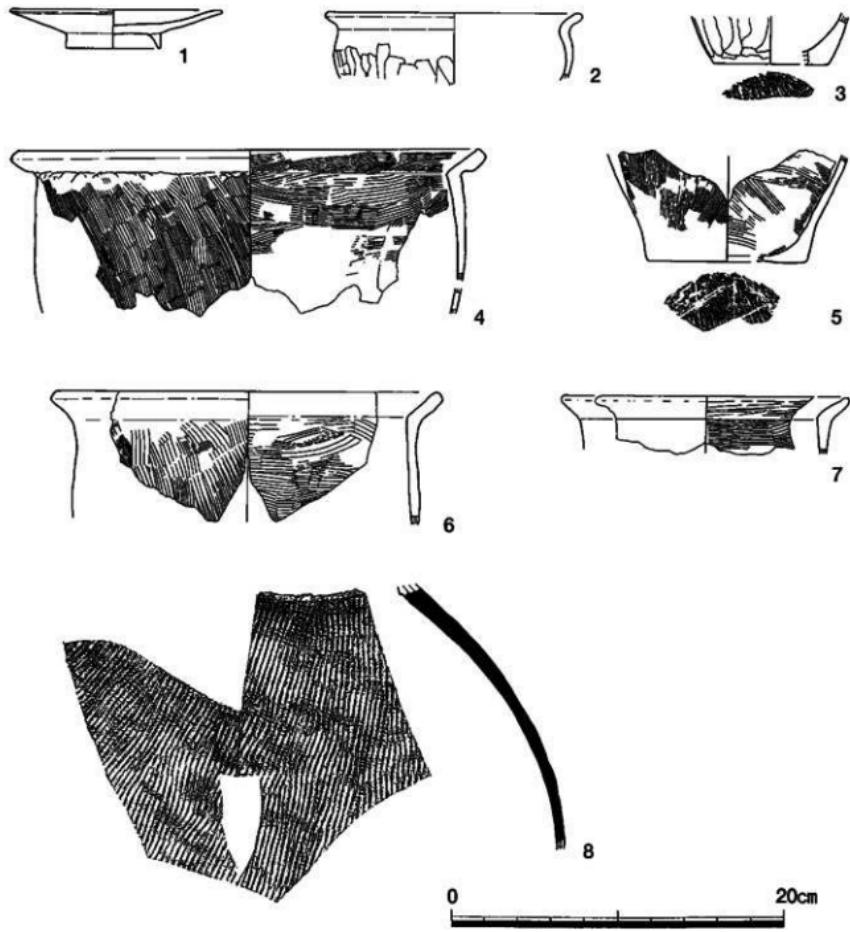
1号住居址

遺構（第6図）南側調査区の北東部に4軒の住居址が集まるがその住居址群の中で最も東に位置しなおかつ最も大型である。南北長4.9m～5.1m、東西長4.7mの隅丸方形の形態で、壁高は床面から20～46cmである。周溝があり、北壁の中央やや西よりから東壁のカマドまでのものと、南壁のカマドから西側を若干欠く部分までのもの、西壁の北部と南部を若干欠くものの3本が見られる。周溝の深さはおおむね10cm程度である。柱穴と思われる小ピットが2基確認されている。ひとつは東壁の周溝立ち上がりから中心まで90cm、北壁周溝立ち上がりから160cmで、直径25cm、深さ45cm。もうひとつは、西壁周溝立ち上がりから120cm、北壁基底部から190cmで、直径15cm、深さ20cmである。両柱穴は南北壁に平行し、住居址の中央の東西線よりやや北により配列する。カマドの南脇には南北40cm、東西60cmの深さ5cm程度と浅いピットがある。カマド底面より5cmほど低く、カマド脇が「床面よりやや低くなっている」と表現したほうがよいかもしれない。その西側には扁平な礫が2個置かれ、床と浅いピットとの境界となっている。そのさらに西側に直径約40cm、深さ50cmのピットと、直径約30cm、深さ20cmの小ピットがあり、溝でつながれている。カマドは、南東コーナ近くに位置する。袖石等があったであろうことがごく抜かれている。床面上に散乱する巨礫がその一部であった可能性がある。カマド内には構築材の一部と思われる小礫が散乱している。断面に直立している小礫は袖石に添って立てられていたもの可能性があり、袖石の位置を示している可能性が指摘できる。カマド底面は床面を5cm程度掘り込んでおり、また壁を幅1m、奥行50cmにわたって掘り込んでいる。その背面は緩やかにカーブして立ち上がる。背面そのものは焼けていないが、焼土や粘土を多く含む層がその背面に沿って立ち上がる。

出土土器（第7図）1は黒色土器の高台皿である。全体がロクロ調整され、高台は貼りつけている。住居址南壁近くの床面から出土。2は小型甕である。内外面ロクロ調整の後、外面は肩部より下を縦方向のヘラ削りを行なっている。ヘラの動きは底部側から口縁部側へである。甲斐型壺に近似する赤褐色緻密胎土で、外面に黒色付着物が見られ、一部は口縁部から流下したように付着している。カマド内出土。3は小型甕の底部で、内面ロクロ調整、外面縦方向ヘラ削りである。底面は回転糸切り無調整である。胎土は2と同様で、2と同一個体の可能性が高い。覆土中出土。2、3と同一個体と思われる胴部破片3片30gが出土している。4は甲斐型甕の大型破片である。口縁部は厚さが9mmと厚く、口縁部内側で計測した長さが24mmと比較的短く、薄口縁型の口縁外面に薄い粘土紐が貼付された厚口縁型で、その押え込み調整の段階で口舌内側が上方に若干突出する。カマド内出土。5は甲斐型甕の底部である。カマド内出土。6は甲斐型甕の口縁部破片である。厚さ8mm、長さ23mmで、口縁部内側に薄い粘土紐が貼り付けられており、厚口縁型である。口縁部内外面はナデ調整である。覆土中出土。7は甲斐型の小型甕の口縁部破片である。口舌内側がやや突出する。外面は風化のため肌がかなり荒れているが、ナデ調整と思われる。カマド内出土。8は須恵器の大型甕の肩部分の大型破片である。外面は平行叩き目無調整で、



第6図 1号住居址 (1/60) とカマド (1/30)

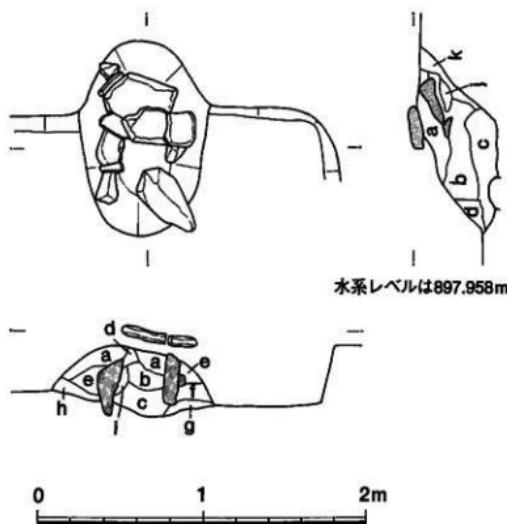
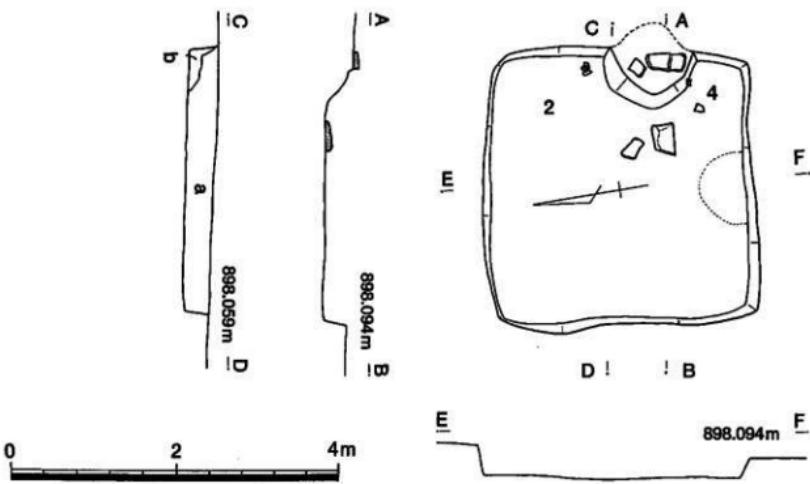


第7図 1号住居址出土土器 (1/3)

内面は平滑にナデ調整されている。外面の色調は赤灰色で若干光沢がある。器壁は厚いところで9mm、薄いところで5mmで、全体に薄い。口縁部直下の破片がカマド脇のピット内出土、他は覆土中出土。

この他の出土土器を含めた総出土量は2356gで、甲斐型壺が10gで丸口縁で暗文不明のものがある。胴部破片はいずれも暗文がなく、外面手持ちヘラ削りと回転ヘラ削りで、1片は玉縁口縁になると思われる。黒色土器の壺も130gしか出土していない。甲斐型甕はカマド内から多量に出土し、いずれも薄口縁のやや厚手のものである。総重量1717g。小型甕のうち内面ロクロ調整、外面横方向の細かいカキメ調整の小破片が3片30g出土しており、ロクロ整形の小型甕の総重量は168gである。須恵器は壺と甕の破片が295g、灰釉陶器は壺の小破片が1点10gである。

時期の決め手となるのは、カマド内出土の厚口縁型の甲斐型甕である。厚口縁型は甲府盆地東部地域では甲斐



水系レベルは 897.958m

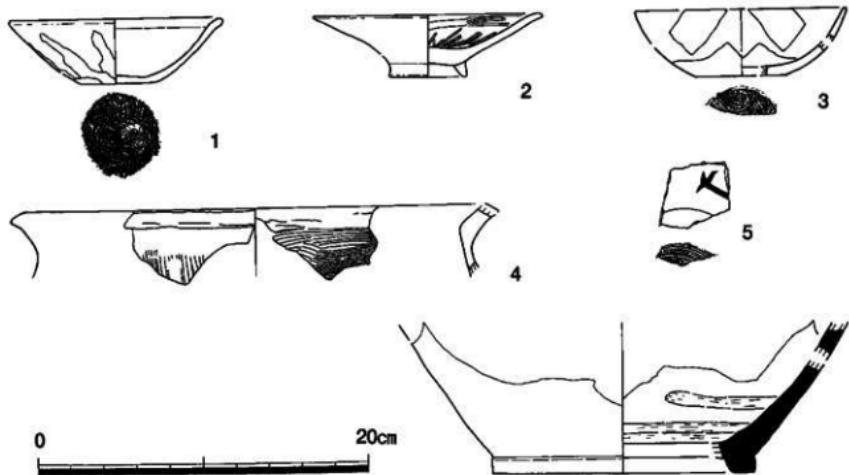
2号住居址土層説明

a層黒褐色土（小礫、黄褐色土ブロックを含む）、b層褐色土（黄褐色土粒子やブロック、焼土粒子が混入）

2号住居址カマド土層説明

a層黒褐色土（砂粒、粘土粒子を若干混入）、b層黄褐色土（砂粒、粘土主体）、c層明褐色土（砂粒、粘土、焼土粒子多く含む）、d層黒褐色土（柔らかく握乱層）、e層黄褐色土（a層とc層の混合土）、f層黒褐色土（砂粒若干混入）、g層黄褐色土（堆山）、h層黒褐色土（砂粒、焼土粒子を含まずしまり強）、i層黒褐色土（焼土、粘土を若干混入し柔らかくボロボロ）、j層黒褐色土（砂粒、焼土粒子を少量含む）、k層褐色土（細かい粘土粒子、砂粒を微量に混入しまりあり）。

第8図 2号住居址 (1/60) とカマド (1/30)



第9図 2号住居址出土土器 (1/3)

型編年X期から見られるが、八ヶ岳地域ではX期から見られる。そして、X期に見られる八ヶ岳地域の厚口縁型は、厚さが8~11mmと比較的薄い。本住居址の厚口縁型の甲斐型壺もこの範囲であり、X期の様相である。また、黒色土器の高台皿は、韋崎市の宮の前遺跡では甲斐編年X期からXII期にかけて見られる。この両者を根拠に、X期としたい。

2号住居址

遺構（第8図）南調査区の北西住居址群内にあり、1号住居址の西側に隣接する。かなり接近しているため、両者の同時存在はありえないと思われる。南北3.3~3.3m、東西3~3.3mの隅丸方形である。壁高は35cmから25cmである。周溝はなく、柱穴、ピット等も見られない。南壁中央部に接してある破線部分には、床面より若干浮いた位置に焼土ブロックが多く分布していた部分である。

カマドは南東隅に近い位置にある。むかって左側の袖石は板状の巨礫が2本樹立されている。その間に小型の石がこれらの巨礫に直行するかたちで挟み込まれている。むかって右側の袖石は1個の巨礫が樹立した状態で残存する。おそらく、左側同様な構造であったと思われ、板状の巨礫1個が抜き取られているものと思われる。おそらく、カマドの前面にある板状の巨礫がそれだろう。なお、右側の袖石の手前の巨礫は、自然状態で埋没しているもので、人為的なものではない。奥側の袖石の上には天井石が残存している。また、その背後には、やや低い位置に板状の巨礫が天井石状に伏せられている。その下位の土層にb, c, k層のように粘土や焼土粒子を大量に含む褐色系色調の土層があり、カマドの構築材の崩壊したものと思われ、この天井石もこのうえに乗せられている状態で崩壊しているものと理解できる。カマドの背後は幅80cm、奥行50cmで外側に掘り込まれており、1号住居址と同様な構造である。

出土土器（第9図）1は甲斐型壺である。口径13cm、底径4.3cm、器高3.9cmである。玉縁口縁で内面に暗文が見られない。覆土中出土。2は黒色土器の高台皿である。内面の黒色の度合いが弱く黒灰色でむらがある。また、内面底部付近は放射状のヘラ磨き、口縁部付近は同心円状のヘラ磨きが見られる。床面出土。3は、内面研磨の赤褐色を呈する壺で、底部は回転系切り無調整である。非常に硬質、緻密な胎土で、甲斐型とは違うし、いわゆる信州系のものとも相違する独特の土器である。覆土中出土。4は甲斐型壺で、厚さ11mm、口縁部内側長20mmで

口縁部外側に粘土紐を貼りつける厚口縁型である。口舌部が外側に突出する。床面出土。5は黒色土器の壺の底部破片で墨書き土器である。覆土中。6は須恵器の高台付きの壺底部と思われる。白灰色で外面上半部に濃緑色で白褐色の斑点をもつ自然釉が見られる。覆土中。

出土土器の総重量は1425gで、甲斐型壺破片は102gあり、図示した以外の内口縁部6片で玉縁口縁5片、丸口縁1点でいずれも暗文は見られない。内面黒色の甲斐型壺が2片あり隆玉縁口縁である。黒色土器が164g、甲斐型や黒色土器以外の壺片が15gである。甲斐型壺は胴部破片を中心に312g、甲斐型小型壺が2片10gある。須恵器が大腹片を中心に壺小片など600gで灰釉陶器はない。

時期については1の甲斐型壺が暗文がなく口径も大型であるが口縁の隆玉縁化が見られない甲斐編年XII期のものと判断される。4の甲斐型壺も比較的厚手の厚口縁型でXII期以降である。須恵器壺破片の出土は覆土中出土ではあるものの、並崎市の宮の前遺跡では須恵器壺はXII期まで見られるらしい。甲斐型壺の破片も、XII期に特長的な隆玉縁口縁は見られないので、XII期としてよいだろう。

3号住居址

遺構（第10図）南調査区の北西住居址群のうち最も北西端に位置する。南北4～3.5m、東西3.9mの隅丸方形である。壁の高さは15～25cmである。北東から南西に暗渠が掘り込まれ擾乱されている。周溝はいずれの壁の直下にも見られるが、コーナー部分で途切れている。また、南壁では中央が途切れている。カマドの南脇には直径25cm、深さ15cmの小ピットがある。カマドは南東コーナー近くに位置する。むかって左側の袖石が残存する。2個の板状の巨礫が直立した状態で出土している。その北側に自然の巨大礫があり、これに奥の袖石を立て掛けている。むかって右側の袖石は失われており、掘り込みが見られる。掘り込みの背後の巨礫は自然礫である。焚き口に2個の薄い板状の礫が敷かれているようである。カマドの背後に幅50cm、奥行20cmほど張り出している。カマド底面は床面より10cmほど掘り込まれている。

出土土器（第10図）第10図左上に図化できた唯一の土器を示した。黒色土器の壺である。外面はロクロ調整で赤褐色を呈するが、本来は白褐色のものが二次焼成を受けた可能性がある。

土器出土量は251gときわめて少ない。甲斐型壺はなく、黒色土器が151g、甲斐型壺胴部破片が50g、ロクロ整形の小型壺破片が50g出土している。須恵器、灰釉陶器はない。

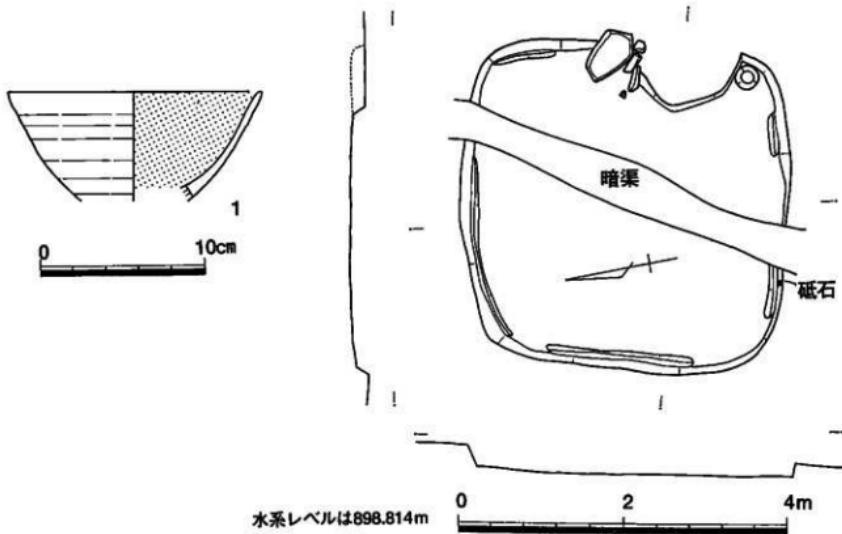
時期の決め手に欠く。

4号住居址

遺構（第11図）南調査区の北西住居址群のうち最も西に位置する。住居址の西半分は現在の水路で切られている。したがって東西方向の長さは不明であるが、南北は4.5mである。周溝はなく、壁高は20cm程度である。

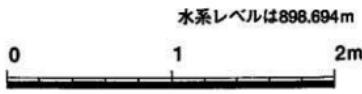
カマドは東壁中央、やや南より構築されている。まず前面に天井石があたかもカマドの焚き口をふさぐように袖石に立て掛けられてあった。袖石は左右とも1個の板状の巨礫が直立した状態で残存する。むかって左側の袖石にはその内側に1個の板状の礫が立て掛けられるようにして出土。右側の袖石はその外側に2個の礫が浮いた状態で見られ、さらに奥に1個の板状の巨礫が浮いた状態で出土しているがこれは奥側の袖石の可能性がある。カマド中央には厚さ10cm、幅20cm、長さ20cmの角柱状の礫が樹立されている。支脚と思われる。支脚の前面にも1個の礫が立て掛けられている。支脚の上には浮いた状態で1個の礫が見られる。カマド背後はあまり突出しておらず、幅50cm、奥行15cmほどの張り出しが見られる程度である。

出土土器（第12図）1は甲斐型壺の口縁部破片で、厚さ7mm、長さ31mmで、薄口縁型であるが口縁部外側には薄い粘土紐を貼りつけた跡が明瞭で、口縁部を強化している状況が窺える。その上を横ナデ調整していく、この調整の影響で口舌内側がやや突出する。内面に白色粘土状の物質がマダラ状に付着する。覆土中出土。2は大型壺であるが甲斐型ではない。外面縦ハケ、内面は口縁部も含めて横ハケの調整という点では甲斐型と同じであるが、内外面とも明るい赤褐色を呈し、石英、長石、輝石の微細粒子を含み甲斐型に特長的な大粒の雲母を含まず



3号住居址カマド土層説明

a 層黒褐色土 (焼土粒子を若干含み均質でし
まりあり)、b 層赤褐色土 (焼土粒子を中心
に黒褐色土混入)、c 層黒褐色土 (柔らかく
グズグズ焼土混入し袖石が抜かれたもの)、
d 層明褐色土 (黄褐色土粒子を多く含む)、
e 層褐色土 (焼土粒子若干混入)、f 層黑色
土、g 層褐色土 (焼土粒子微量混入)。



比較的緻密で硬質な胎土である。カマド内出土。3は薄口縁型の甲斐型甕である。厚さ8mm、長さ29mm。口縁部外側に薄い粘土紐を貼りつけ強く押え込んで渦曲させている。床面出土。4は甲斐型甕の底部破片である。内面は黒色を呈し、底部の破断面も黒くなっている。この破断面は底部外側から細かく加熱され底が抜かれた状態である。覆土中出土。

土器総重量は1469gで、甲斐型甕1片10g丸口縁、黒色土器3片20g、ロクロ整形小型甕7片60gでカキメのもの5片、1号住居址同様の縫ヘラ削りの小片1片。甲斐型小型甕1片10g、甲斐型甕が最も多く682g、甲斐型以外の大型甕が687gである。須恵器、灰釉陶器はない。

時期については、薄口縁の甲斐型甕しかなく、他の住居址の時期からして甲斐編年Ⅳ期であろう。

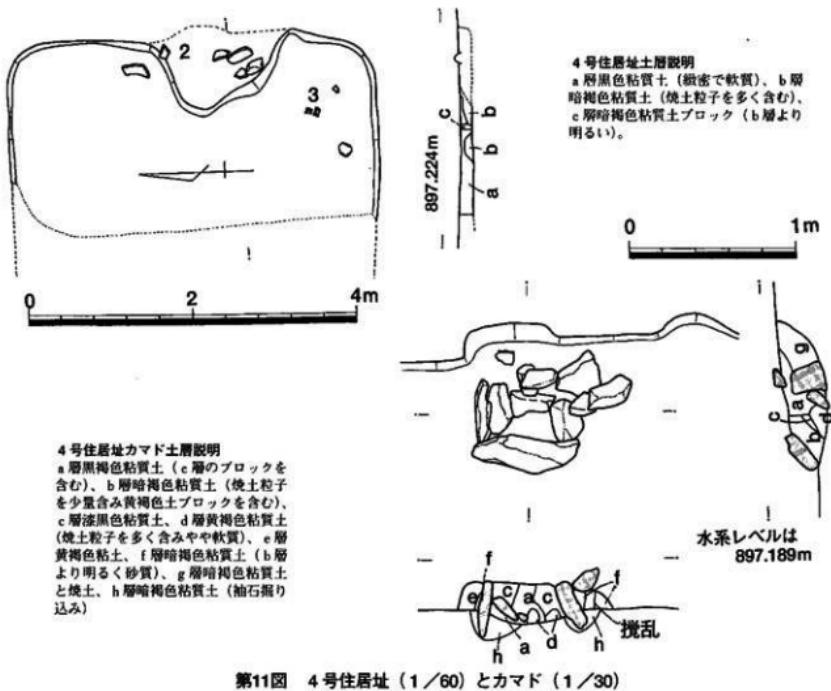
6号住居址

遺構（13図） 南半部分調査地域の東部に5軒の住居址が集まっているが、この中のほぼ中央に位置する。南北3.8~4m、東西4.3mの隅丸方形である。周溝はなく、壁高は55~60cmである。

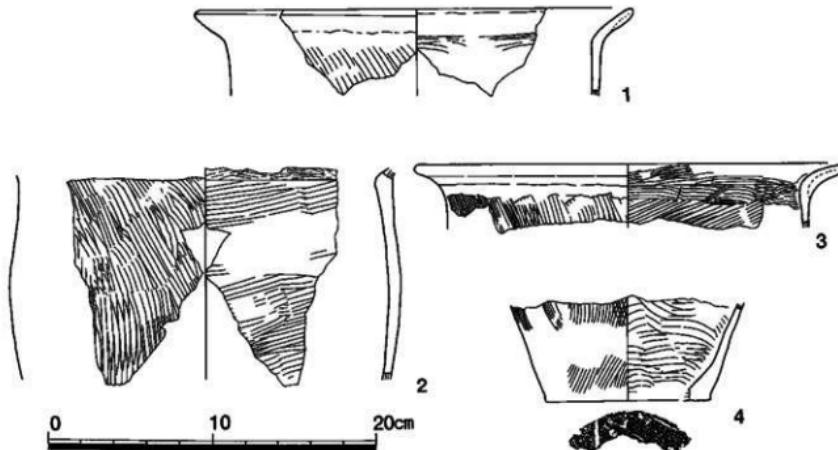
カマドは東壁中央やや南よりに構築されている。むかって左側の袖石は3個の板状の巨礫は直立している。前面の2個は小さく中央のものは前面と奥の巨礫の間をふさぐように外側から立て掛けられているようにしてある。奥の巨礫は大きく、前面のものの2倍があり、袖石の頭が段差をもつように設置されている。むかって右側の袖石は4個が直立する。前面の3個のうち2個は直線で並び、1個が奥の巨礫と中央の礫との間に内側から添えられるようにして立て掛けられている。奥の巨礫は前面のものよりやや大きめであるが、左側ほどに大きさに差がみられないが、掘り込みの深さを調整し左側同様に段差をもっている。右側の袖石の外側に高さ20cm、長さ60cm、幅15cmにわたって構築材の黄褐色土が残存する（図破線部分）。カマド燃焼部中央には、厚さ7cm、最大長30cmの平板な礫が敷かれている。右側の前面袖石の上には天井石と思われる板状の巨礫が乗っている。その他に礫が多量の見られるが、皆投げ込まれたような状態で、カマド内覆土中に浮いた状態で出土している。カマド背後は幅80cm、奥行35cmにわたって突出している。

出土土器（第15図）1は隆玉縁口縁の甲斐型甕である。暗文は見られない。3ヶ所に同様な文字らしきものが書かれた墨書き土器である。底部は手持ちヘラ削りであるが中央に糸切り痕が残存する。ほぼ完形の個体である。南壁中央やや東よりの壁直下床面で出土している。2は黒色土器の甕で二分の一ほどの個体である。口縁部が外反する。底部は回転糸切り無調整だが粘土が乾かない状態で置かれていた時の傷が激しい。底部内面中央がヘソ状に強く突出する。カマド右脇出土。3は黒色土器の甕底部である。底部外面は明瞭な回転糸切り。底部内面のヘソ状の突出は押え込まれて平坦になっている。カマド右脇出土。4~7は墨書き土器破片である。4、6、7は甲斐型甕でいずれも内面に暗文があり、本住居址の廃絶段階の時期とは相違する。5は黒色土器の甕である。いずれも覆土中出土。8は甲斐型甕で、口縁部断面形態が口舌部の厚さより口縁部付け根の厚さの方が厚くなるるわゆる末広口縁である。厚さ14mm、長さ20mm。口縁部内側はハケ目の後ナデ調整を行なっている。カマド内出土。9は甲斐型甕の末広口縁で厚さ15mm、長さ20mmある。雲母が他の甲斐型甕よりも多く、石英、長石粒子も大粒で多く含まれ、比較的脆弱な胎土である。この特長の胎土は甲斐型でも終末期の様相で、これ以降の甕にも引き継がれる。カマド内出土。10は甲斐型の置きカマドの口縁部破片である。表面右縁部に庇を取り付けた部分のナデ調整がかろうじて残存している。覆土中出土。11も甲斐型の置きカマドの一部で、下降する庇部分である。覆土中出土。12は須恵器の甕である。口舌が外反し非常に薄い。胎土は硬質でしっかりしており、口舌部に濃緑色の自然釉が見られる。覆土中出土やグリッド出土が接合。13は須恵器の大型甕の口縁部である。外面に光沢のある濃緑色の自然釉、内面には白褐色の斑点が集合したような自然釉が見られる。覆土中出土。14は須恵器で凸帶付き四耳壺の破片である。凸帶の斷面は四角形である。覆土中出土。15は灰釉陶器の椀で、口舌が強く外反し、内面にハケかけの灰釉陶器が見られる。覆土中出土。

土器総重量3453g。甲斐型甕は暗文のないものがほとんどで405gである。内面黒色の甲斐型甕17片を含む。黒色土器の甕が510g。その他の甕が40g。甲斐型甕は図示した他に厚口縁7片、薄口縁4片、末広口縁2片の



第11図 4号住居址 (1/60) とカマド (1/30)



第12図 4号住居址出土土器 (1/3)

他、胴部破片などで総重量2043g。置きカマド片は他に6片あり103g。甲斐型小型甕2片70g。須恵器が大型甕や壺の破片が220gである。

時期については、床面出土の1の甲斐型壺で甲斐編年層期のもの、カマド内出土の末広口縁の甲斐型甕で層期のものから、廃絶時期を層期とするのが妥当であろう。

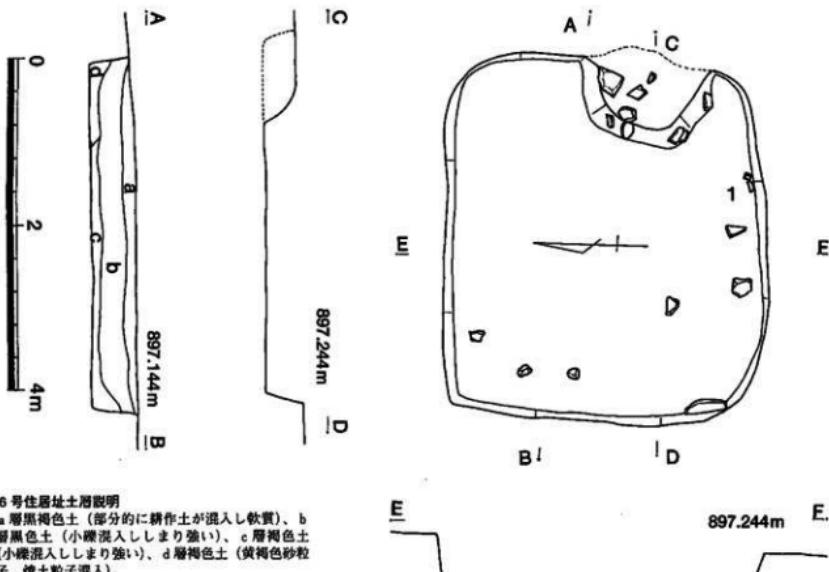
7号住居址

遺構(第16図) 南半部調査地域東部の住居址群の中で最も東に位置し、さらに本遺跡の中で最も小型の住居址である。南北2.6~2.7m、東西2.6~2.7mの隅丸方形である。周溝はなく、壁高は10~15cmである。

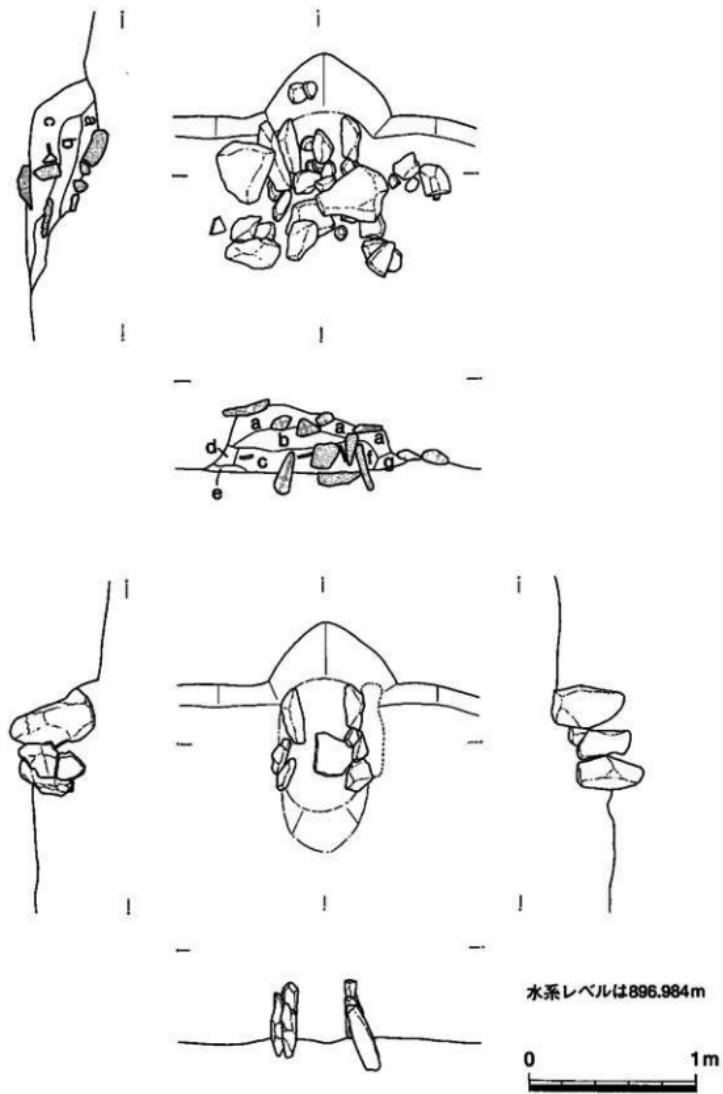
カマドの位置すべき東壁中央南よりの部分に直径20cm内外の礫が散乱し、焼土(破線部分)も見られることから、カマドが存在したものの完全に壊され、さらに袖石、天井石などは屋外へ持ち去られてたものと思われる。

出土土器(第17図) 1は黒色土器の壺でみこみ部分に放射状、口縁部に横方向のヘラ磨きが見られる。底部内面中央の突出がなく、底径が小さい。口縁部は直線的である。カマド内出土。2はカキメ調整の小型甕の底部破片で、3片が接合しているが内2片が内面が黒色、1片が内面の黒色が消失しており、後者が二次焼成を受けているものと思われる。底部外面に乳白色の物質が付着している。前者が南壁下床面出土。後者がカマド内出土。3は胴部と底部の接点の胴部側外面に横方向のヘラ調整がみられ、その上方はナデ調整であるがうっすらとカキメらしき痕跡がのこる。底部は無調整、内面はナデ調整であるが、おそらく、カキメ調整の小型甕の一類であろう。カマド内出土。4は甕ないしは大型の鉢であろう。胎土は甲斐型とは違い、雲母がなく石英、長石、輝石の微粒子を主体とし、比較的硬質で緻密な胎土である。厚口縁で、口舌および口縁部外面はナデ調整。口縁部内面はハケ調整の後はナデ調整を行っていない。カマド内出土。

土器総重量1472g。甲斐型壺が5片10gで玉縁口縁4片。黒色土器は230g。甲斐型甕片370g。ロクロ整形の



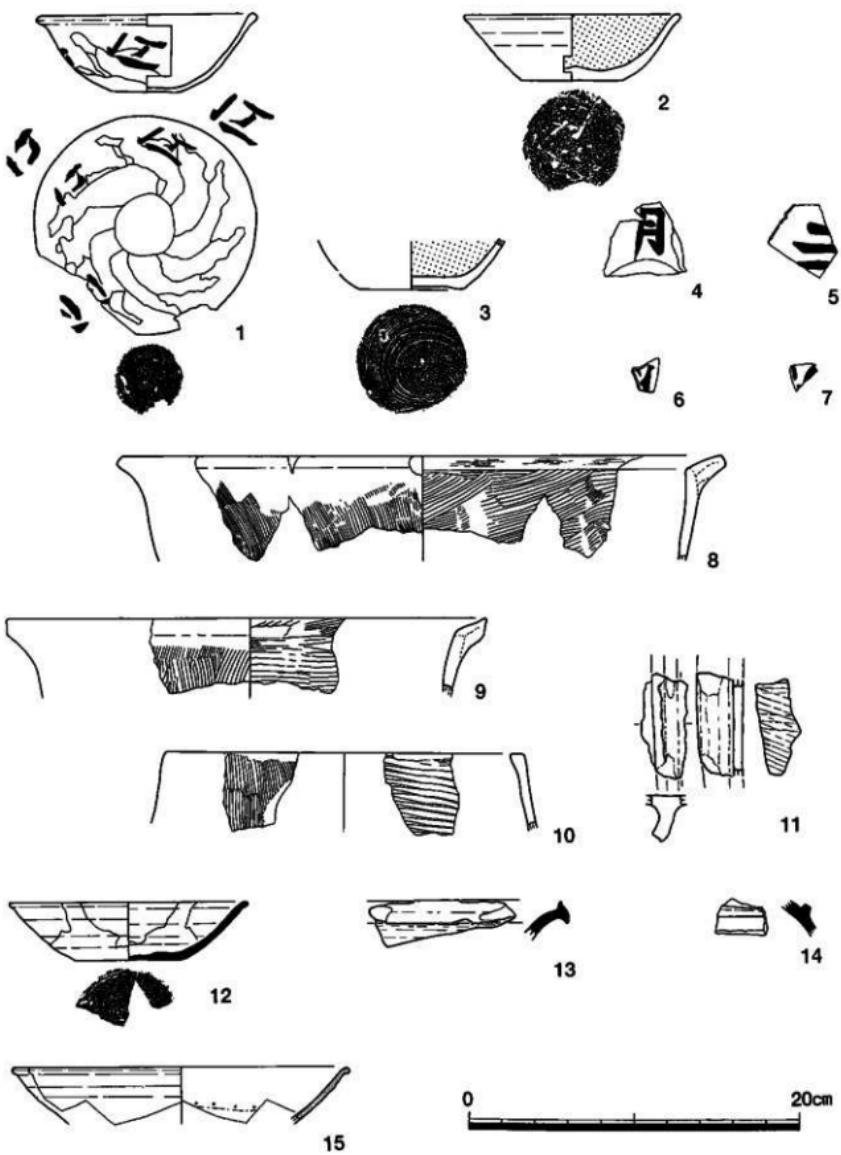
第13図 6号住居址 (1/60)



6号住居址カマド土層説明

a層黒色粘質土（焼土粒子を少量含む）、b層暗褐色土粘質土（黄褐色砂質土ブロックを多量に含む）、c層黒色粘質土（a層より明るく硬質で焼土粒子を含む）、d層茶褐色粘質土（焼土と黄褐色粒子を含む）、e層黒色粘質土（焼土黄褐色粒子を一切含まない）、f層黄褐色土、g層茶褐色粘質土（焼土、木炭片、黄褐色土粒子を多量に含む）。

第14図 6号住居址カマド (1/30)



第15図 6号住居址出土土器 (1/3)

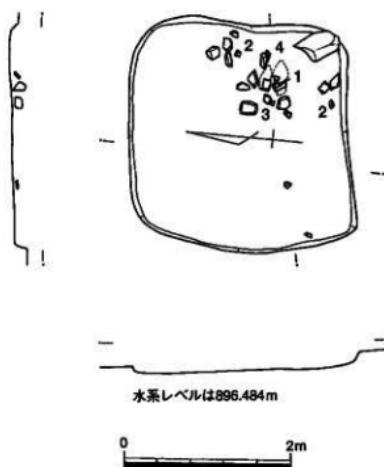
小型甕152g。甲斐型以外の大型甕は図示したものと同一個体が650g。須恵器はなく、灰釉陶器の壺片が2片60gで、1片はカマド内出土である。

時期は甲斐型類似の厚口縁の甕ないしは大型鉢で、甲斐編年Ⅺ～ⅩⅢ期であろう。

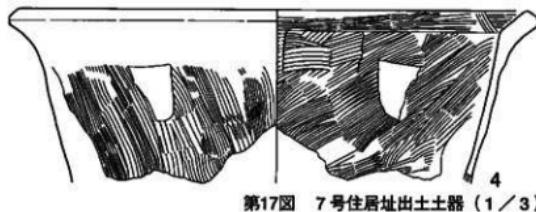
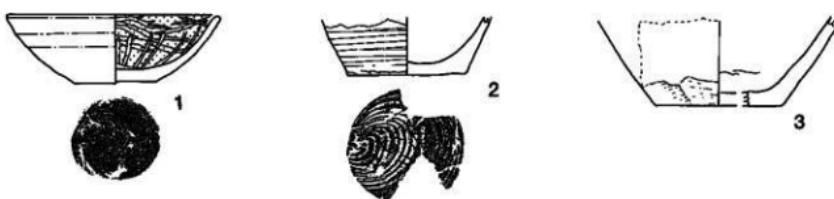
8号住居址

遺構（第18図）南半部分の東部住居址群のほぼ中央部にある。南北5m、東西5～5.3mの隅丸方形である。東壁北半部に周溝がある。壁高は55～40cmと深い。自然の巨大な礫が南東隅、北西部、南西隅の3ヶ所にあり、床から大きく露出している。南東隅の巨大礫の前面には2個の板状の巨礫が立て掛けられている。おそらくカマドの構築材と思われる。その上には甲斐型の甕のほぼ完形個体（第20図6）が乗せられていた。

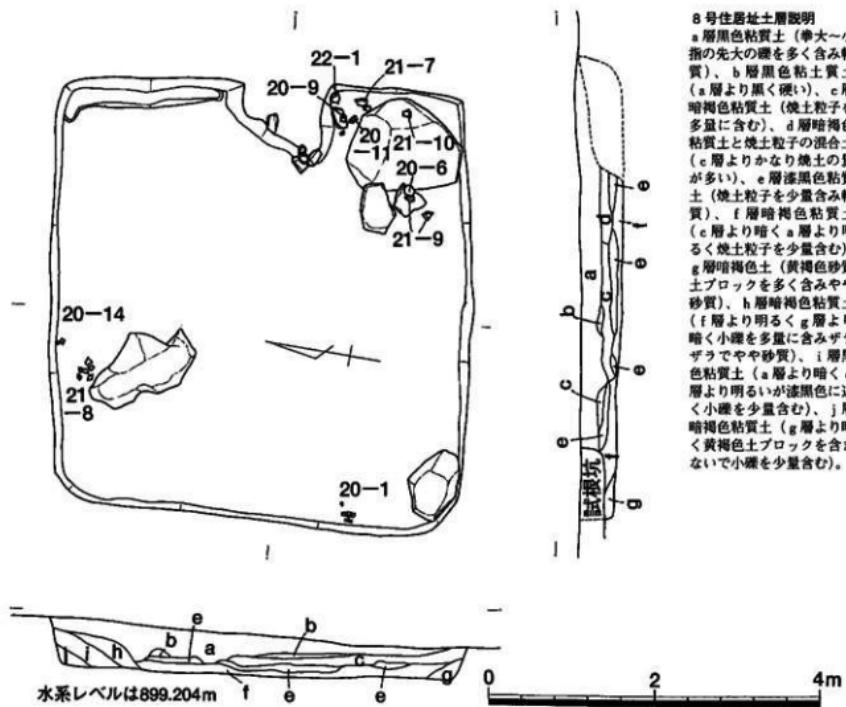
カマドは東壁ほぼ中央部に位置する。右袖石が2個残存し直立している。前面の巨礫は厚さ20cmと厚いが、高さは25cmと低い。奥の礫は小さく、外側にカマド構築材の黄褐色土が土手状に残存する（c層）。両袖石は奥側にむかって開くように設置されている。左側の袖石はないが、掘り込みが把握でき、その配置も奥にむかって開いており、2個ずつの袖石が奥にむかってハの字に開く構造をもっていたものと思われる。また、燃焼部中央には厚さ8cmほどの薄い板状の礫が敷かれていて、その下は焼土となっている（p層）。カマド奥は幅80cm、奥行40cmにわたって張りだしているが、他の住居址と異なりカマド燃焼部と高さ20cmほどの段差がある。この他、直



第16図 7号住居址 (1/60)



第17図 7号住居址出土土器 (1/3)



第18図 8号住居址 (1/3)

径10~20cmほどの礫が焚き口付近などに散乱している。カマド右脇には直径50cmと直径20cmの小ピットが見られる。

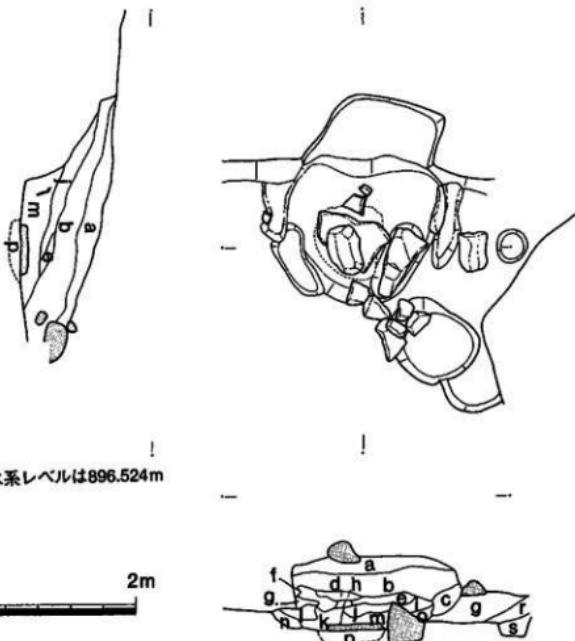
出土土器 (第20~22図) 第20図 1は甲斐型の壺のほぼ完形の個体である。内面にループ状の暗文があり、口縁部が玉縁ぎみである。口径12.3cm、底径4.8cm、器高4.6cmである。西壁直下の床面出土。2は甲斐型の壺で丸口縁、暗文が見られる。推定口径13.4cm、推定底径5.7cm、器高4.7cmである。覆土中出土。3は甲斐型の壺の墨書き土器である。丸口縁で内面に暗文がある。推定口径11.9cm、底径5cm、器高3.8cmである。覆土中出土。4は甲斐型壺の墨書き土器である。暗文あり。覆土中出土。5は甲斐型壺の墨書き土器で、丸口縁ながら暗文は見られない。覆土中出土で、新しい時期の流れ込みの可能性がある。6は甲斐型の皿のほぼ完形の個体で、出土状態は先述した。口径12.6cm。器高は2.8cm。口縁部と体部の屈曲が若干見られる。内面にらせん状の暗文、外面は回転ヘラ削りである。口舌部の一部に黒色付着物があり、その付近の外面も黒色付着物がうっすらと見られる。7は黒色土器の壺である。口舌部がやや外反する。カマド内出土。8は黒色土器の壺である。底部は回転糸切りで、口舌部が若干外反する。胎土に雲母が非常に目立つ。カマド内出土。9は黒色土器の墨書き土器で、口舌部が若干外反する。カマド脇出土。10は黒色土器の壺で、口縁部は直線的である。内の磨きが横方向に粗くなされている。覆土中出土。11は黒色土器の壺で、9と胎土が近似する。カマド脇出土。12は黒色土器の壺で口舌部が若干外反する。カマド内出土。13は内面が研磨され、形態も黒色土器に近似するが、内面の黒色処理がなされておらず赤褐色を呈する。覆土の上層から出土。14は黒色土器の高台付きの皿である。高台は回転糸切りの後に貼りつけられているが、高

8号住居址カマド土層説明

a層暗褐色土（黄褐色土粒子を多く含み粘性しまりあり）、b層黒褐色土（少量の焼土、木炭片を含み粘性しまりあり）、c層黄褐色土、d層黒色土（少量の焼土を含み粘性しまりあり）、e層黒褐色土（多量の黄褐色土粒子を含み粘性しまりあり）、f層明茶褐色土（多量の焼土、木炭片を含み粘性しまりあり）、g層黒色土（少量の焼土、木炭片と黄褐色土粒子を含み粘性しまりあり）、h層黄褐色土（バサバサして粘性しまりなし）、i層黒褐色土（少量の黄褐色土粒子、焼土、木炭片を含む）、j層黒褐色土（焼土の量はb層より少ないが木炭片の量が多く粘性しまりあり）、k層黒色土（焼土を多く含み大粒にお木炭片を含む）、l層明茶褐色土（焼土、木炭片を少量含み黄褐色土粒子を多く含む）、m層明褐色土（多量の焼土を含むが木炭片は少量）、n層黒色土（焼土、木炭片を含まず黄褐色土粒子を含む）、o層黄褐色土（木炭片を含み一部に黒味をもつ）、p層焼土、q層明褐色土（焼土、木炭片、黄褐色土粒子を多く含み粘性しまりあり）、r層明茶褐色土（焼土を多く含み木炭片を少量含み黄褐色土粒子を多く含む）、s層黒色土（焼土、木炭片を多く含み黄褐色土粒子を含む）。

0 1 2m

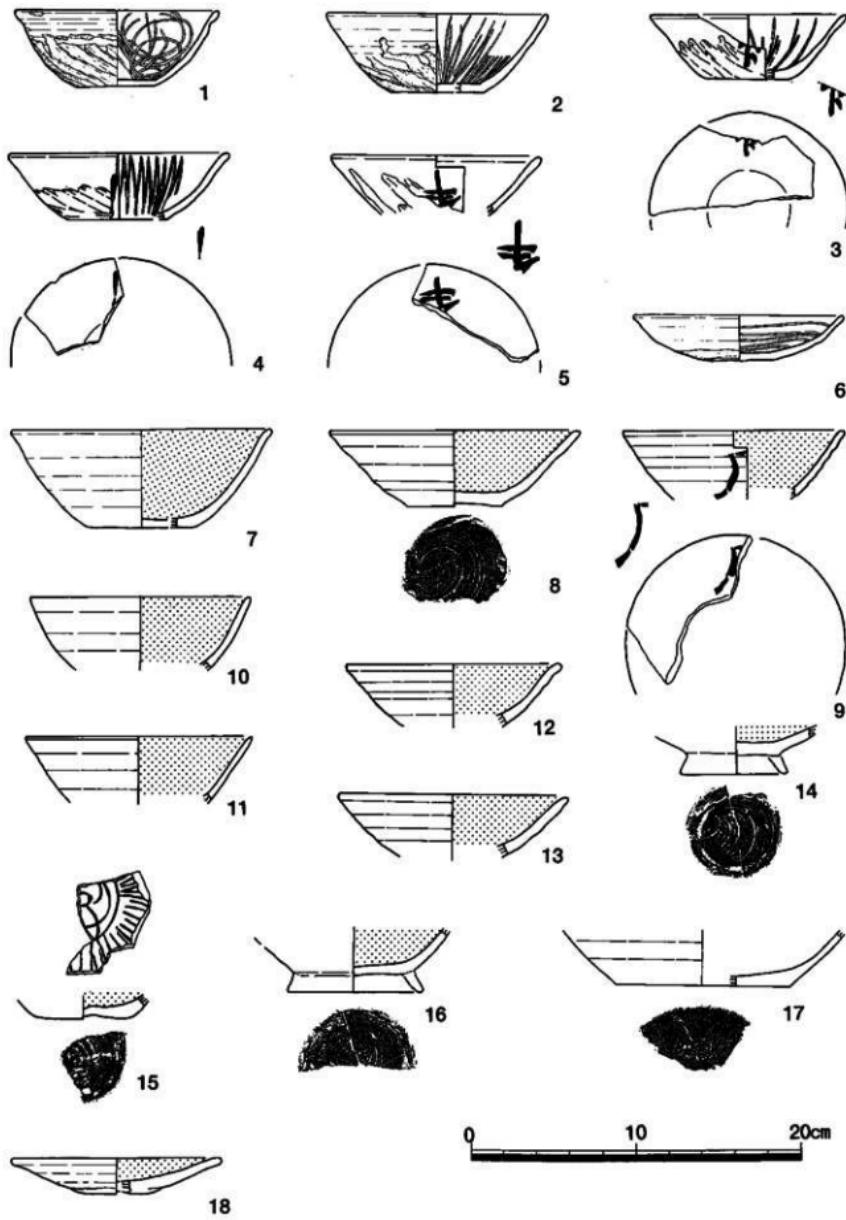
水系レベルは896.524m



第19図 8号住居址カマド (1/30)

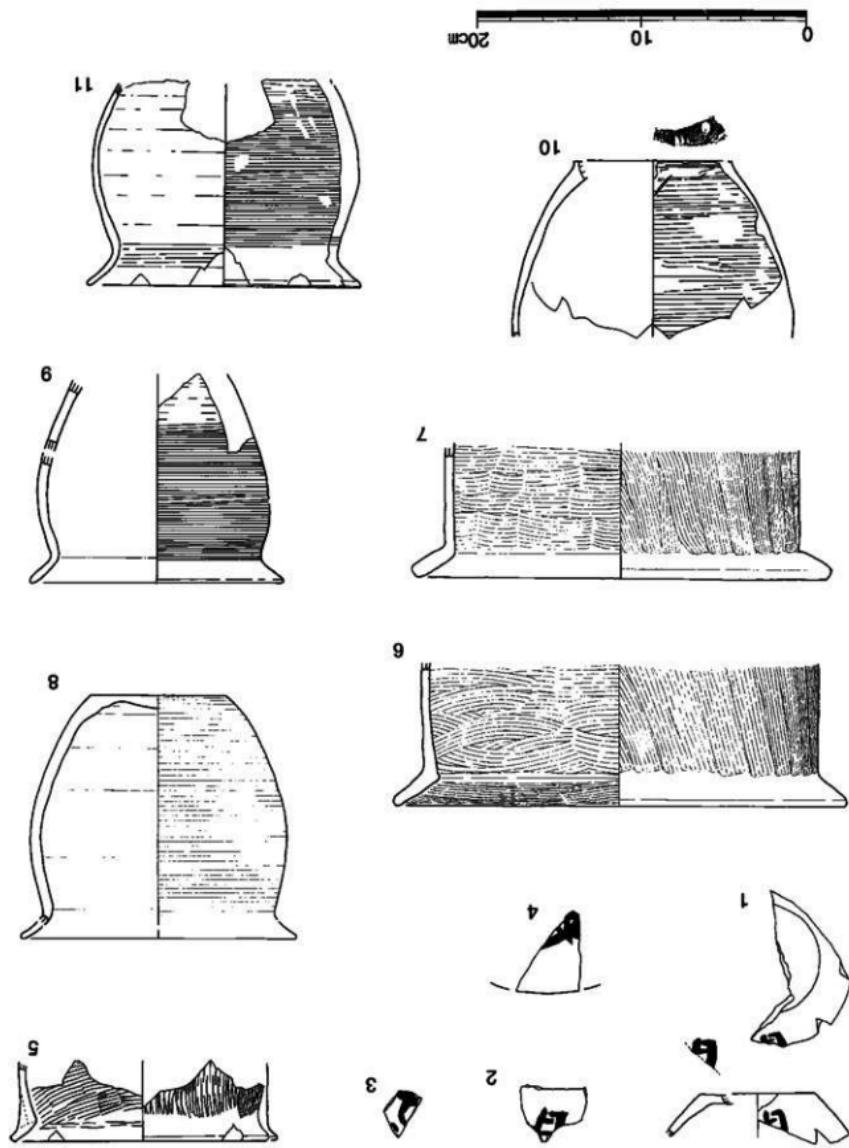
台部は欠損している。北壁西より直下の床面からやや浮いて出土。15は黒色土器の壊で、内面研磨がなく暗文状の文様があり、みこみ部で円弧状、体部で放射状に施されている。覆土上層出土。16は黒色土器の塊で、高台部分が欠損している。覆土上層出土。17は土師器の鉢と思われる。外面ロクロ調整、内面が研磨され、底部は回転糸切り無調整である。内面の黒色処理は見られない。カマド内出土。18は黒色土器の皿である。口舌がやや外反する。底部は糸切り痕が見られず、薄く粘土が貼りつけられたようになっていて、器壁が荒れているもののナデ調整がなされたものと思われる。

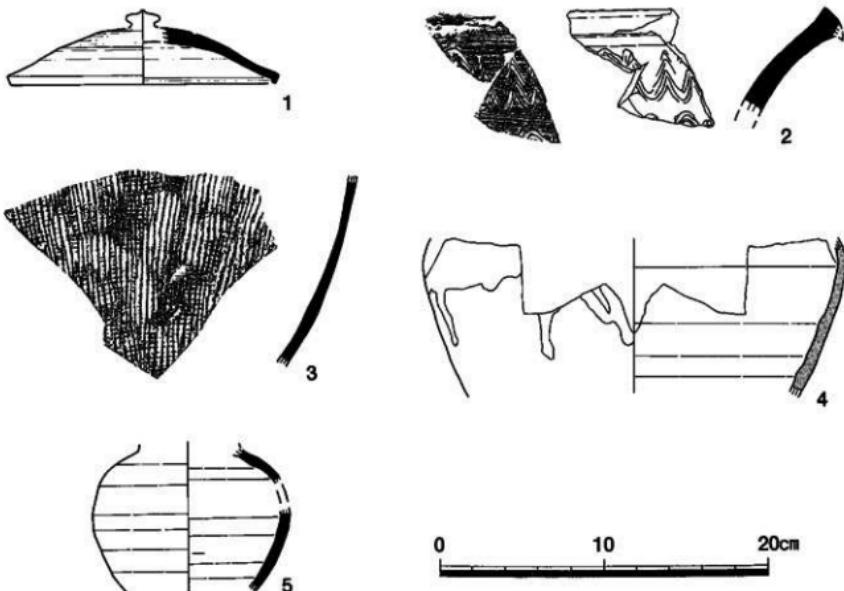
第21図1は甲斐型壊の墨書き土器である。内面体部に暗文が見られ、底径も6.5cmと大きく、甲斐縄年層期の土器である。覆土中出土。2は甲斐型壊の墨書き土器である。内面に暗文が見られる。覆土中出土。3・4は黒色土器の壊破片で墨書き土器である。いずれも覆土中出土。5は小型壊である。外面は縦方向ハケ目調整の後口縁部のナデ調整。内面は口縁部も含め横方向ハケ目調整の後口縁部のみナデ調整である。胎土に雲母がなく輝石が多く見られ、甲斐型の胎土と相違する。覆土中出土。6は甲斐型壊で薄口縁である。カマド内出土。7は甲斐型壊で厚さ10mm、長さ23mmで、粘土紐を口縁部外側に貼りつけた厚口縁型である。粘土紐が体部のハケ目調整の後に貼り付けられ、口縁部内側もハケ目調整の後ナデ調整で、この粘土紐貼りつけの後のナデ調整と同時になされたものと思われる。外面に白褐色の粘土状の物質が付着している。カマド脇出土。8はロクロ整形の小型壊である。外面カキメ調整、内面はロクロナデ調整である。底部は回転糸切り無調整である。口縁部を欠損する。内面はほぼ全体が黒色化している。北西部の自然巨大礫の北側床面上出土。9はロクロ整形の小型壊である。外面カキメ調整、内面ロクロナデ調整である。胴部外部下半部はカキメ調整の後ナデによってカキメが薄くなっている。住居址南東部の自然巨大礫前面に立て掛けられた巨礫の上とその付近の床面上から出土。10はロクロ整形の小型壊



第20圖 8号住居址出土土器 (1) (1/30)

第21图 8号住居出土土器 (2) (1/3)





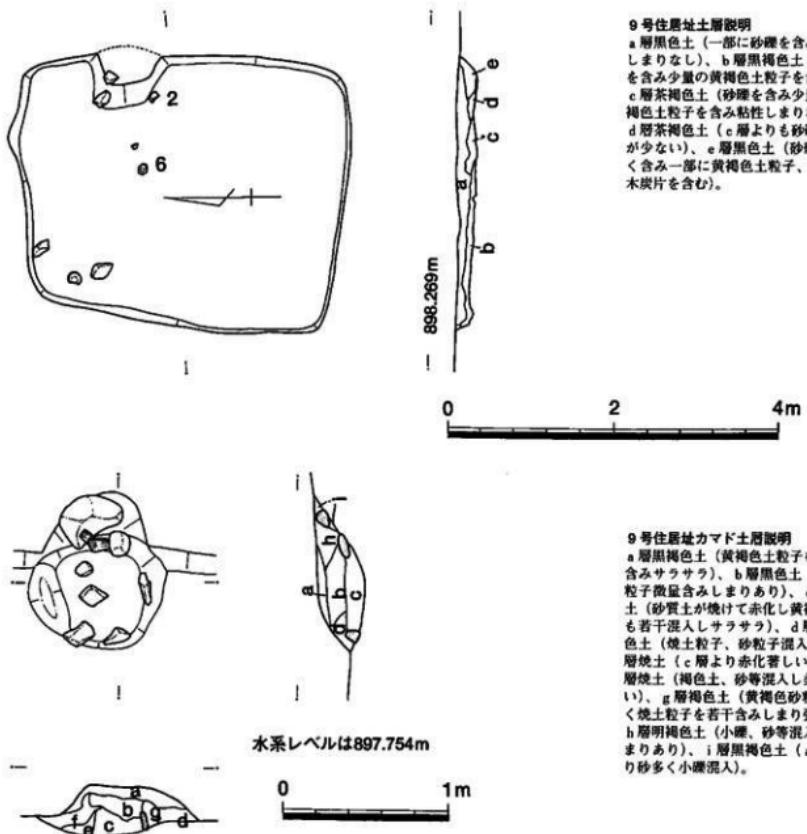
第22図 8号住居址出土土器（3）（1／3）

で、外面カキメ調整、内面ロクロナデ調整である。底部は回転糸切り無調整である。南東部の自然巨大礫の上に置かれていた。11はロクロ整形の小型甕である。胴部外面および口縁部内面にカキメが見られる。口縁部はカキメの後ロクロナデ調整。カマド内出土。

第22図1は須恵器の蓋でつまみ部分を欠損する。外面上半部は回転ヘラ削り、他の部分は内外面とのロクロナデ調整である。かえり部分周辺は還元炎焼成され黒灰色を呈するが、内側は酸化炎焼成で赤褐色である。カマド脇出土。2は須恵器の大型甕の口縁部である。外面に櫛齒状工具による波状の文様が2単位見られる。覆土上層出土で口舌部側の破片は自然の落ち込みである5号溝から出土している。3は須恵器甕の胴部破片で外面に平行叩き目がみられ内面はなで調整である。4は灰釉陶器の甕の胴部破片と思われる。肩部に濃緑色の釉薬が見られ、胴部に流下している。内面および器壁断面の色調は灰白色を呈する。覆土中出土。5は須恵器の甕の肩部から胴部の破片である。肩部に白灰色の自然釉が見られる。覆土中出土。

土器総重量6581g。甲斐型壺は640gで暗ない破片230g、内面黒色処理したもの10gを含む。黒色土器は1173gと多い。甲斐型甕は2720gで薄口縁型も9片230gある。非常に厚い厚口縁型が70gであるがこれはすべて覆土上層出土である。甲斐型小型甕は149g、ロクロ整形小型甕は1412gある。その他の甕10g。須恵器は甕片など341g。灰釉陶器は甕片など136gである。

時期について決め手となるのは第20図1の甲斐型壺と6の甲斐型甕の床面出土土器である。1は底径4.8cmと比較的径が小さく玉縁口縁ぎみであり甲斐縦年Ⅸ～Ⅹ期と考えられる。6の甕は口径が12.6cmと比較的小振りで口縁部と体部の境界の屈曲が弱く玉縁口縁ぎみでやはりⅨ～Ⅹ期と思われる。図示した他の甲斐型壺もほぼ同様な時期のものである。また、甲斐型甕も薄口縁型と比較的薄い厚口縁型とが見られ、灰釉陶器も覆土中ながら見られるものも量的に少ない。住居址の廃絶時期をⅨ～Ⅹ期としてよいだろう。ところで、覆土中出土の中に第21図1のようにⅧ期に相当すると思われる土器が見られ、住居址の形成時期についてはこの時期とみてよいかもし



第23図 9号住居址 (1/60) とカマド (1/30)

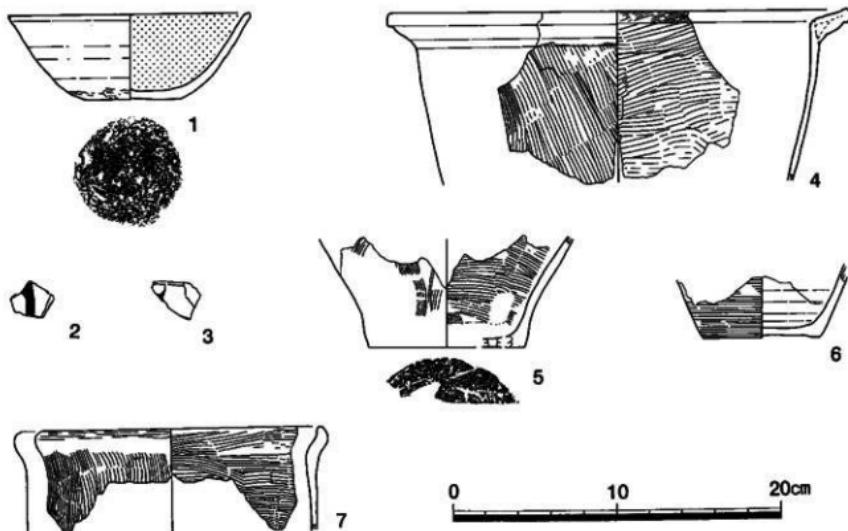
れない。

9号住居址

遺構（第23図）南調査区の東部住居址群の中で最も北に位置する。南北3.7～4m、東西3～3.3mの隅丸方形である。壁高は20cm程度で、周溝は見られない。

カマドは東壁の北よりに構築され、特異である。袖石の巨礫は左右とも遺存しないが、巨礫の間に添えられていたと思われる小礫が右袖に1個直立状態で残存する。カマド奥部分が幅60cm、奥行35cmで突出する。この突出部分に比較的大型の礫が残存し、天井石の一部と思われる。

出土土器（第24図）1は黒色土器の壺である。口径14.5cm、底径5.5cm、器高5cmである。4分の1ほどが欠損する。口舌が若干外反する。底部は回転糸切り無調整だが、その外縁部を横方向にヘラ削りしており、この調整が見られるのは唯一この個体のみである。北西隅付近の床面出土。2は黒色土器の墨書き土器である。カマド内出



第24図 9号住居址出土土器 (1/3)

土。3は甲斐型壺の墨書き土器である。丸口縁で暗文はない。カマド内出土。4は甲斐型壺の厚口縁型で厚さ10mm、長さ24mmである。カマド前面出土。5は甲斐型壺の底部破片で、底部外面は木葉底である。覆土中出土。6はロクロ整形の小型壺底部。底部外面に白褐色の付着物が厚く付着している。床面出土。7は甲斐型の小型壺で、口舌部が内側に強く突出する。口舌外側に横方向ハケ目調整が見られる。カマド内出土。

土器総重量1833g。甲斐型壺は150gで暗文のあるもの1片10g、暗文のないものが120gで口縁部は玉縁口縁中心である。甲斐型壺の内面黒色処理のもの4片20g。黒色土器が219g。甲斐型壺が1107gで薄口縁型が7片含まれる。甲斐型小型壺が72g。ロクロ整形小型壺が185g。置きカマド片が70g。須恵器壺小片が1片30gでカマド内出土。

時期については、第24図4の甲斐型壺の比較的薄手の厚口縁型で甲斐編年X-XI期と思われる。

10号住居址

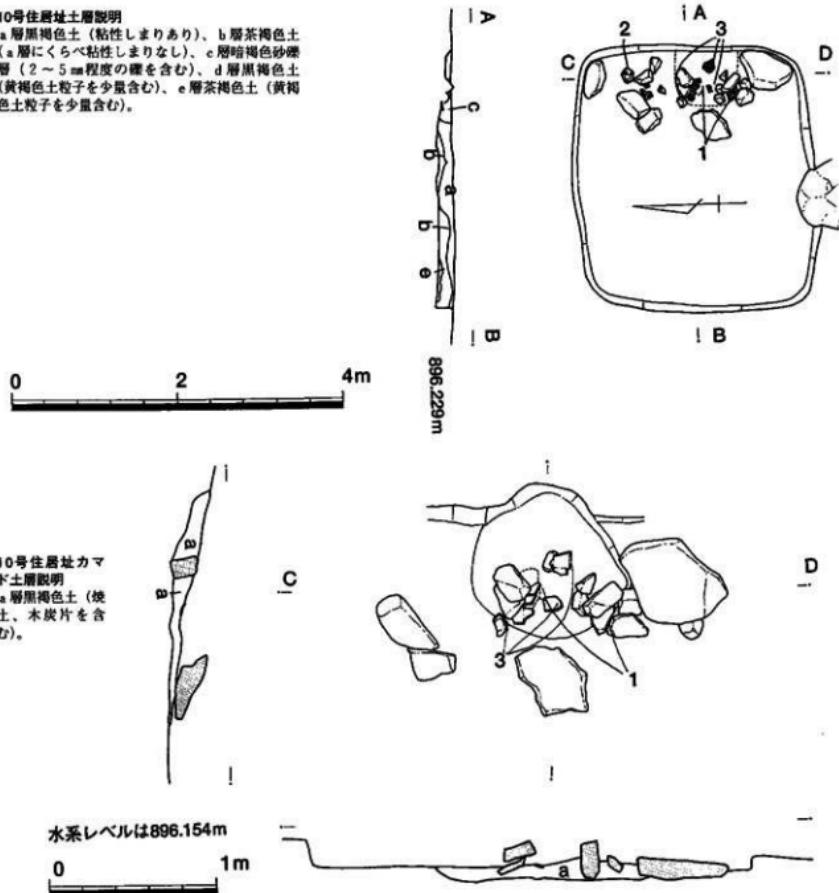
遺構（第25図）南調査区の東部住居址群のうち最も南に位置する。南北2.8~2.9m、東西3.1~3.2mの隅丸方形で、壁高20cm程度である。周溝は見られない。北東隅と南壁中央に自然の巨大礫が露出している。

カマドは東壁中央やや南側に位置する。左右両袖の巨礫は取り除かれているが、右袖石を構成していたと思われる小礫が1個直立している。またカマド中央には幅10cm、高さ15cmの角柱状の礫が直立しており、支脚と思われる。カマドの周囲に板状の巨礫が4個見られ、カマドの袖や天井を構成していたと思われる。カマド内には袖石のあつたところ付近に小礫がまとまっている。カマドの奥部は幅50cm、奥行15cmほど突出する。

出土土器（第26図）1は土師器壺で甲斐型ではない。縦に3分の1ほどが残存。体部外面縦方向のハケ目調整でその後口縁部から肩部にかけてロクロナデ調整。内面は口縁部が横方向ハケ目調整の後ロクロナデ調整。体部内面は肩部内側がロクロナデ調整、体部中央がナデ調整、下半部が指頭による縦方向のナデ調整でかなり強く押

10号住居址土層説明

a層黒褐色土（粘性しまりあり）、b層茶褐色土（a層にくらべ粘性しまりなし）、c層暗褐色砂礫層（2～5mm程度の礫を含む）、d層黒褐色土（黄褐色土粒子を少量含む）、e層茶褐色土（黄褐色土粒子を少量含む）。

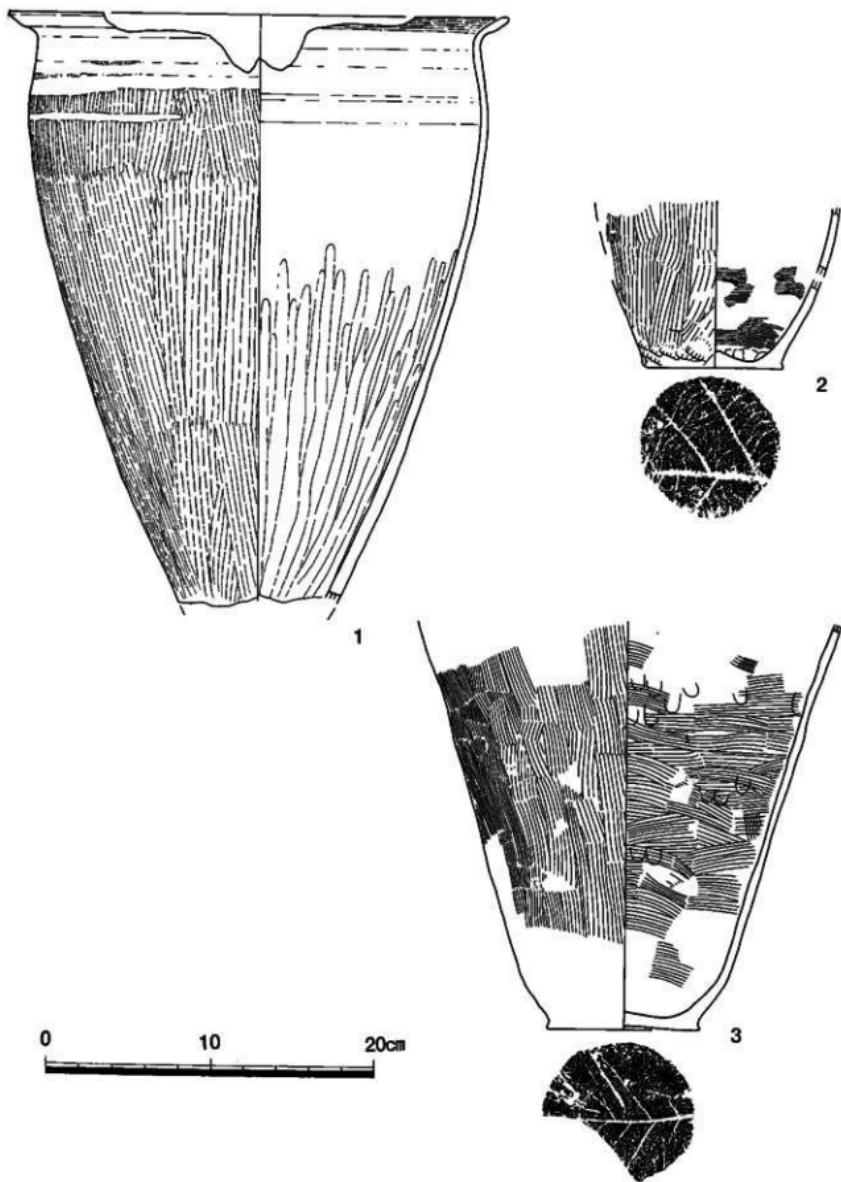


第25図 10号住居址 (1/60) とカマド (1/30)

さえ込むようなナデである。全体に非常に薄く、とくに肩部から口縁部が薄いが口縁部は外側に折り返されているか薄い粘土紐が貼り付けられているらしく外面中央が若干盛り上がっている。胎土は石英、長石、雲母、輝石が見られ、細かな鉱物粒子が中心で岩片は見られない。色調は赤褐色。カマド内出土。2は甲斐型の小型甕の底部である。北東隅付近に立った状態で出土。3は甲斐型甕の胴部から底部である。カマド内出土。

この他の遺物はほとんどなく、甲斐型壺1片10g、甲斐型甕684g、甲斐型小型甕288gで、図示したその他の甕は計量前に石膏で復元してしまったためデータがない。須恵器の壺片1片10gで、灰釉陶器はない。

時期の決め手となる土器がなく、時期決定を保留したい。



第26図 10号住居址出土土器 (1/3)

11号住居址

遺構（第27図）北側調査区にある3軒の住居址の内最も北に位置し、本遺跡の中で最も北にある住居址である。南北5.4～6.3m、東西6.5～7.2mと本遺跡最大規模の住居址である。壁高は50～70cm。周溝は東壁全体、南壁と西壁に部分的に見られる。東壁の周溝は壁より最大40cmほど内側に設定されており、セクションから判断して東側に拡張されたものと思われる。周溝は幅が30cm程度と広く、深さは5cm程度と浅い。柱穴が4本確認された。直径30～50cmで、深さが15cm程度と浅い。

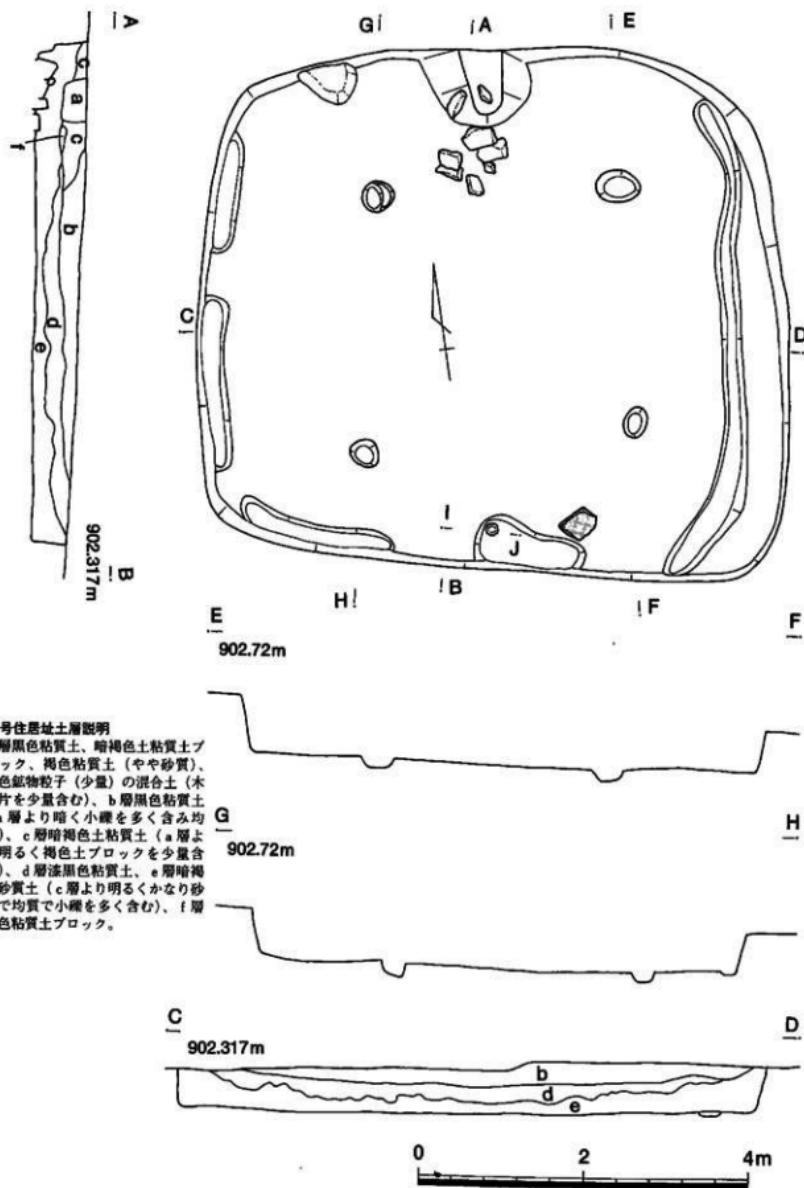
南壁中央直下に埋設土器が確認された（第28図下）。土師器壺（第29図4）を下にし、土師器皿（第29図5）を蓋にして、浅い掘り込みを掘ってやや埋めてから合わせ口のこの2個の土器を埋設している。蓋となった皿の底部は床面より若干低く、設置されている。この上に土がかぶされた状態であったか、皿が露出した状態で埋設されていたかは不明である。蓋を取ったところ中には壺の3分の1ほどに土が流入した状態でほとんど空洞の状態であった。土以外の流入物や遺物は見られなかった。なお、この壺と皿は甲斐編年団期のもので本遺跡で最も新しい段階の土師器であり、さらに11号住居址のカマド内、床面の土器や覆土中の土器を含めて甲斐編年団期のものは皆無である。これらの土器から判断される11号住居址の廃絶時期は甲斐編年団期であり、住居址廃絶段階までに使用していた土器をカマドなどに廃棄なし遣棄したが、その折りにわざわざ埋設土器を新調し、それは団期段階のものに転換していたと考えるか（廃絶とほぼ同時に埋設）、住居址廃絶後しばらくして廃屋状態であつたところへ設置されたと考えるかいずれかである。後者の場合、住居址の居住者と埋設土器の主体者とが別人である可能性も出てくる。

また、南壁中央やや東よりの場所に磨り面を持つ巨礫（第47図2）が埋置されていた。

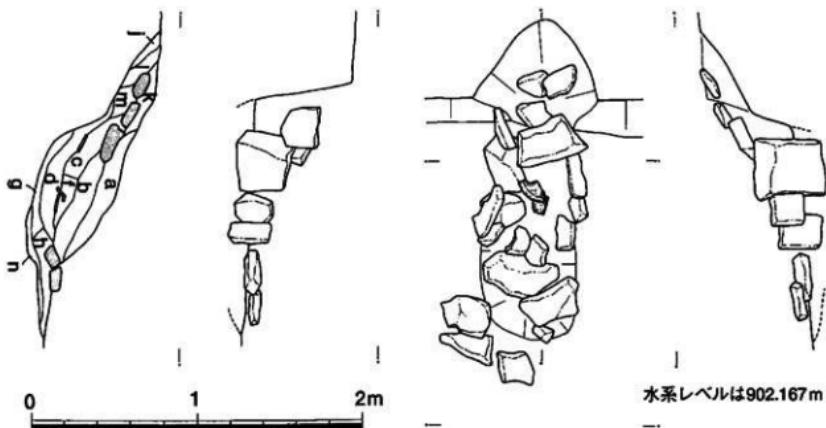
カマドは北壁中央に構築され、平安時代では希少な例である。残りが非常に良好で、左右の袖石と奥の天井石がほぼ構築状態と思われる状態で出土している。むかって左側の袖石は4個が直立した状態で出土している。前面に2個の比較的小型の板状巨礫を立て、その背後に3倍程度の大きさの板状巨礫を立て、前者との間に段差を設けている。その巨大礫の背後にさらに高い位置に段差を設けるように比較的小型の板状巨礫が設置されている。奥の天井石である巨大礫はこの上に置かれていたらしいが、ずれ落ちた状態で出土している。右側の袖石は3個見られる。左側同様前面の2個は比較的小型である。特に奥側の礫はさらに小型で、最前面の礫より高い位置に設置されており、最も奥の巨大礫にむかって徐々に上面の高さが高くなるように設置されている。最も奥の礫は板状の巨大礫で左側よりも大きいが上面の高さは同じに設置されている。袖石の最奥部の巨大礫よりも奥の位置に1個の板状巨大礫の天井石が見られる。その背後には煙道の天井部に設置されていたらしい板状の小型礫が3個見られる。カマド奥には幅75cm、奥行50cmの突出部があり、カマド燃焼部と段差をもつていて8号住居址の構造と近似する。なお、カマド焚き口部分付近に板状の巨礫が数個みられ、天井石が外されて置かれているものと思われる。

なお、本住居址は覆土中出土の土器が多量であり、またそれとともに廃棄されたらしい人頭大から直径10cm程度の礫が覆土中全体から出土している。

出土土器（第29～30図）第29図1は甲斐型壺の隆玉縁口縁で墨書き土器である。底部は回転糸切りで周縁部に若干ヘラ削りが見られる。胎土に微細な鉱物粒子を多量に含み軟質である。覆土中に破片が分散して出土。2は甲斐型壺の隆玉縁口縁である。底部全面ヘラ削り。1と違い胎土は緻密で硬質である。覆土中に分散して出土。3は甲斐型壺の隆玉縁口縁で墨書き土器である。胎土は緻密硬質で、底部は回転糸切り周縁部のヘラ削りである。覆土中出土。4は埋設土器の下側に設置されていた土師器壺で、甲斐型壺の赤褐色緻密硬質な胎土を踏襲しているものの、甲斐型壺の条件である暗文、ヘラ削りが消失して後のものである。底部は回転糸切り無調整である。口縁部内側を長さ6cm、幅2cmにわたって剥落したように欠損しているが、それ以外は完全な状態で出土した。5は埋設土器の上部に蓋のように設置されていた土師器皿で、4同様に赤褐色緻密硬質の胎土で、底部回転糸切り無調整である。この両者は甲斐型編年団期のもので、甲斐型壺の最終末といってよいだろう。6は黒色土器の壺で口縁部が直線的である。覆土中出土だが比較的床に近い深い位置から出土している。7は黒色土器壺の墨書き

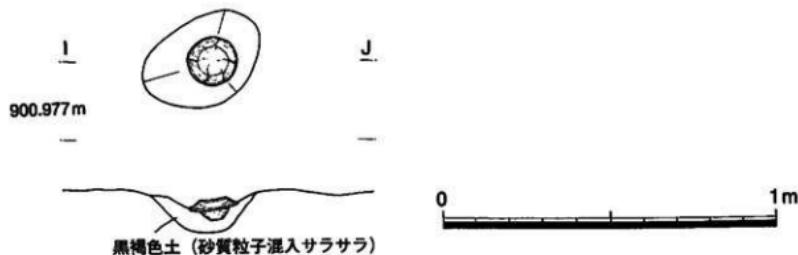
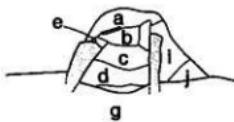


第27図 11号住居址 (1 / 60)

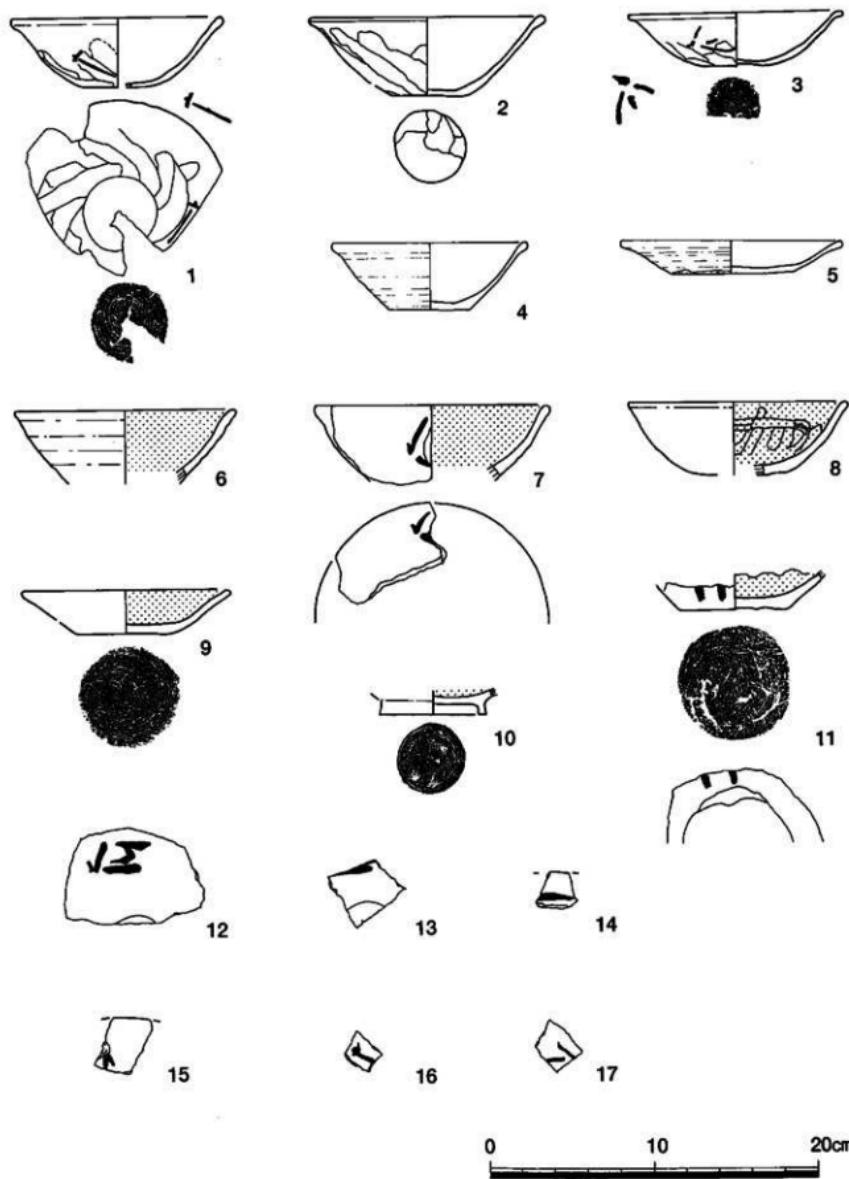


11号住居址カマド土層説明

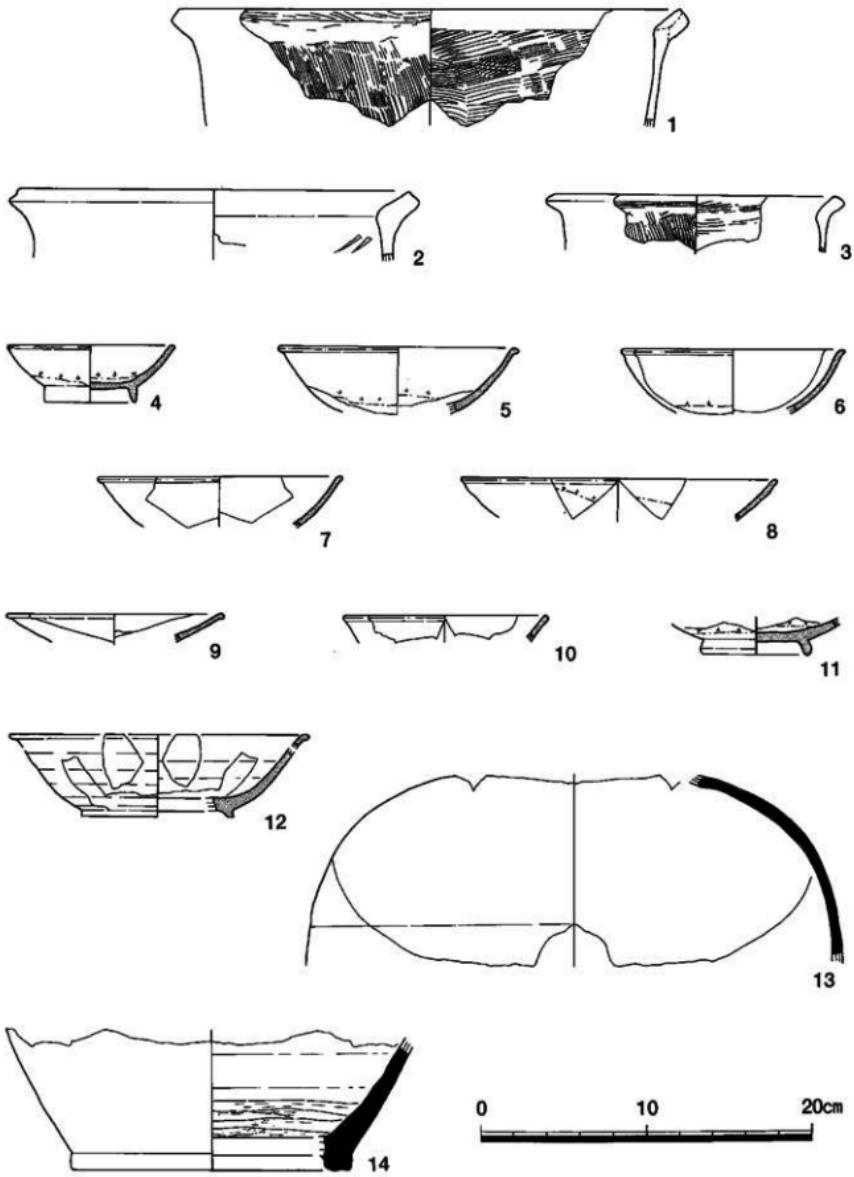
a 層黒褐色土（砂粒、焼土粒を少量混入）、b 層
黒褐色土（a 層より黒味強く砂粒、焼土粒を含む）、
c 層明褐色土（細かい黄褐色砂粒を多く含み灰少
量焼土細粒子を含む）、d 層明褐色土（灰、焼土
を多く含み木炭片を少量含む）、e 層黄褐色土
(黄褐色砂質粘土主体で部分的に赤化)、f 層黄褐
色土（黄褐色砂質粘土の赤化ブロック混入）、g
層焼土（灰多く混入）、h 層黒褐色土（灰、木炭
片、焼土混入し柔らかい）、i 層黒褐色土（細か
い砂粒子、細かい黄褐色土粒子混入）、j 層明褐色
土（黒褐色土の混入若干あり）、k 層明褐色土
(黄褐色砂と黒褐色土が混在し焼土粒子若干有
り)、l 層明褐色土（j 層に近いが黒褐色土の混
入が多い）、m 層明褐色土（i 層に似るが焼土、
粘土が微量混入）、n 層焼土（ガリガリ）。



第28図 11号住居址カマド (1/30) および埋設土器 (1/15)



第29圖 11号住居址出土土器 (1) (1/3)



第30図 11号住居址出土土器 (2) (1/3)

器である。口縁部は直線的。覆土中の床面に近い位置。8は黒色土器の坏である。内面に粗いヘラ磨きが見られる、口縁部は直線的。覆土中およびカマド覆土中出土。9は黒色土器の皿である。底部は回転糸切りで口縁部は直線的でやや外傾する。覆土中に分散して出土。10は黒色土器の高台付き坏の高台部である。覆土中出土。11しや黒色土器坏の墨書き土器である。覆土中出土。12は甲斐型坏の内面黒色土器で墨書き土器である。内面に暗文ではなく、外面はヘラ削りである。覆土中出土。13は黒色土器の坏で墨書き土器である。覆土中出土。14は黒色土器の坏口縁部で墨書き土器である。口舌が外反する。覆土中出土。15は黒色土器の坏口縁部で墨書き土器である。覆土中出土。16は甲斐型土器の坏の胸部破片である。内外面ともロクロ調整である。覆土中出土。17は甲斐型坏の胸部破片で墨書き土器である。外面ヘラ削り、内面ロクロナデである。床面清掃中に出土。

第30図1は甲斐型甕の厚口縁型である。口縁部の厚さ12mm、長さ21mmである。覆土中出土。2は土師器蓋で甲斐型ではない。口縁部の断面形態は甲斐型甕の末広口縁型に似る。胸部内面はヘラ状の工具で削ったような調整である。口縁部内外面は横ナデ調整。外面の頸部以下に指頭による圧痕が見られる。胎土は石英、長石、雲母の他、白色の岩片を含む。色調は白褐色を呈する。覆土中出土。3は甲斐型の小型甕の口縁部破片である。覆土中出土。4は灰釉陶器の小型椀である。白味が強く透明感のある白灰色の器盤で、高台断面は細長く高い。覆土中出土。5は灰釉陶器の椀で玉縁口縁である。刷毛塗りで灰色味が強い器盤である。6は灰釉陶器の椀で玉縁口縁である。内面全体に施釉が見られる。覆土中出土。7は灰釉陶器の椀で内外面とも全面に施釉が見られる。玉縁口縁。覆土中出土。8は灰釉陶器の皿である。覆土中出土。9は灰釉陶器の皿で玉縁口縁である。内外面全体に施釉。10は灰釉陶器の椀と思われ、玉縁口縁で内外面とも施釉が見られる。覆土中出土。11は灰釉陶器の椀の底部と思われ、高台は三日月形を呈する。12は灰釉陶器の椀で、内面の底部も含めて全面に厚く濃緑色の施釉が見られ、外面は高台部と底部を除く体部全面に白灰色の施釉が見られる。高台は低く角台形で、器盤は白灰色で細かな空洞が多数観察されボーラスで脆弱な印象を与える。口舌は強く外反し玉縁口縁となっている。覆土中に分散して出土。13は須恵器蓋の肩部大型破片である。白褐色の自然釉が全面に見られる。覆土中に分散して出土。14は須恵器蓋の底部大型破片である。外面はヘラ状工具による回転ナデ調整、内面は底部をヘラ状工具による横ナデ、他はロクロナデ調整である。覆土中出土。

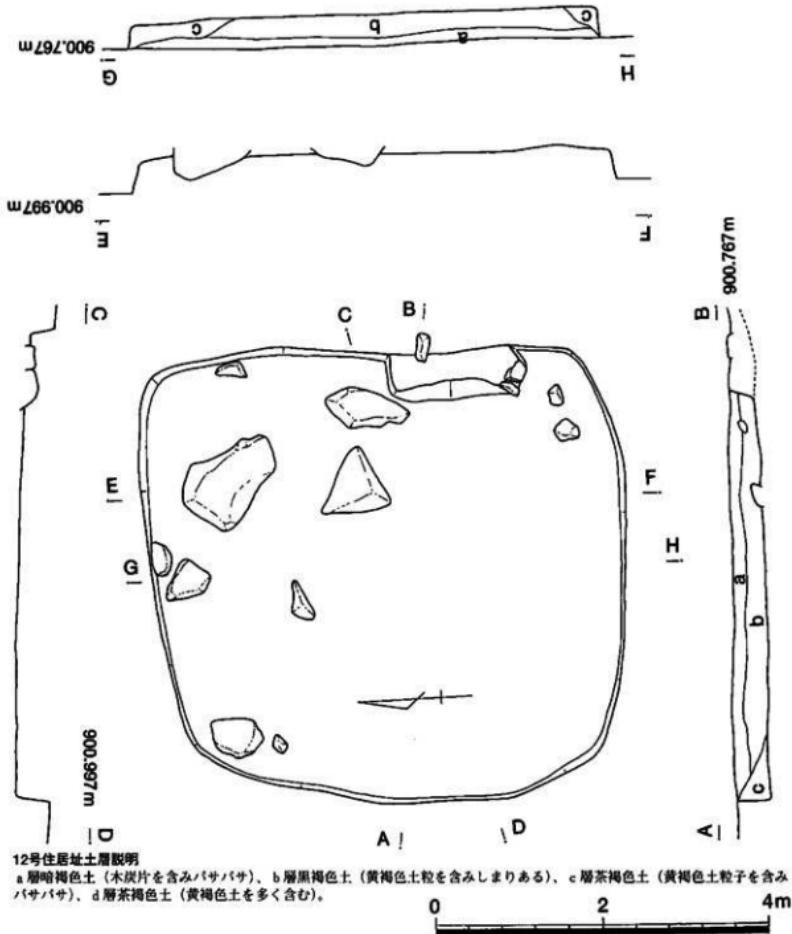
土器総重量は最も多く6750g。甲斐型坏は1058gで口縁部は玉縁や隆玉縁口縁中心であり、暗文のあるものは数片しかない。甲斐型坏の内面黒色処理したものが90gである。黒色土器の坏は1350gある。その他の坏が65g。甲斐型甕は1354gでカマド内から厚口縁形の大型破片が出土し、この他もすべて厚口縁型である。甲斐型小型甕66g。ロクロ整形の小型甕が130g。甲斐型以外の甕の破片は902gある。甲斐須恵器が蓋小片など1429gと多い。灰釉陶器は椀など396gである。

時期については、甲斐型坏がすべて覆土中出土ながら隆玉縁口縁の甲斐編年Ⅲ期のものであり、甲斐型甕もカマド内出土も含めて比較的厚い厚口縁型であり、甲斐型ではないが末広口縁型に近似する形態の甕がみられるなどからⅢ期とすることができます。埋設土器は甲斐編年Ⅲ期の坏と皿であるが、この時期の土器は覆土中やカマド内から破片さえも見られず、廃絶時期はⅢ期とし、埋設土器の埋設時期を先述のとおり廃絶と同時にそれ以後とする解釈を取ることとしたい。

12号住居址

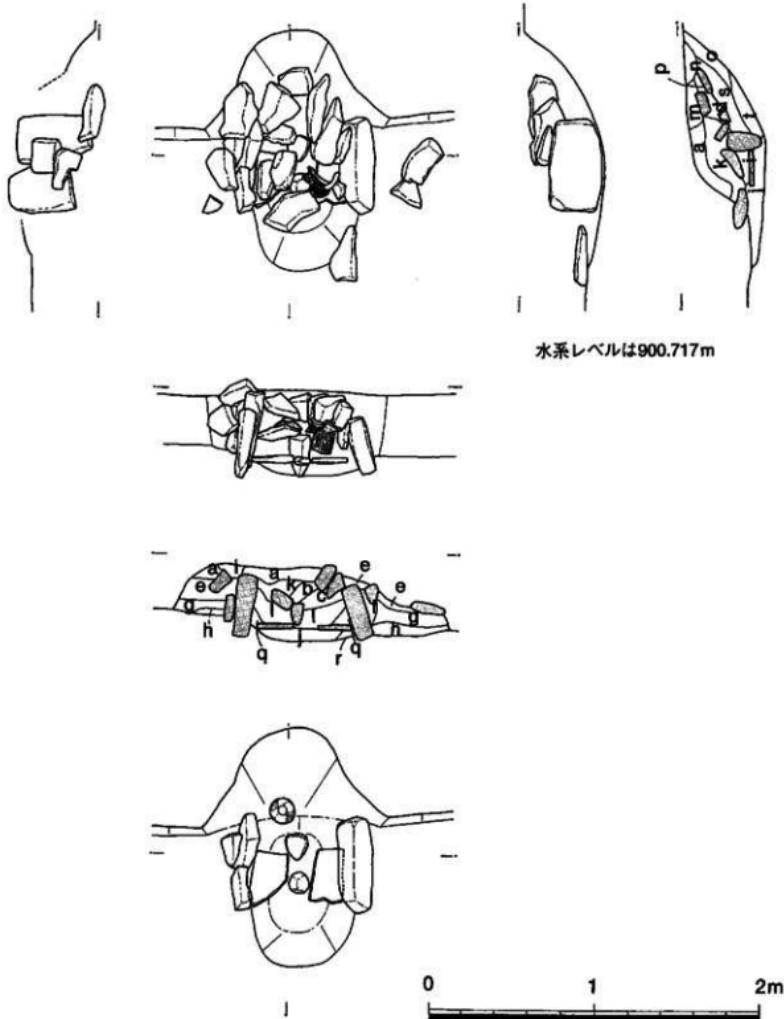
遺構（第31図）北部調査区の中央南側に位置する。南北5.2~5.8m、東西5~5.4mの隅丸方形である。周溝は見られない。壁高は30~40cmである。住居址北半部に自然の巨大礫が床面から多数露出している。

カマドは東壁の南よりに構築されている。比較的残りの良好なカマドである。むかって左側の袖石は板状巨礫が2個直立下状態で遺在している。大きさはほぼ同じだが奥側の上面が高くなるように設置されている。また、この2個の巨礫の間に外側から添えるように1個の扁平礫が直立している。またやや離れて2個の袖石上面とほぼ同じ高さにそれぞれ1個の礫が袖石に沿うようにしてあり、あるいはカマドの左袖が袖石外側の土による構築材も含めて残存している状態を示しているかもしれない（e、g、h層はプライマリーなものでカマド袖の構築



第31図 12号住居址 (1/60)

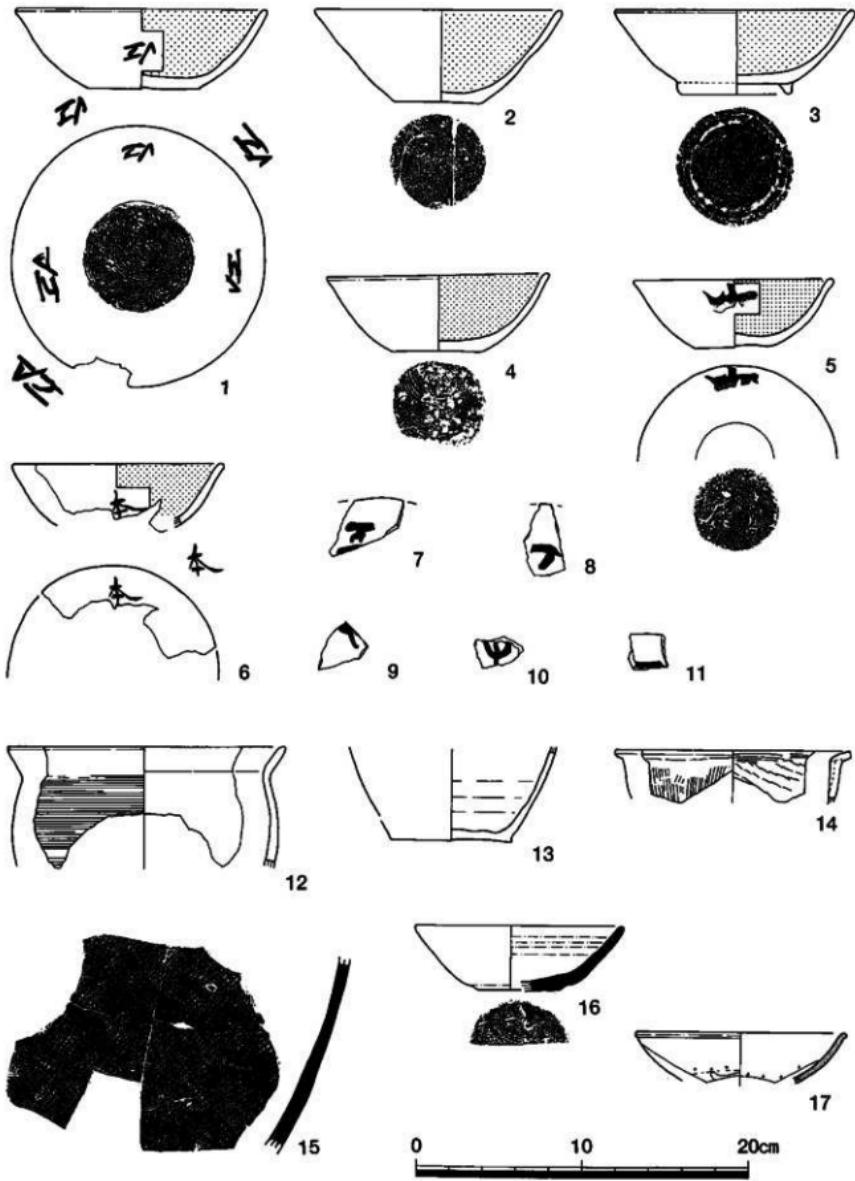
状況を示すものかもしれない）。奥側の袖石の煙道側に2個の扁平な礫が煙道を覆うようにして遺存している。右側袖石は巨大な板状礫1個からなる。その奥側に3個の細長い礫が積み重ねられ、内側に倒れかかったような状態で出土している。燃焼部の奥部天井や煙道の前面の天井がこうしたやや小型の礫で覆われていたことが推定される。燃焼部には厚さ4cmと非常に扁平な板状礫が2枚敷かれている。その間に15cmほどの空間がありそこに円形の小礫が置かれその背後には高さ25cmの支脚が直立している。支脚は10cmほど埋められ、燃焼部には15cm露出する状態である。燃焼部には白色砂質粘土（1層）が床面上に10cm程度の厚さで広く分布する。天井部のカマド構築材が落ち込んだものと思われる。燃焼部にはいくつかの礫と1個体の甲斐型窓の胴部上半部の大型破片（第34図1）が直立状態で遺在している。また、燃焼部と煙道部の接点付近に黒色土器の碗のほぼ完形の個体



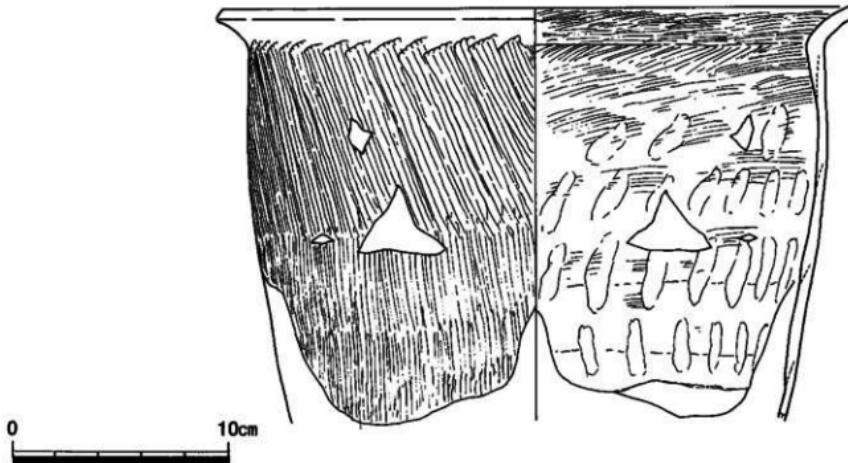
12号住居址カマド土層説明

a 層黒褐色土（白色砂質粘土微量混入）、b 層黒褐色土（白色砂質粘土やや多く混入）、c 層黒褐色土（白色砂質粘土微量、焼土粒子少量混入）、d 層白色砂質粘土、e 層白色砂質粘土に黒褐色土混入、f 層黒褐色土に白色砂質粘土粒子混入（非常に柔らかい）、g 層褐色土（白色砂質粘土少量混入しより強）、h 層褐色土（純粋に近い黒褐色土）、i 層黄褐色砂質粘土混入黒褐色土（しまり強）、j 層焼土、k 層黒褐色土（白色砂質粘土粒子混入や柔らかい）、l 層白色砂質粘土に焼土粒子混入、m 層黒褐色土（a 層より白色砂質粘土を多く含む）、n 層焼土混入黒褐色土、o 層黒褐色土（白色砂質粘土粒子微量入る）、p 層黑色土（白色砂質粘土若干混入柔らかい）、q 層褐色土（白色砂質粘土、焼土少量混入）、r 層褐色土（白色砂質粘土、焼土微量混入）、s 層白色砂質粘土混入黒褐色土、t 層褐色土（白色砂質粘土若干混入焼土微量入る）。

第32図 12号住居址カマド (1 / 30)



第33図 12号住居址出土土器 (1) (1/30)



第34図 12号住居出土土器（2）（1／3）

（第33図3）が伏せられた状態で出土している。カマドの奥部は幅110cm、奥行55cmにわたって突出する。燃焼部との間に段ではなく、連続的である。

なお、覆土中から多量の土器片が出土するとともに人頭大から10cm程度の礫が投げ込まれたように覆土中から出土している。

出土土器（第33～34図） 第33図1は黒色土器の壺で墨書き土器である。口舌が若干外反する。ほぼ完形個体で、大半がカマド内出土で一部床面上出土。2は黒色土器の壺で、口舌が若干外反する。2分の1強の個体で大半がカマド内出土で一部床面上出土。3は黒色土器の碗で低い高台が付く。口縁部は直線的。出土状態は前述。4は黒色土器の壺で口舌が若干外反する。若干口縁部を破損しているもののほぼ完形個体。カマド左脇から出土。5は黒色土器の壺で墨書き土器である。5分の1程度が破損している。東壁中央やや北よりの壁脚部分から出土。6は黒色土器の壺で墨書き土器である。口舌が若干外反する。覆土中出土。7～11は黒色土器の墨書き土器破片である。7、8、11が口縁部、他は胴部破片である。9がカマド内出土、他は覆土中出土である。12はロクロ整形の小型甕で外面カキメ調整である。覆土中出土。13はロクロ整形の小型甕の底部破片である。底部は回転糸切り無調整。覆土中出土。14は甲斐型の小型甕の口縁部破片で、体部内面の調整は指頭ないしはヘラ状工具による斜め方向のナデである。覆土中出土。15は須恵器壺の胴部破片で、おそらく凸帶付き四耳壺であろう。外面平行叩き目、内面ナデ調整である。床面上で破片がまとまって出土。16は須恵器壺で半分ほどの個体である。口径12.7cm、底径5cm、器高3.9cmである。底部は回転糸切り無調整で若干突出気味である。口縁部は直線的でかなり外傾している点が特長的である。覆土中出土。17は灰釉陶器の碗の口縁部破片で玉縁口縁である。覆土の上位から出土。

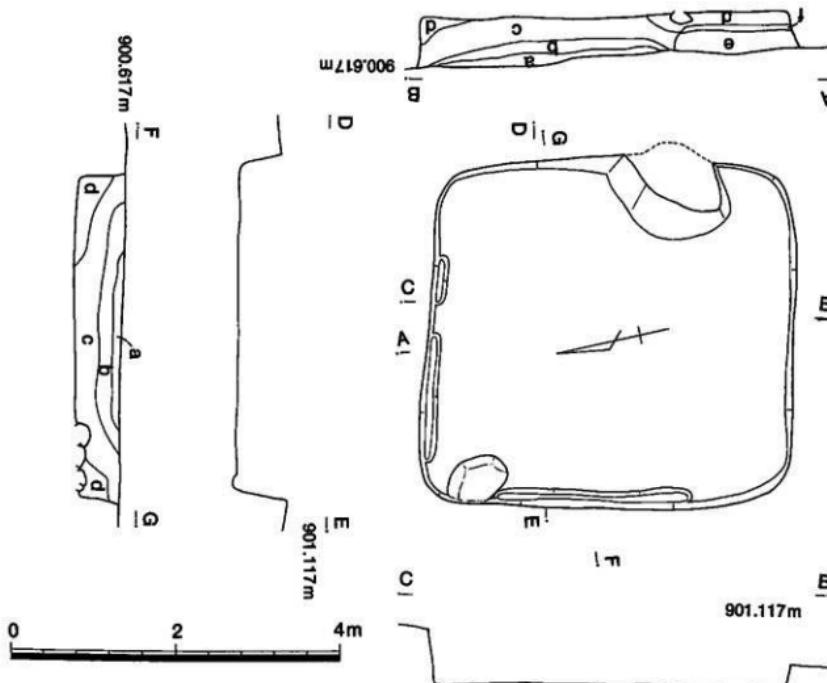
第34図1は甲斐型甕の大型破片である。薄口縁型である。厚さ7mm、長さ25mmである。カマド内出土。

土器総重量4179g。甲斐型壺破片が100gと少ない。黒色土器が1245g、甲斐型甕が1990gで図示したものの他薄口縁型が10片、厚口縁型が6片ある。甲斐型小型甕18g。ロクロ整形小型甕が356gある。須恵器が壺、壺片など453g。灰釉陶器が碗片17gと少ない。

時期については、決め手となる甲斐型壺が破片さえも僅少な状態なため限定ができないが、カマド内出土の甲斐型甕が薄口縁型である点や、体部の外傾が強い須恵器壺の存在から甲斐編年Ⅸ～Ⅹ期と考えたい。

13号住居址

造構（第35図） 北調査区の住居址群の内最も南に位置する。南北4.3～4.5m、東西4～4.3mの隅丸方形で、壁高が50～60cmと深い。周溝が北壁の中央付近から西半部と、西壁中央部に見られる。幅15cm程度、深さ5cm程度



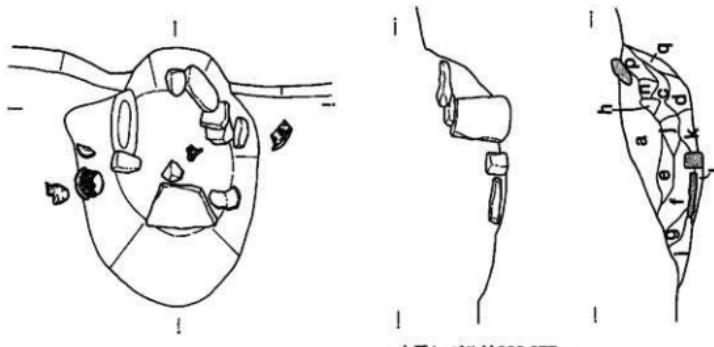
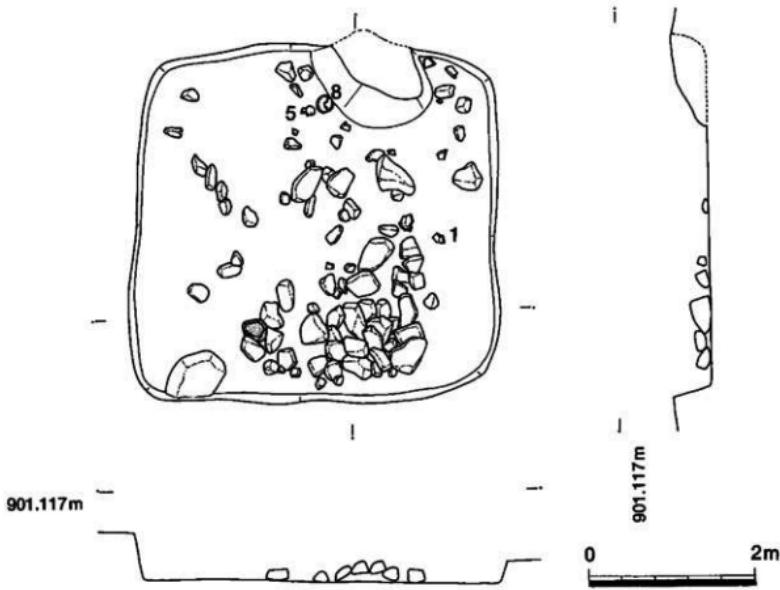
13号住居址土層説明

a 層暗褐色土（部分的に小礫を含み全体に砂質）、b 増茶褐色土（小礫を含み粘性しまり共に弱い）、c 層褐色土（小礫と部分的に掌大前後の礫を含み粘性しまり共に弱い）、d 増茶褐色土（礫の混入は見られず粘性しまり共に弱い）、e 層黒褐色土（小礫を多く含み粘性しまり共に弱い）、f 層黒褐色土（黄褐色土粒子を含み粘性しまりあり全体に硬質）。

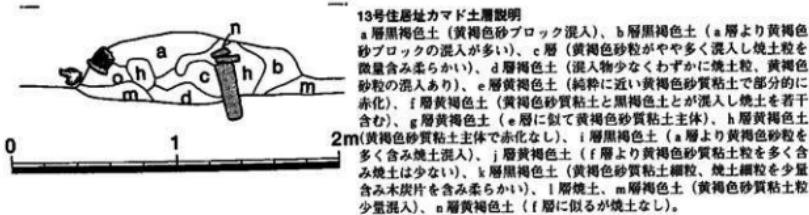
第35図 13号住居址 (1/60)

である。北西隅に自然の巨礫が露出する。なお、土層断面のf層は6号溝の底部で道の硬化面であり、e層はその覆土である。また、住居址西半部を中心に多量の大型礫が床面上に分布していた。特に西壁側では集積状態を呈していた。この巨礫の集合体は西壁から20cmほど離れた位置にあり、長さ2mにわたって西壁との間に礫のない空間がある点が注目される。西壁には周溝があり、これと関連するなんらかの構造物（板壁など）が存在していた可能性もある。この巨礫は西壁付近が最も密集した状態で、東側にむかって分散する状態を示しており、西壁側から床面に投棄されたものである可能性がある。集積状態の礫の群集の北端部に磨り面を持つ巨礫（第47図1）が位置する。

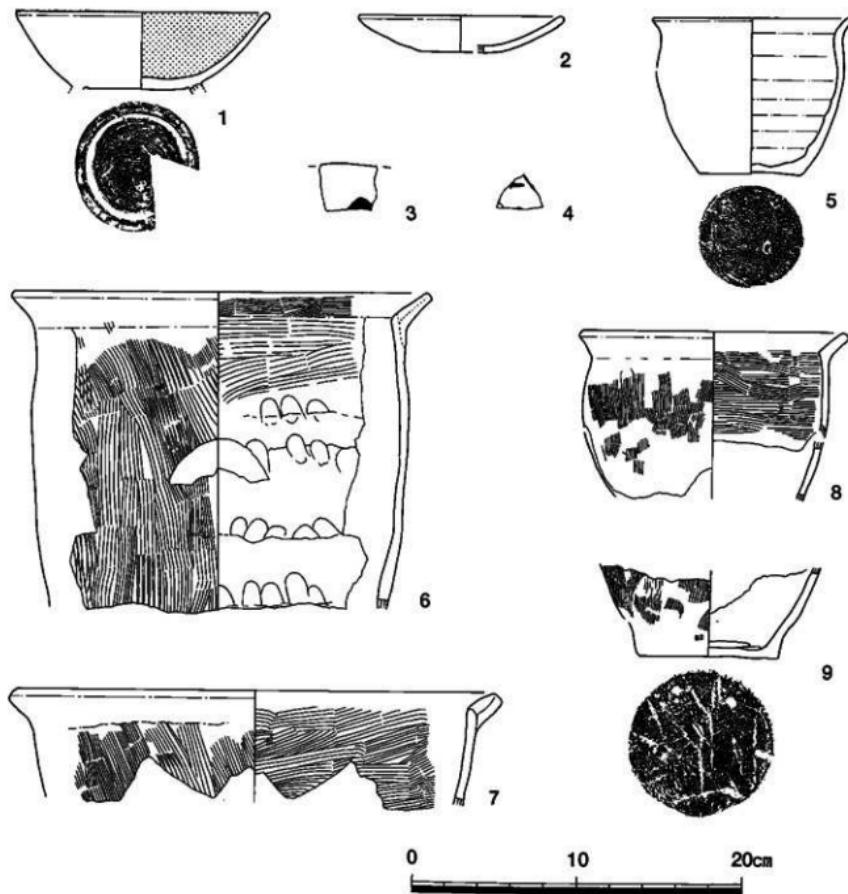
カマドは東壁中央やや南よりに位置する。むかって左側の袖石は遺存せず、奥側の袖石の掘り込みが見られた。右側の袖石は比較的大型の板状巨礫が直立状態で遺存する。その上面に2個の礫が重ねるように置かれている。さらにその上に重ねるように煙道上に小礫が位置する。この部分は12号住居址のカマド構造と近似する。袖石の外側や上部にはカマド構築材と思われる黄褐色砂質粘土が分布し（h、n層）、カマドの南東部は構築材も含めて良好な状態で遺存していると思われる。燃焼部には厚さ4cmの扁平な板状礫が1枚敷かれている。その背後に



水系レベルは900.277m



第36図 13号住居址 (1/60) とカマド (1/30)



第37図 13号住居址出土土器 (1/3)

高さ10cmほどの縄が埋設されており、支脚と思われるが露出部分が5cmと短く、これのみでは機能していなかつた可能性がある。カマド奥部は幅55cm、奥行15cmにわたって突出するが、他の住居址のカマドと比較して突出が弱く、煙道部の立ち上がりが急である。

出土土器 (第37図) 1は黒色土器の碗である。高台部分を欠損する。口舌が若干外反する。カマド内および床面上出土。2は土師器の皿で黄褐色で石英、長石、白色岩片、黒赤色岩片などの鉱物粒子を多量に含む軟質な胎土で、甲斐型ではない。内面および口縁部はロクロナデ調整であるが、外面体部下部は器壁が荒れていて不明瞭ながら手持ちヘラ削りと思われる。底部も糸切り痕など不明であるが、ヘラ調整されている可能性がある。西壁周溝内出土。3、4は墨書き器で、3が黒色土器口縁部、4が甲斐型壊胴部破片で外面ヘラ削り、内面ロクロナデで暗文は見られない。いずれも覆土中出土。5はロクロ整形の小型甌で内外面ともロクロナデながら外面はヘラ状工具を用いているようだ。底部は回転糸切り無調整である。6は甲斐型甌で、口縁部の厚さが9mm、長さが

25mmで口縁部前面に粘土紐を貼付しており、厚口縁型である。内面胴部下半部は指頭による押さえ痕が明瞭である。カマド内およびその周辺出土。7は甲斐型甕の厚口縁型で、厚さ12mm、長さ20mmで口縁部外側に厚い粘土紐を貼付している。カマド内およびその周辺出土。8は甲斐型小型甕である。口縁部内側は横方向ハケ目の後横ナデである。カマド脇出土。9は甲斐型甕の底部である。覆土中出土。

土器総重量が3201g。甲斐型坏の破片が50gで隆玉縁口縁の破片が目立つ。黒色土器が303g。その他の坏が49g。甲斐型甕が2146gで図示した以外に厚口縁型が8片、薄口縁が2片である。甲斐型小型甕が315g、ロクロ整形小型甕が222g。須恵器甕片が1片あり80g。灰釉陶器はない。

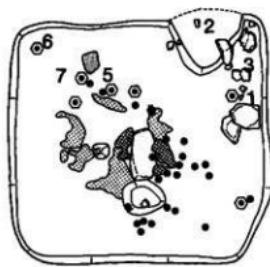
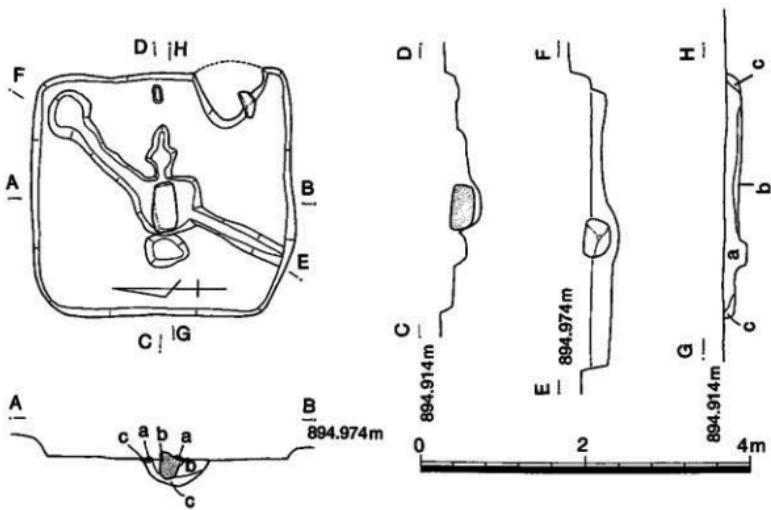
時期については厚口縁型の甲斐型甕があり、覆土中ながら隆玉縁口縁の甲斐型坏がみられる点などから、甲斐編年Ⅱ～Ⅳ期と思われる。

小鐵冶遺構

遺構（第38図）南調査区の南西隅に位置し、他の住居址群から離れて位置している。南北3～3.2m、東西2.9～3mの隅丸方形で、壁高は15～20cmである。周溝はない。中央に長さ60cm、幅30cm、高さ25cmの巨礫を長軸を東西方向にして設置している。巨礫を10cmほど床面上に露出させ、埋設している。埋設にあたり直径80cm、深さ30cmほどの不整円形のピットを掘り、底面から10cmほど浮かせて設置している。長軸方向の上面は直線的でやや東に傾斜するもののほぼ水平に設置されている。この巨礫は露出した上面になめらかな面などを持ち、鉄製品の鍛打の時に使用した金床石と思われる。周辺には鉄製品の鍛打のおりに飛び散る鍛打剥片が数cmの厚みをもって分布している。その上面を詳細に観察すると、幅15～20cm、長さ50cmにわたって礫面がなめらかな部分があり、長辺の北側が最も高く、南側に緩やかに傾斜する面を形成している。西南部分の傾斜の低い部分に特になめらかな部分がある。また、長軸の中央部分で長さ30cmほどの部分にうっすらと赤みがある部分があり部分的に厚みをもった鉄分が付着している。このなめらかな部分は礫表面がたびたびの打撃で凹凸が平滑化されたもので、赤みのある部分や鉄分の付着する部分で鉄製品の鍛打が行なわれ、その周辺に鍛打のハンマーがすべてなめらかな面を形成したものと推定したい。

金床石のあるピットから北東コーナーと南壁西側にむかって溝が掘られていた。北側のものは幅25cm程度、深さ10～20cmで、中央が最も高く、北および南側の金床石の設置されたピットにむかって低くなっている。溝の北端は直径50cm程度の円形のピットとなっており、壁とは連結していない。この溝の覆土中には木炭片が多く入るが焼土や灰はまったく含まない。南側の溝は幅25cm程度、深さ25cm程度で北側の溝よりも深い。南壁に連結した部分が最も浅く、金床石を敷設したピットにむかって深くなっている。なお、金床石のピットの底部はこの両溝より深く、溝の機能を考える場合、遺構内の水気を外部に排出するような機能は考えられない。北側に溝については、この部分を境に東側にフィゴの羽口が分布し、西側には遺物分布がなく焼けた床が存在し遺構、遺物の空間分布の境界線となっている。このことから、間仕切り的な構造物が存在していた可能性を指摘したい。南側の溝についてはその上に羽口や鉄滓が分布し、この遺構が機能していた時には埋められていた可能性がある。金床石を敷設したピットの東側には不整形の短い溝がある。最深部が20cm程度で東にむかって徐々に浅くなっている。その延長線上で東壁近くに深さ2～3cm程度のごく浅い溝が見られる。中央が直径30cmほどの円形をなし、あるいはピットと溝が複合したものと認識してよいかもしれない。この配列状態から察して両者は構造上なんらかの関連性をもっている可能性がある。なお、ピット状の部分の南端部に灰の入った小ピットがあった。灰は鉄を折り重ねながら鍛打する時の結合材として使われるらしく、この可能性を考え特にここで記載しておく。金床石の西側には直径40cm程度の円形のピットが隣接する。深さ15cm程度と浅いが、底面レベルは金床石東側の溝と複合したピットとほぼ同じである。金床石の長軸状に東西に隣接して浅いピットが存在することになる。

カマドは東壁の南東コーナー近くに位置する。袖石は残存せず、掘り込みは不明瞭である。燃焼部に直径30cmの板状の巨礫が横になっていてその周辺に大小の礫が重ねられたようにまとめられている。カマドの西側で南壁中央直下に直径30～40cmほどの板状の巨大礫が2個重なって横になっている。これらはカマドの構築材の一部と



■ 焼けた床面

■ 銀打剥片ブロック

■ 焼土ブロック

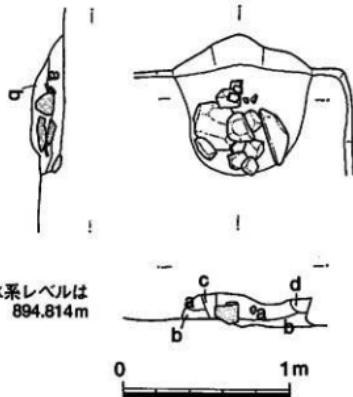
● 灰の入ったピット

◎ 羽口片

● 鉄滓

小鍛冶造構土層説明

A-Bライン：a 層銀打剥片ブロック、b 層黒褐色粘質土（貼り床ブロックである黄褐色粘土ブロックを多く含む）、c 層黄褐色粘土（貼り床）、d 層暗褐色粘質土（褐色砂質土ブロックを少量含みやや砂質）。G-Hライン：a 層黒褐色土（黄褐色土ブロック混入）、b 層黒褐色土（焼土粒、砂粒混入）、c 層明褐色土（黄褐色土、砂粒混入）。

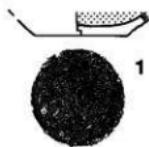


小鍛冶造構カマド土層説明

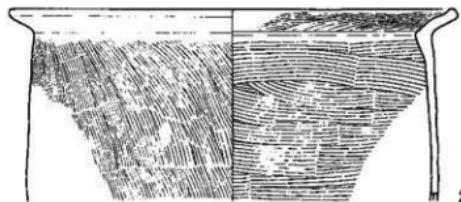
a 層暗褐色土（焼土を含み粘性あり）、b 層黒褐色土（少量の焼土、黄褐色土粒子を含む）、c 層黒褐色土（粗石を抜いた跡で焼土、木炭片は一切含まれず粘性しまりあり）、d 層黄褐色土ブロック（焼土を少量含み粘性しまりあり）。

水系レベルは
894.614m

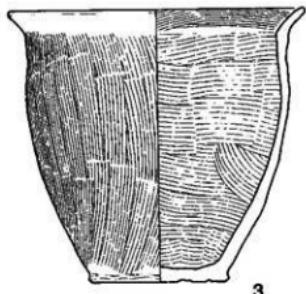
第38図 小鍛冶造構（1/60）とカマド（1/30）



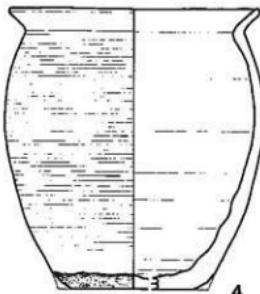
1



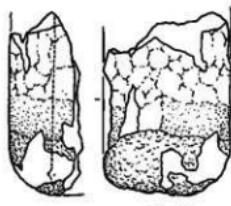
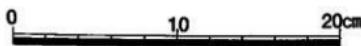
2



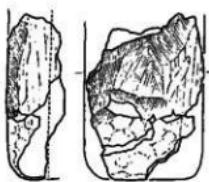
3



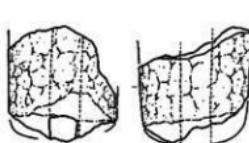
4



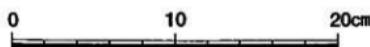
5



6



7



第39図 小銀冶遺構出土土器 (1/3)

考えられる。カマドの前面に隣接した直径1mほどの空間は床面が特に硬く明瞭であった。カマドの奥部は幅80cm奥行20cmが突出している。他の小規模な住居址のカマドも本遺構同様に左右両袖とともに取り除かれるかたちでかなり強度に壊されている点で共通する。したがって、本遺構も小鍛冶遺構と工房的な性格の強い遺構ではあるが、カマドが構築されていたものと思われる。ただし、問題はこのカマドが小鍛冶の工房として機能していた時にも機能していたかどうかである。通常の住居として当初機能していたものを、居住を停止した後に工房として転用したことも考えられ、その場合カマドは初期の居住を終えた段階で機能停止ないしは出土状態のように廃絶していた可能性も考えられる。今回の調査資料の範囲ではいずれかを決する材料は得られていない。

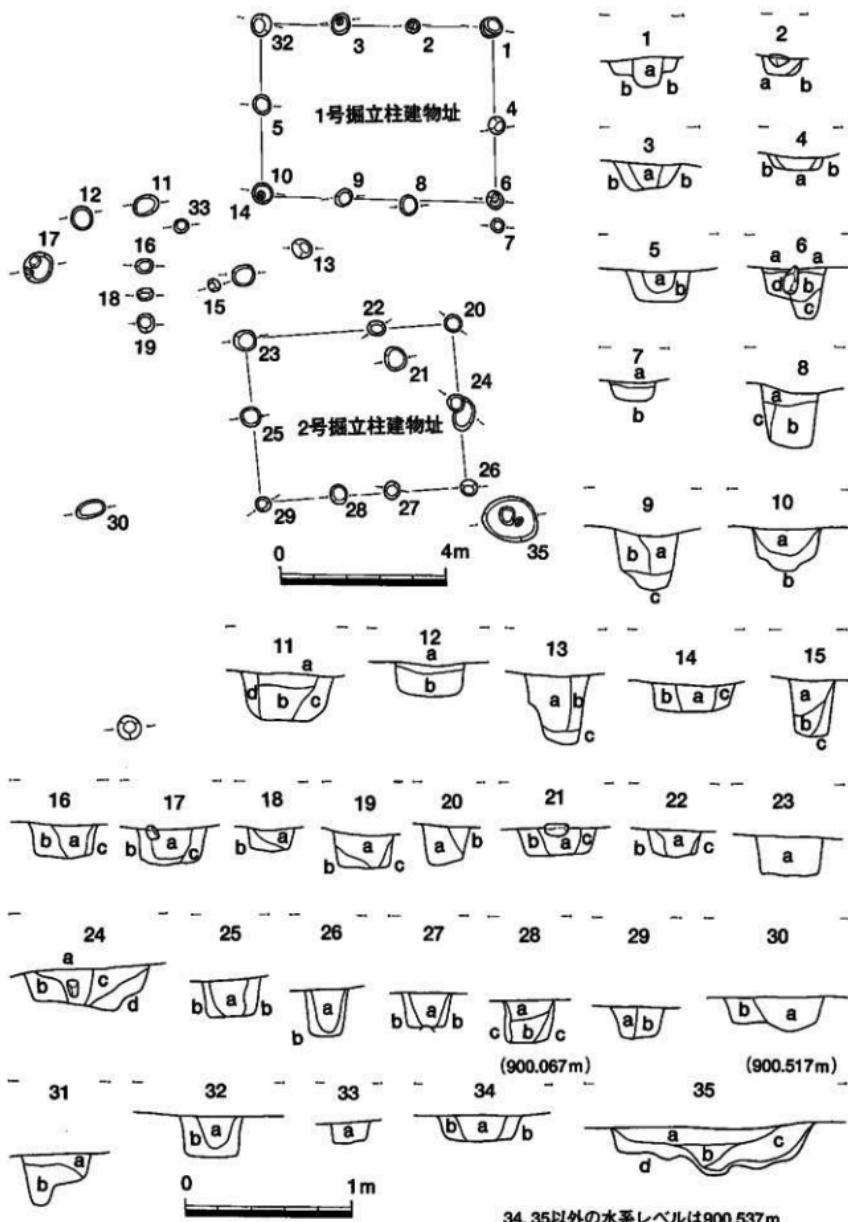
本遺構からは土器の他、フイゴの羽口、鉄滓が多く出土している。これらの出土位置から、本遺構の空間構造が推定できる。まず、羽口は遺構北東部、特に金床石北側の溝より東側に集中する。その空間内には直径20cmほどの焼土塊が見られる。金床石北側には焼けた床面が金床石に隣接して直径1m程度の範囲で見られる。その中央に直径20cm程度の小礫が置かれている。遺構南東部には鉄滓が集中分布する。遺構南東部にはカマドとその構築材、甕、小型甕などの土器大型破片がカマド脇や壁ぎわに分布している。金床石の北と南に接して鍛打剥片が厚く集積したブロックが見られる。こうした状況から判断して、中央の金床石での鍛打作業は金床石北側に作業人が位置し南にむかって作業を行なったものと考えられる。作業人の東側には隔壁によって仕切られた炉（焼土塊）があり、そこと羽口によって連結された送風装置であるフイゴが隔壁の手前に置かれていたものと理解したい。したがって、作業人は左手でフイゴを握り、右手にヤットコをもって鉄製品を加熱していたと理解される。したがって、金床石上での鍛打も右手にヤットコでつまんだ加熱状態の鉄製品、左手に打撃用のハンマー（遺在していない）をもって作業していた可能性が考えられる。遺構の南東部には鉄滓が多量に分布するが炉底部にたまたま鉄滓をかき出し廃棄したものと考えられる。隣接する東姥神B遺跡の小鍛冶遺構でも鉄滓は南東部に集中分布するとともに、鉄の地金が出土している。この部分にこれから加工する鉄地金をはじめ、炭などの小鍛冶活動に必要な材料がここに保管されていた可能性を考えたい。そして、カマド周辺の南東部の空間は生活用の土器が置かれカマドの使用を中心とした空間であった（カマドが同時に機能していた場合）か、小鍛冶関係物品をあまり持ち込まない空間として意識され（カマドが廃棄されていた場合）、いずれにしても小鍛冶活動から切り離された空間を形成していた可能性がある。

出土土器（第39図）1は黒色土器の壺である。底部外面回転糸切り無調整である。南壁ぎわ出土。2は甲斐型甕で薄口縁型である。厚さ7mm、長さ26mm。カマド内出土。3は甲斐型の小型甕である。木葉底である。カマド脇出土。4はロクロ整形の小型甕で、外面カキメ調整である。カマド内出土。5～7はフイゴの羽口である。5は図の正面下端部に溶融物が付着し粘土が変質して発泡状態である。その直上部では茶色の物質が多量に付着している。正面上方では指頭による押さえ痕が明瞭で付着物は見られない。外径の推定直径は7.8cm、穴の推定直径は2.2cmである。胎土は黄褐色粘土に砂粒、岩片が多く入り、纖維の混入も見られ、ひじょうにもろい。6は溶融物の付着が見られない。図下部は指頭による押さえ、上半は細かな目のハケ状工具によるナデ調整と、右側はヘラ状工具による削りのような調整が見られる。胎土に白色粒子が多く入り、ほとんど粘土の状態で焼成は受けていない。外径の推定直径7.2cm、穴の推定直径1.7cmである。7は全体に指頭による押さえ痕が見られる。下端部全体が茶褐色に変色し一部が灰色に還元焼成状態となっている。白褐色の胎土で花崗岩片が多く見られ纖維が多量に混入し非常に脆弱である。外径直径6.8cm、穴の直径2cmである。炉と思われる焼土塊の北西に近接し、焼成を受けた下端部を焼土塊側にむけて出土しており、装着状態を示している可能性が高い。この他、鉄滓多数、羽口片多数出土。土器総重量は1540g。甲斐型壺ではなく、黒色土器が50g、その他の壺が10gである。甲斐型甕は670g。甲斐型小型甕450g。ロクロ整形小型甕が360g。溶融物付着壺片2片10gがある。

時期としてはカマド脇の薄口縁型の甕しかなく、甲斐編年Ⅹ～Ⅹ期であろう。

1・2号掘立柱建物址

遺構（第40図）北調査区の南西部に2棟の掘立柱建物址は隣接して位置する。1号掘立柱建物址はその内北側



第40図 1・2号掘立柱建物址 (平図図1/120、土層断面図1/30)

1・2号掘立柱建址土層説明

1～5：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層褐色土（黒味があり黄褐色土粒子少ない）。6：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層褐色土（砂質褐色土と黒褐色土が斑状に混在する）、c層褐色土（b層に似るが斑が細かく黒味が強い）、d層暗褐色土（小礫を含みボロボロ）。7：a層褐色土（黒味があり黄褐色土粒子少ない）、b層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）。8：a層暗褐色土（さいまりなく粒子が粗い）、b層黒褐色土（やわらかく土壤粒子が細かい）、c層褐色土（黒味強く黄褐色粒子が少ない）。9：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層褐色土（砂質褐色土と黒褐色土が斑状に混在しボロボロ）、c層黒褐色土（柔らかく土壤粒子が細かい）。10：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層暗褐色土（黒味強くしまりあり）、c層暗褐色土（黄褐色土粒子を多く含む）。11：a層黒褐色土（黄褐色土ブロックが斑状に混在ししまりあり）、b層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、c層褐色土（黒味があり黄褐色土粒子少ない）。12：a層黒褐色土（黄褐色土ブロックが斑状に混在ししまりあり）、b層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）。13：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層褐色土（砂質褐色土主体でよくしまっている）、c層黒褐色土（柔らかく土壤粒子が細かい）。14：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層暗褐色土（黒味強くしまりあり）、c層暗褐色土（黄褐色土粒子を多く含む）。15：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層暗褐色土（黒味強くしまりあり）、c層褐色土（砂質褐色土主体でよくしまっている）。16：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層暗褐色土（あまりしまりなく粒子が粗い）、c層暗褐色土（黄褐色土粒子が多い）。17：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層暗褐色土（黒味強くしまりあり）、c層暗褐色土（黄褐色土粒子を多く含む）。18：a層黒褐色土（黄褐色土ブロックが斑状に混在ししまりあり）、b層暗褐色土（黒味があり全体に緻密で黄褐色土粒子を含む）。19：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層暗褐色土（黒味があり全体に緻密で黄褐色土粒子を含む）、c層褐色土（黒味強く黄褐色土粒子が少ない）。20：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層暗褐色土（黒味強くしまりあり）。21：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層暗褐色土（砂質黒褐色土主体でしまりが強い）。22：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層褐色土（砂質黒褐色土主体で若干混入する）、c層褐色土（砂質黒褐色土主体でしまりが強い）。23：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）。24：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりがあるが粒子が粗く小礫も混入する）、c層黒褐色土（b層に似るが黄褐色土粒子が入る）、d層暗褐色土（黒味強く小礫が混入する）。25：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層暗褐色土（黒味強くしまりあり）。26：a層黒褐色土（柔らかくボロボロ、黄褐色土粒子を多く含む）。27：a層暗褐色土（砂質黄褐色土粒子が多量に混入しまりなし）、b層暗褐色土（黒味強くしまりあり）。28：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層黒褐色土（小礫、褐色砂層ブロックを多く含む）、c層褐色土（砂質黄褐色土主体でしまり強い）。29：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層褐色土（砂質黄褐色土主体でしまり強い）。30：a層黒褐色土（全体にしまり強く黄褐色土が斑状に混入）、b層暗褐色土（緻密でしまり強い）。31：a層褐色土（砂質黄褐色土と黒褐色土が斑状に混在する）、b層暗褐色土（黒味強くしまりあり）。32：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）、b層暗褐色土（黄褐色土粒子が多く含まれる）。33：a層黒褐色土（黒味が最も強くややしまりあり）。34：a層黒褐色土（小礫を含み粘性なし）、b層黒褐色土（黄褐色土粒子含み粘性なく小礫を含むがa層より少ない）。35：a層黒褐色土（小礫、黄褐色土粒子を少量含む）、b層黒褐色土（小礫、黄褐色土粒子を含むがa層より少ない）、c層黒褐色土（小礫、黄褐色土粒子、木炭片を含む）、d層茶褐色土（黄褐色土粒子やブロックを多量に含む）。

に位置し、東西に柱穴4個柱間3間、南北に柱穴3個柱間2間の計10個の柱穴によって構成される。東西が心心で5.8m、南北4mである。南北列の中央2個の柱間が北が1.8m、南が1.6mで、両端との柱間がいざれも2mでありそれに比べて短く設定されている点が注意される。長軸が東西方向で西側がやや北側に傾く。柱穴は直径40cm程度で、深さは北側列が浅く10～15cm程度、南列は25～30cm程度である。南列は傾斜の下方にあり、傾斜の下方を深くしていることになる。

2号掘立柱建物址は1号掘立柱建物址の南片から2.6～3m南に位置する。北列に3個の柱穴、南列に4個3間の柱間、東西列は3個2間の柱間である。東西5m、南北4mである。長軸はほぼ南北方向である。やはり南列中央の2個の間隔が1.4mであるのに対し、その両側は2と内側の柱間が短く設定されている点、1号掘立柱建物址と類似する。柱の直径は40cm程度、深さは20～25cmで、1号掘立柱建物址のような南北列の深さの違いは見られない。

この他、両掘立柱建物址の西側に10個の小ビットが集中分布するが、掘立柱建物址のような配列状況は示さない。両建物に関連した樋状の構造が存在したかもしれない。

出土土器 柱穴内の出土遺物はまったく見られない。したがって、時期の決め手に欠く。

土坑

遺構（第41図）12基の土坑が確認できた。1、3、4号土坑が南調査区の南辺中央に集まっている。1号土坑は直径約80cmの円形で、深さ約40cm。3号土坑は長軸約110cm、短軸約80cmの楕円形である。南北方向に長い。4号土坑は直径約80cmの円形で、深さ30cm。この一群の土坑の北西に2号土坑がある。直径約100cmの円形で、深さ約50cm。5号土坑は10号住居址の北側にあり東西200cm、南北120cmの不整円形である。深さ30cmで西側に2個の自然巨大礫が露出している。その間に3個の黒曜石原石（第49図）がまとめて置かれていた。出土レベルは土坑底面より5cmほど高い。時期の決め手に欠くが黒曜石埋納遺構という性格を考えると縄文時代である可能性が考えられる。

6～12号土坑は北調査区北西部に分布する。6号土坑は東西180cm、南北110cmの長方形で、深さ約30cmである。長軸が東西方向、軸の西がやや北による。中央やや東よりに巨礫が置かれている。11号住居址の覆土中に掘られており、この住居址が完全に埋没した後の時期のものと推測できる。出土遺物は見られないが古代後半から中世と考えられる。7号土坑は6号土坑の南西約4mの位置にある。長軸120cm、短軸80cmで、長軸が南北方向、北側がやや東に傾く。北側の辺が円弧を描き他の辺は直線的である。深さ15cm程度で中央やや南よりに人頭大の礫が置かれていた。この点6号土坑の似るが、6号土坑では床面に置かれていたのに対しこの礫は覆土中に浮いている。礫が設置されていたり形態的に6号土坑に近似するので時期的にも近いものだろう。8号土坑は北調査区の北端部に位置する。直径約50cmの円形で、深さ40cm。中に礫が2個入っていた。9号土坑も北調査区の北端部にあり、直径40cm、深さ15cmである。10号土坑は北調査区土坑群の最も西に位置する。長軸120cm、短軸80cmの楕円形で、深さ25cmである。長軸がほぼ東西方向である。11号土坑はその東側にあり、長軸70cm、短軸60cmの略正方形である。深さ20cm。12号土坑は11号土坑の北東に隣接し、直径約60cmの円形で、深さ50cmである。

出土土器（第46図）8、9が10号土坑出土である。8は甲斐型壺の隆玉縁口縁で底部付近手持ちヘラ削り。9は甲斐型壺の内面黒色処理されたもので墨書き土器である。外面ヘラ削り。この他、隆玉縁口縁を中心とした甲斐型壺破片が60g、黒色土器片20g、甲斐型甕片10g、灰釉陶器の壺頸部片1片10gが出土し、10号土坑は土坑の中では最も多くの出土遺物である。時期は甲斐編年Ⅲ期である。

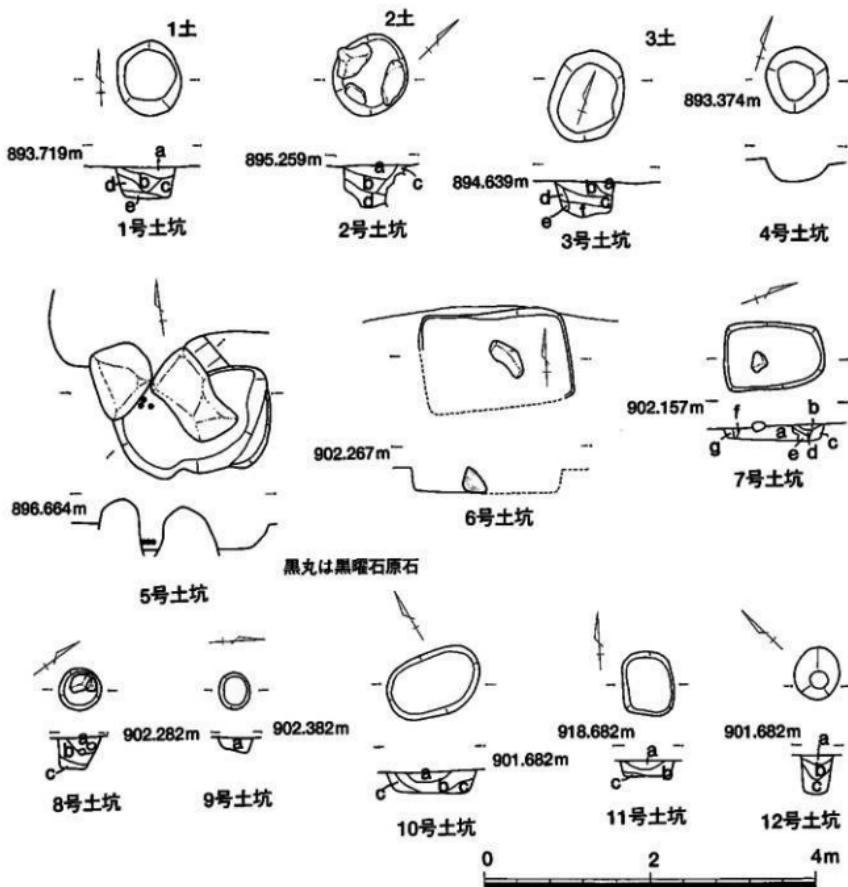
10が11号土坑出土である。土師器小型甕で、内外ともナデ調整で器壁が非常に薄い。胎土は石英、長石、雲母を多量に含み、甲斐型の胎土である。この他、内面の研磨されているが黒色処理がなされていない土師器壺がある。時期の限定はできない。

この他の土坑からは出土遺物がなかった。

溝

遺構（第42図）1号溝は南調査区の西側にあり、調査区を延長65mにわたって南北方向に継続している。北部ではクランク状に折れ曲がる。幅80cm程度、深さ10cm程度で覆土は砂である。2号溝としたものは、1号溝と中央付近から分岐したもので、長さ約20m、幅2m程度、深さ10cm程度で、砂が覆土である。出土遺物はない。調査段階で3号溝としたものは自然地形であったためここでは記載しない。4号溝は南調査区の東側にあり、調査区を延長36mにわたって南北方向に継続する。幅1.2～3.2m、深さ10cm程度である。覆土は砂である。出土遺物としては須恵器3片と灰釉陶器1片があるが、図示できない。10号住居址を切っておりこれより後の時期である。5号溝は自然地形でありここでは記載しないが、出土土器については一部を示した（第46図）。6号溝は北調査区の南縁にあり、全長38mで東西方向に延びている。幅1.5m程度、深さ20cm程度で、底部が硬化している。この硬化面の存在から道である可能性がある。13号住居址を切っており、出土土器も甲斐編年Ⅲ期のものが見られ、これ以降のものと推測できる。

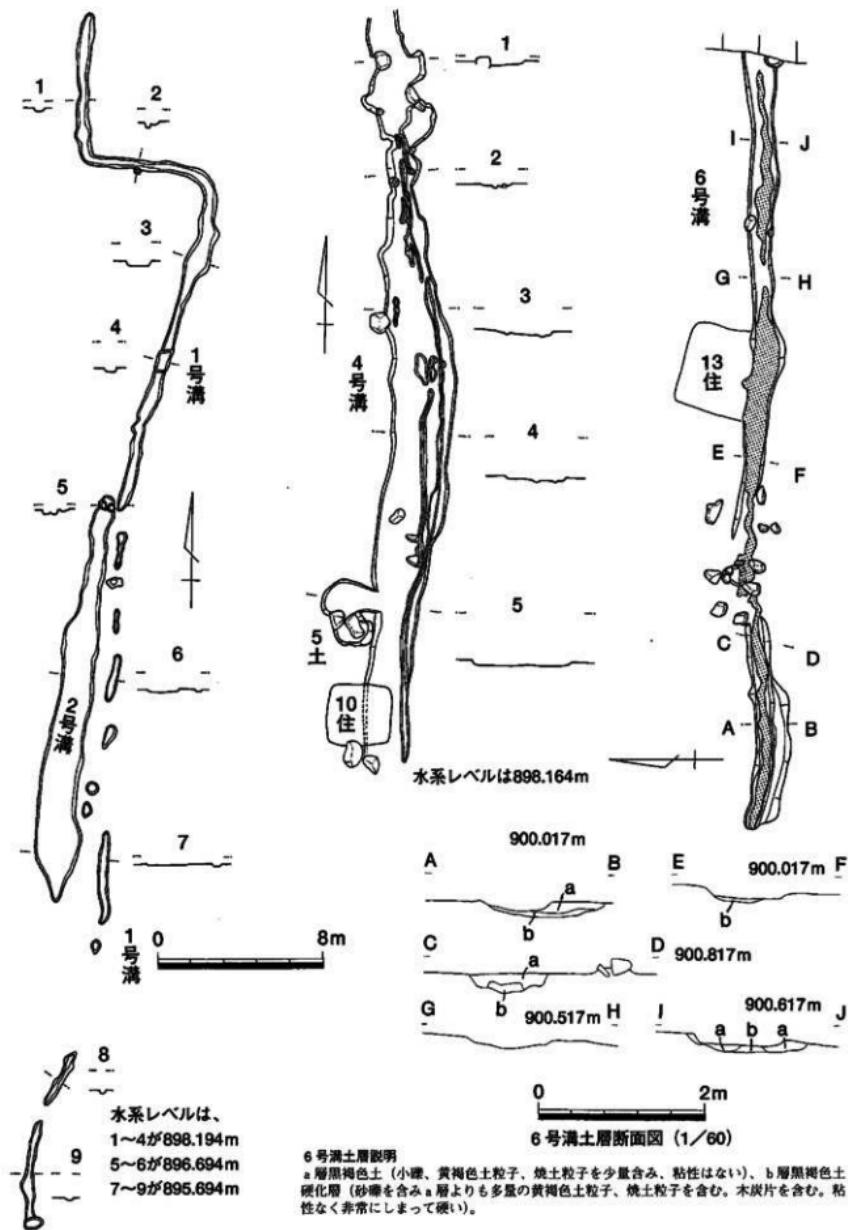
出土土器（第46図）1～3は5号溝（自然地形）の出土である。1は須恵器の突帶付き四耳壺の肩部にある突帶部である。断面三角形を呈する。2は土師器甕口縁部で口舌が内側に突出し、駿東型甕の口縁部である可能性がある。3は須恵器蓋の破片である。



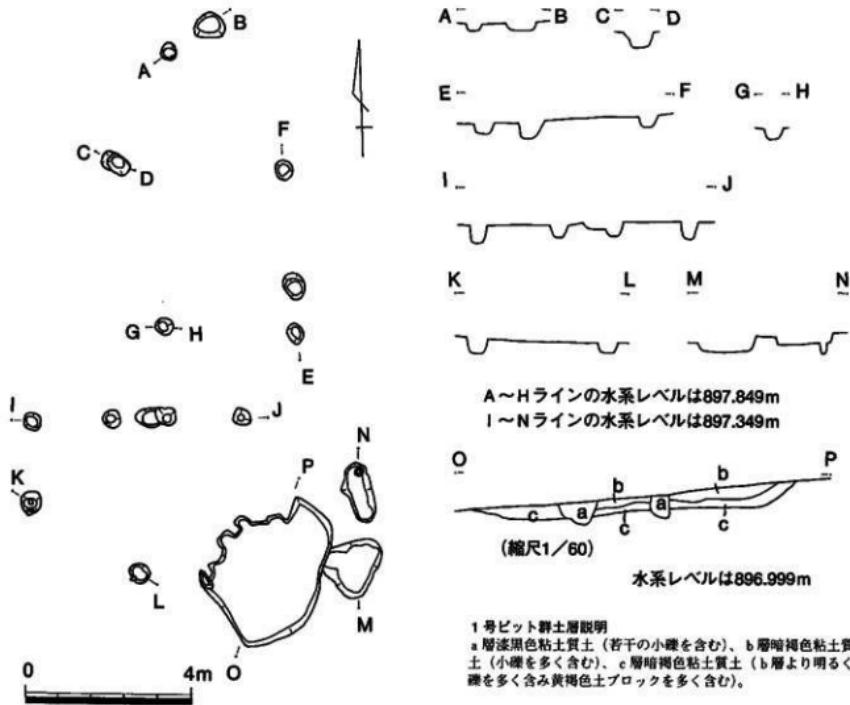
土坑土層説明

1号土坑：a 層暗褐色土、b 層褐褐色土、c 層黒褐色土（粘性なくバサバサしている）、d 層黒色土（木炭片を少量含み、粘性なし）、e 層黒褐色土（粘性若干あり、黄褐色土粒子を少量含む）。2号土坑：a 層暗褐色土、b 層褐褐色土（一部に木炭片を含む）、c 層黒褐色土（一部に黄色褐色土粒子を含む）。3号土坑：a 層茶褐色土（粘性なく、若干黄褐色土粒子を含む）、b 層黒褐色土（木炭片を少量含む）、c 層黒褐色土（一部に木炭片を含み、粘性あり）、d 層褐褐色土、e 層黃褐色土、f 層黒褐色土（木炭片を少量含み、黄褐色土粒子を含む）。7号土坑：a 層黒褐色土（木炭片を多く含み、粘性あり）、b 層褐褐色土（木炭片、黄褐色土粒子を少量含む）、c 層黒褐色土（a層よりも木炭片が少なく粘性なし）、d 層暗褐色土（木炭片を少量含む）、e 層明褐色土（木炭片を含まず全体にしまりなし）、f 層黄褐色土ブロック、g 層褐色土（少量の木炭片、燒土を含む）。8号土坑：a 層褐色土（小塊多くややしまりあり）、b 層黒褐色土、c 層黒褐色土（粒子が細かくやわらかい）。9号土坑：a 層黒褐色土。10号土坑：a 層黒褐色土、b 層褐褐色土、c 層褐色土（黄色砂質土をやや多く含む）。11号土坑：a 層褐色土（小塊若干混入）、b 層黒褐色土、c 層黄褐色土。12号土坑：a 層褐色土、b 層黒褐色土（細かい粒子でやわらかい）、c 層黒褐色土（b層より黒味強い）。

第41図 土坑 (1/60)



第42図 溝 (1/240)



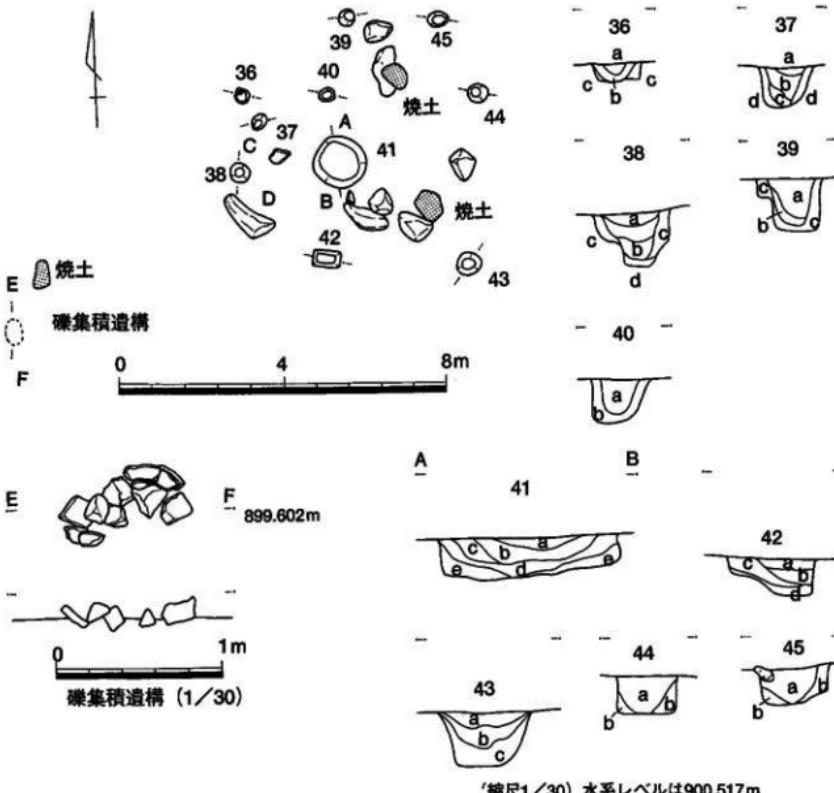
第43図 1号ピット群 (1/120)

4~7は6号溝出土土器である。4、5は甲斐型の皿破片で隆玉縁口縁である。6は土師器椀で内面研磨されているが黒色処理がなされていない。7は灰釉陶器の椀の口縁部で内外面とも全面が施釉されている。この他、鉄斧（第48図7）と直径3cmほどの小さな鐵滓が13号住居址付近から出土した。6号溝では平安時代の遺物の他に近世の陶器片が1点だけであるが出土しており、近世まで下る可能性も考えられる。

ピット群

造構（第43・44図）1号ピット群は南調査区の西部で1号溝の中央東側付近にある。直径30~40cm程度、深さ20~40cm程度の小ピットが13個が見られ、この中にはE~FラインやI~Jラインのように配列性が見られるものもある。ピット群の南東部には浅い掘り込みが見られるが自然地形の可能性が高い。出土遺物は見られない。

2号ピット群は北調査区の南部で、掘立柱建物址と12、13号住居址との間に位置する。直径30~40cm、深さ20~30cmの小ピットが9個あり、ピット番号40、42、43、44が3.6~4m、約2m間隔で方形に配置され、東西方向、南北方向に配列している。ピット番号39、45は東西方向の40、44ラインと平行し、36、38は40、42ラインと平行する。こうした状況からなんらかの上屋構造をもつ構造物であると推定される。ピット番号41は直径1.3m、深さ25cmと他と規模が違うが、これら的小ピットとの関連性が推定される。また、ピット群の内外に焼土が3ヶ所見られる。さらに1号特殊遺構は42、43ラインの中央から南へ2m、約1mの位置にあり、これらも関連性を推定させる。なお、西側の離れた位置にある焼土の南西側に直径10~20cmほどの礫の集積遺構がある。出土遺物は

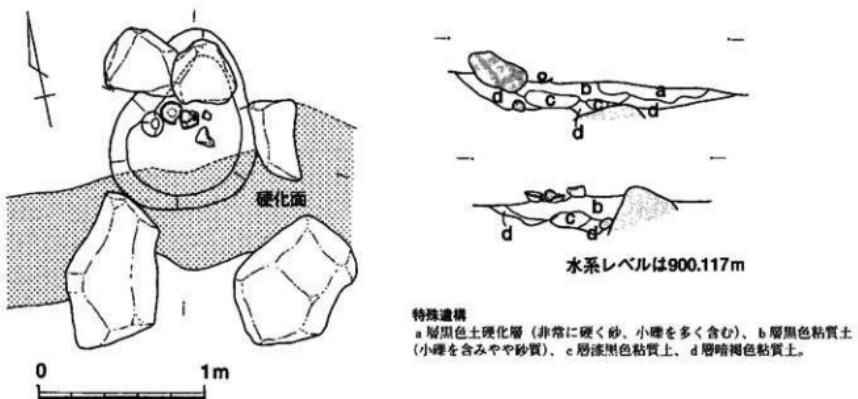


「縮尺1/30 水系レベルは900.517m」

2号ピット群土層説明

- 36: a 層黒褐色土 (小砾、焼土粒子少量含む)、c 層黒褐色土 (小砾、黄褐色土粒子を含む)、e 層黒褐色土 (黄褐色土粒子を多量に含む)。
- 37: a 層黒褐色土 (黄褐色土粒子少量含む)、b 層黒褐色土 (黄褐色土粒子少量含む)、c 層黒褐色土 (黄褐色土粒子b層より多く含む)、d 層黒褐色土 (小砾を含み黄褐色土粒子を多量に含む)。
- 38: a 層黒褐色土 (小砾、黄褐色土粒子を含む)、b 層黒褐色土 (黄褐色土粒子をa層より多く含む)、c 層黒褐色土 (黄褐色土粒子を多量に含み、小砾を含む)、d 層黒褐色土 (黄褐色土粒子をc層より多く含む)。
- 39: a 層黒褐色土 (砾、焼土粒子、黄褐色土ブロックを含む)、b 層黒褐色土 (小砾、黄褐色土粒子、焼土粒子を少量含む)、c 層黒褐色土 (黄褐色土粒子を多量に含む)。
- 40: a 層黒褐色土 (小砾、黄褐色土粒子を微量含む)、b 層黒褐色土 (小砾を含み黄褐色土粒子を多量に含む)、c 層黒褐色土 (小砾を含み黄褐色土粒子をa層より多く含む)、d 層黒褐色土 (黄褐色土粒子を多量に含み小砾を少量含む)。
- 41: a 層黒褐色土 (小砾、黄褐色土粒子を微量含む)、b 層黒褐色土 (小砾を含み黄褐色土粒子を少量含む)、c 層黒褐色土 (小砾を含み黄褐色土粒子を多量に含み小砾を少量含む)、e 層黒褐色土 (黄褐色土粒子、黄褐色土ブロックを多量に含む)。
- 42: a 層黒褐色土 (小砾、黄褐色土粒子を含む)、b 層黒褐色土 (黄褐色土粒子をa層より多く含み小砾を含む)、c 層黒褐色土 (小砾を含み黄褐色土粒子を少量含む)、d 層黒褐色土 (小砾をa層より多く含み黄褐色土粒子を少量含む)。
- 43: a 層黒褐色土 (小砾、黄褐色土粒子やブロック、木炭片、小砾を含む)、c 層黒褐色土 (小砾を含み黄褐色土粒子を多量に含む)。
- 44: a 層黒褐色土 (小砾、黄褐色土粒子を少量含む)、b 層黒褐色土 (黄褐色土粒子やブロック、木炭片、小砾を含む)。
- 45: a 層黒褐色土 (黄褐色土粒子を少量含む)、b 層黒褐色土 (黄褐色土粒子a層より多く含み小砾、木炭片を含む)、c 層黒褐色土 (黄褐色土粒子を多量に含む)。

第44図 2号ピット群 (1/120)



第45図 特殊遺構 (1/30)

ピット番号41からフイゴの羽口片1片、その南から同一個体の羽口片1片が出土。38から第48図8の鉄櫻が出土している。また、41から黒色土器の壊片1片が出土している。羽口や鉄櫻、焼土、特殊遺構などの存在から、本遺跡で行なわれている小鋳冶活動との関連性が考えられ、直接小鋳冶を行なった場とは考えられないが、それに伴う儀礼的行為の場であった可能性は考えられる。

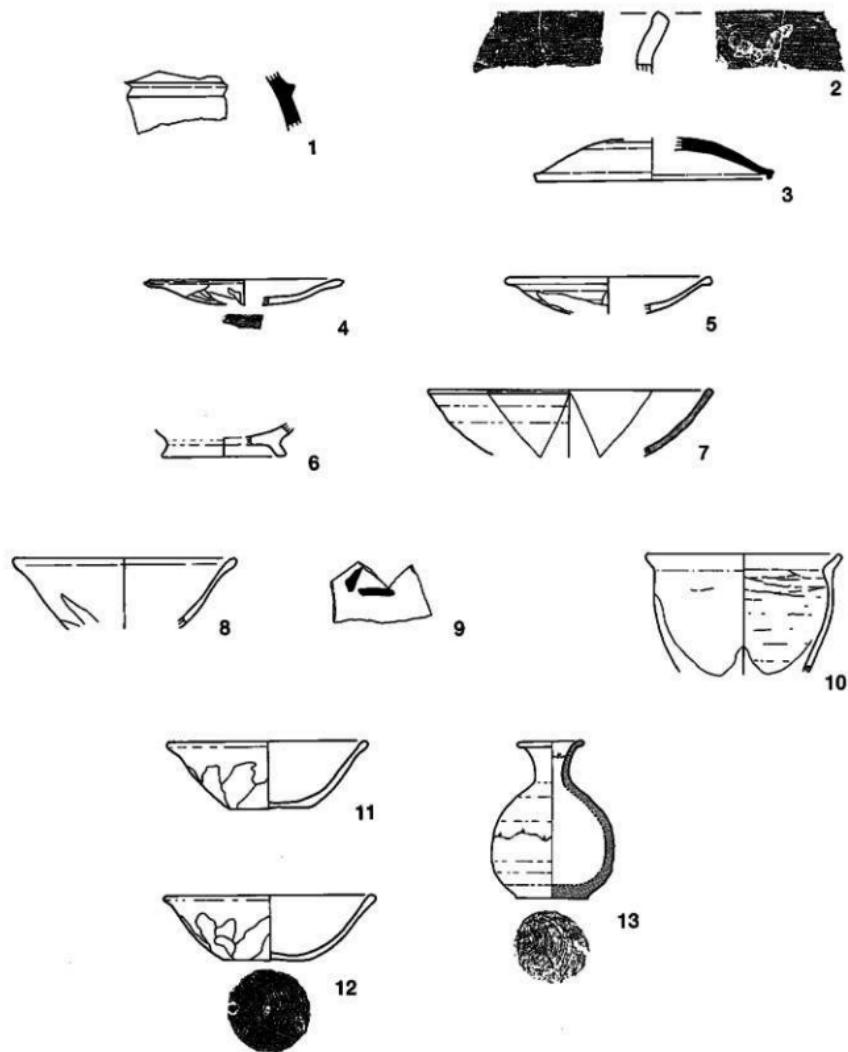
特殊遺構

遺構（第45図）北調査区の南辺中央部、2号ピット群の南に近接して位置する。4個の露出した自然巨大蝶に囲まれた中に直径80cm程度の不整円形の掘り込みが深さ20cm程度で掘り込まれ、それを黒色土で埋めた上に2個の甲斐型坏と1個の灰釉陶器小瓶が置かれている。甲斐型坏の1個は3分の2ほどの個体で、もう1個は底部を含んで2分の1程度の個体であり、いずれも口縁部を上にして後者の上に口縁部を一部欠いただけではば完形の灰釉陶器小瓶が横にして置かれていた。その3個の土器の背後に直径40cm程度、厚さ15cmほどの巨蝶が置かれていた。その南側は6号溝の道の硬化面が覆うが後世のもので、関連性はないだろう。

出土土器（第46図）11は甲斐型坏で隆玉縁口縁である。出土状態で東側に位置し灰釉陶器小瓶を乗せていた個体である。12は甲斐型坏の隆玉縁口縁である。底部は回転糸切りの後ヘラ削り。13は灰釉陶器小瓶である。底部回転糸切り無調整で、胴部中央まで施釉が見られる。透明感のある白灰色の胎土で、黒斑点が見られる。時期は甲斐型坏から甲斐編年層期の本遺跡最終末の時期と思われる。

石製品

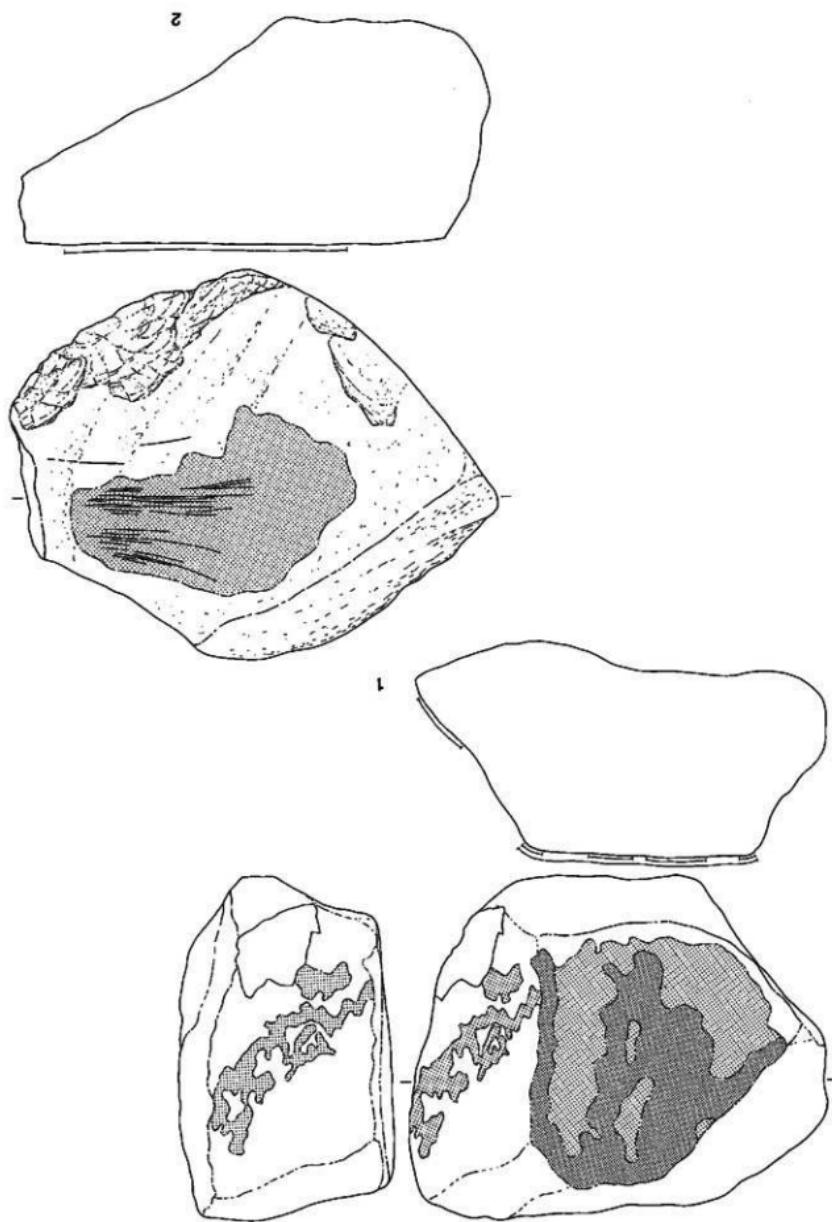
第47図1は磨り面を持つ巨蝶である。長軸34cm、短軸26cm、厚さ16cmの蝶の平坦面を利用している。平坦面は底辺20cm、高さ20cmの三角形状を呈し、その全面を磨り面としているが、面の中の比較的高い部分が強度に磨られている（濃い網点部分）。磨り面はその縁部で隣接する傾斜面側にまわり込んでいる。また、図右側の傾斜面にも磨り面が及んでいる。弱い磨り面で斜めに帯状に見られ、高い部分のみ磨られている。安山岩。13号住居址の床面上の集積状態の一群の蝶の内、最も北に位置していた。2は磨り面を持つ巨蝶である。長軸38cm、短軸31cm、厚さ18cmの巨蝶の平坦面を利用している。平坦面は一辺25cm程度の菱形を呈し、図下端部は自然状態での剥離痕である。平坦面の中央部分の長軸23cm、短軸15cmほどの範囲が弱く磨られており、長軸に沿って太い擦痕が見られる。擦痕は図右から左にむかって東が放射状に開くように見られる。擦痕は磨り面の外側にも見られる。



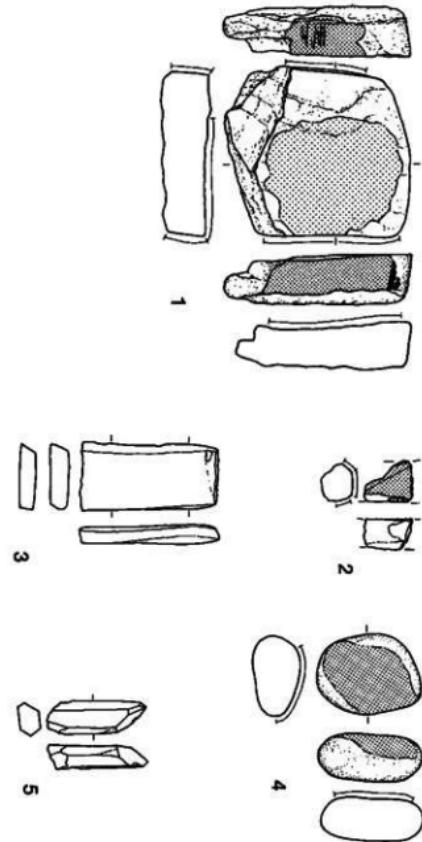
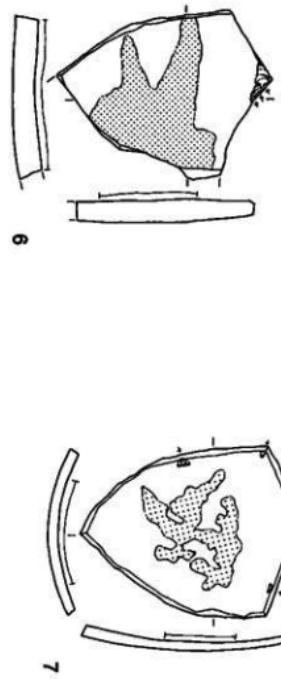
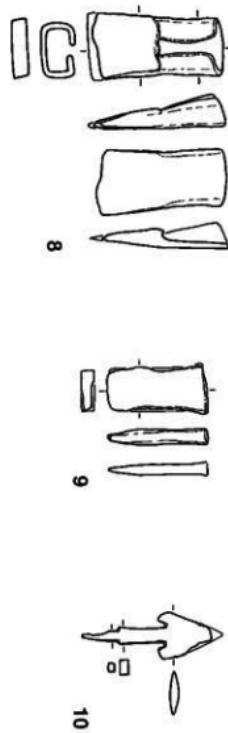
0 10 20cm

第46図 溝、土坑、特殊造模出土土器 (1/3)

圖47 平安時代瓦器品 (1/4)



第48図 平安時代石製品、板用器、鉄製品（1／3）



11号住居址南壁中央やや東より付近に磨り面を上にして埋設されていた。安山岩。

第48図1は磨り面を持つ砾である。1辺10cm程度、厚さ2.5cm程度の方形板状の小砾の片側の平坦面と両横口を利用している。広い平坦面の直径8cmほどの範囲に磨り面が見られ、磨り面中央がやや窪む。磨り面の表面は細かく波打っており、鏡面状を呈する縄文時代の磨り石との違いが見られ、また砥石とも思われない。図平面の右上に縦方向に擦痕状の筋が観察できる。左側横口の磨り面は下端部に刃物で削ったような傷が短軸に沿っていくつか見られる。右側横口の磨り面も上端部に同様な傷が見られる。左右横口の磨り面は鏡面状を呈し、傷の存在などから砥石としての面である可能性がある。砂岩。8号住居址南東隅出土。2は砥石である。棒状で3面に研磨面がある。上下両端が折れている。凝灰岩。12号住居址北壁中央直下の覆土中出土。3は砥石である。4面が研磨されており、上下2面は折れ面で磨り面がかぶっており素材段階の古い折り面と思われる。凝灰岩。3号住居址の南壁中央西より直下の覆土中出土。4は石英の磨り石である。磨り面ににぶい光沢がある。磨り面は細かな凹凸があり、中央が若干窪んでいる。6号溝中央の南側の遺構外から出土。5は水晶の結晶体である。褐色の鉄分が付着するものの透明度の高い良質な水晶である。加工は見られない。12号住居址中央付近の覆土中出土。

転用硯

第48図6は須恵器甕胴部破片を利用したいわゆる転用硯である。図右辺付近が磨り面の光沢が特に強い。その辺の破断面の稜線は鋭く、他の辺の稜線が磨耗しているのと違いを見せていている。このことからこの破断面は使用中ないしは後で破壊した可能性がある。上端に若干の加撃痕がある。11号住居址覆土中出土。7は須恵器甕の胴部破片を利用したいわゆる転用硯である。中央部の高い部分にごく弱い光沢面が見られる。周囲に弱い加撃痕が見られる。12号住居址覆土中出土。

鉄製品

第48図8は有袋の鉄斧である。刃部は折り返され鍛打されている。6号溝の13号住居址付近出土。9は鉄楔である。2号ピット群のピット番号38内から出土。10は鉄鎌である。遺構外出土。

第4章 結 語

東原遺跡は小銀冶遺構を持つ平安時代集落として注目される。12軒ある竪穴住居址は出土した土器、特に甲斐型壺や甕から甲斐編年Ⅳ～Ⅴ期と判断される。小銀冶遺構もⅣ期と判断された。これらの時期判断材料は、カマド出土や床面上出土の残存状況の良い個体であり、その住居址の廃絶時期を指し示すものと考えられる。各遺構の覆土中の土器など全体を見ると、最も古い時期のものは8号住居址などの覆土中に見られるⅣ期と思われる甲斐型壺であろう。そうすると、集落に最初に住居を形成したのはⅣ期段階であると考えてよいであろう。Ⅳ期は絶対年代は、最近では瀬田氏の案（瀬田1992）と櫛原氏の案（櫛原1992）があり若干ずれがあるものの、開始時期については概ね9世紀後半～すなわち825年前後としている。Ⅳ期の終了については両氏とも960年としており、東原遺跡の平安時代集落は825年から960年の間およそ135年を最長形成期間と考えることができる。

各住居址は覆土中の出土土器から判断して概ね廃絶段階の一段階前に形成されたと思われる。覆土中には周辺からの廃棄行為が懸念されるが、ほとんどの住居址が廃絶段階と同じかそれより一段階前の土器群を覆土中に持つものの、それより後のものを持たない状況にあり、懸念される廃棄行為はきわめて少なかったと思われる。おそらく、各住居址の住人は生活廃棄物の一部を住居址周辺に廃棄していて、住居址廃絶後に覆土中に流れ込んだものと理解したい。土器編年の二段階はおよそ50年であり当時の住居の構造を考えるとかなり長いが、当然この範囲の中の10年から20年程度であろう。そう考えたとしても、各住居址の出土土器からしていずれかの住居址の存続期間が重なっており、135年を最長とする期間の中でおそらく絶えることなくいずれかの住居址に居住が

見られ、生計活動がなされていたものと思われる。なお、11号住居址の埋設土器が甲斐編年図期のものであった点は特筆されるが、この時期のものはこれしか持ち込まれていないので、集落廃絶時に手に入れたか埋設行為そのものを住居址廃絶直後にになったかいずれかと解釈できる。

各時期別に住居址の分布状況を見ると、各時期2～7軒程度が見られることとなるが、前述の住居址の存続期間を考えると厳密な同時存在は2、3軒程度であろう。しかも、同時存在する住居址は団塊状にならず、調査範囲に広く分散する。この同時存在と考えるべき住居址の特長は大きさでも、カマド構造やその廃絶状況、遺物の内容など齊一性をほとんど持たず、それぞれ個性を主張しながらかなりの距離をおいて併存しているという状況である。時期を無視して住居址分布を見た場合に3群の団塊状の分布が指摘できるが、それぞれの中での時期やカマド構造などの共通性も希薄である。

しかし、注意すべきは墨書き土器である。6、11、12号住居址に「江」に似た墨書きが出土しており、6号住居址では甲斐型壺、12号住居址では黒色土器壺ではあるがいざれも3ヶ所に書かれている共通点もある。12号住居址がⅢ～Ⅳ期、11、6号住居址がⅣ期と時期が違うが、同じ字、同じ書き方がこの集落の継続期間の最初から終わりまで踏襲されていることになる。また、カマドの燃焼部に薄い板状を敷く構造が見られるが、八ヶ岳山麓の他の平安時代集落にはあまり見られない構造である。これも各時期に引き継がれており、集落としての文化的な事象が伝承されている状況も見て取れる。

これを解釈すると、一部の住人は集落形成初期から文化的に脈絡を持つ集団、おそらく血縁的につながる集団であり、そこへ他の集団が各時期ごとに出入りするような姿であろうか。

小鍛冶遺構は、こうした集落像の中で初期の段階に形成されるが、廃屋利用という考え方を入れると集落の継続期間の前半のいざれかの時期に使用されたものと思われる。遺構全体の分布図ではかけ離れた位置に孤立しているように見えるが、各時期別に見ると各住居址が分散しており、そうした中にあってはあまり奇異には見えなくなる。したがって、小鍛冶遺構は意識的に住居址群から分離して構築されたのではなく、分散的な集落構造の中にあると理解される。小鍛冶を行なう住人は初期段階にこの集落に参入し、後半期には他地域へ移動していくのだろう。なお、2号ピット群と特殊遺構と小鍛冶活動の関連性が推定されたが、特殊遺構の時期がこの集落の後半段階であり、小鍛冶遺構を使った活動とは関連性を持たない可能性がある。

引用・参考文献

- 新津 健 1989 「遺跡から見た村の歴史」「大泉村誌」大泉村
櫛原功一 1985 「東姥神B遺跡」大泉村教育委員会
佐野勝広 1983 「木ノ下・大坪遺跡」大泉村教育委員会
伊藤公明 1988 「方城第1遺跡」大泉村教育委員会
伊藤公明 1989 「大和田遺跡・大和田第2遺跡」大泉村教育委員会
伊藤公明 1990 「大和田第3遺跡」大泉村教育委員会
瀬田正明 1992 「甲斐型土器の年代」「甲斐型土器—その編年と年代—」山梨県考古学協会
坂本美夫・末木健・堀内真 1983 「甲斐地域」「奈良・平安時代土器の諸問題—相模国と周辺地域の様相—」(神奈川考古14号) 神奈川考古同人会
櫛原功一 1992 「宮ノ前遺跡における奈良～平安時代の土器・陶器」「宮ノ前遺跡」並崎市教育委員会他



東原遺跡南調査区北西部



東原遺跡南調査区東部



東原遺跡北調査区西部



1号住居址



2号住居址



3号住居址



4号住居址



6号住居址

圖版2



7号住居址



8号住居址



9号住居址



10号住居址



11号住居址



11号住居址埋設土器



12号住居址



13号住居址



小鋳冶遺構



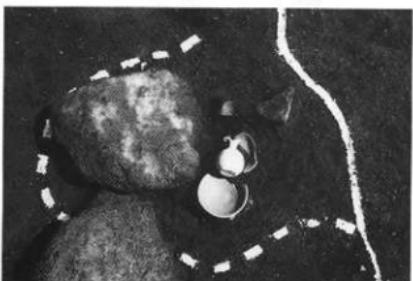
小鋳冶遺構の金床石と鐵打剥片ブロック



小鋳冶遺構の焼土ブロックと羽口



掘立柱建物址（1号手前、2号奥）



特種遺構



5号土坑と黒曜石埋納状況



小鋳冶遺構出土の羽口（右）と鐵澤（左）



10号住出土土師器壺（非甲斐型）

報告書抄録

ふりがな	ひがしはらいせき
書名	東原遺跡
副題	県営圃場整備事業に伴う発掘調査報告書
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター第153集
著者名	保坂康夫
発行者	山梨県教育委員会
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター
所在地・電話	〒400-1508 山梨県東八代郡中道町下曾根923 ☎0552-66-3016
印刷所	株式会社ヨネヤ
発行日	1998年3月25日

東原遺跡概要

所在地	山梨県北巨摩郡大泉村西井出字東原 25,000分の1地形図 谷戸 位置 東経35° 23' 50" 北緯35° 51' 45" 標高 900m 市町村コード 19406
調査原因	県営圃場整備事業
調査期間	1982年5月10日～10月31日
調査面積	8,500m ²
縄文時代	
主な遺構	黒曜石原石埋納土坑
主な遺物	黒曜石原石3個、諸磯b・五領ヶ台・曾利・堀ノ内・加曾利B破片
平安時代	
主な遺構	竪穴住居址12軒、小鍛冶遺構1基、掘立柱建物址2棟、土坑9基、溝3本、小ピット群2群、特殊遺構1基
主な遺物	甲斐型坏・皿・甕・小型甕・置きカマド、黒色土器坏・碗・皿、甲斐型・黒色土器以外の坏・皿・甕、ロクロ整形小型甕、須恵器坏・甕・甕・突帶付四耳甕、灰釉陶器碗・甕、フイゴ羽口・鉄滓・鉄斧・鉄模・鉄鎌・延石・磨り面を持つ砾、水晶、墨書き土器
特記事項	鍛打剥片の厚いブロックが周囲にある金床石を中央に持つ小鍛冶遺構、灰釉陶器小瓶1個と甲斐型坏2個が重なりあった特殊遺構、住居址南壁直下に合わせ口の坏と皿を埋めた埋設土器
中世以降	
主な遺構	土坑2基、溝1本

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第153集

東原遺跡

印刷日 1998年3月10日
 発行日 1998年3月25日
 編集 山梨県埋蔵文化財センター
 発行 山梨県教育委員会
 印刷所 株式会社ヨネヤ

